Lip magic 2 ~sweet season~

瀬谷和泉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
＊＊Ｌｉｐ　ｍａｇｉｃ　２＊＊　～ｓｗｅｅｔ　ｓｅａｓｏｎ～

【Ｎコード】
Ｎ２９９９Ｑ

【作者名】
瀬谷和泉

【あらすじ】
ドＳな俺様日本史教師・諏訪センセの手に落ちた梨緒。
晴れて恋人同士になったふたりに待っているのは甘～い学園生活……のはずだったのに！！生意気な新入生には狙われる、進学重視への方向転換を掲げる理事長代理には目の敵にされるしで、大ピンチの梨緒。
進むべき道はまだ未定、任された剣道部、諏訪センセとの恋もしたい。高校生活最後の年は、前途多難で大忙しの予感。ドタバタラブコメディ、再び。

＜1＞

「甘い物は好きじゃない。菓子メーカーの思惑に便乗してやる義理もない」

あっさりと、バッサリと。

こちらの期待も爽快なくらいに一刀両断。じきにやってくるバレンタインデーを忌み嫌う男がここにいる。

高級感たっぷりの黒のレザーソファに深く腰掛けて、何語かすらも判別のつかない本のページを白い指がぱらりと捲った。さらさらな手触りのイエローブラウンの髪、鼻に乗ったメガネは細身のシルバーフレームに薄いオーバル型レンズの”自宅仕様”。

そんな彼を背に悲しいかな、ローテーブルで参考書開いて勉強中のあたし・時任梨緒（ときとうりお）十七歳。

晴れて（？）この度、そんな男の彼女になりました。

「……つまんないの」

「くだらんイベントに色めき立つ余裕があるなら、確実に進級出来る結果を出せ。留年されてまで淫行教師の陰口に耐えるつもりはない」

「淫行教師って……自分で言っちゃうくらい、一応ちゃんと自覚はあるんだ？」

意外の二文字を表情に丸出しで彼を振り返ると、頭に重い衝撃がやって来た。

「いったぁ！！　なにすんのっ！？　それ、固いヤツ！　分厚いヤツ！！」

「俺は“一応ちゃんと”した大人だ」

（……よく言うよね）

激痛を涙目で訴えると、人の揚げ足をとったふてぶてしい態度で返してくる。再び視線を落とした手に、がっちがちのハードカバー本とかホント、あり得ない。

周囲から“不釣り合い”と非難されるあたしなんかを好きだとか嘘でしょ、と突っ込みたくなる。

――そう。

この男・諏訪伊織（すわいおり）の手に、あたしは落ちた。

教師と生徒でオトナとコドモ。剣道部顧問とその部員。容姿端麗なサド男と、おチビでおバカな純情少女。

肩書きを述べよと言われたら、あたしの口からはまだまだ飛び出すストックが控えてる。

簡単に言うと、世間的にはなにかと壁が立ちはだかるワケありカップルってわけ。けど、置かれた状況も世間の目も、スリルに変えて楽しんでいるのがこのオトナの方だ。

「自覚があるから色々抑制してるんだろうが」

「はぃぃっ？？？　センセの行動に、そんな言葉はかすりもしないと思うんだけど！？」

抑制なんて微塵も感じさせない日々の行動パターンを思い浮かべたあたしは、図々しいセリフに思わず吠えた。

「宣言してから好きだと言わせるまでに半年以上、ヤらずに一年近く耐え忍ぶなんてことは、これまでの俺にはあり得ない」

「いいオトナは“ヤる”とか言わないしっっ！」

ったくさ、なんの歴史自慢よ、それ。

少々ムッとしつつ、彼のお遊び事情は周知の上で好きになった人だから仕方ない。あたしなんかにちょっかい出すまでは、来る者拒まず適当に遊んでた人なんだもん。

「あたしだってね、付き合う前から散々キスとか！　他にも……イロイロされるような経験なんてしてきてなかったよ！　それこそあ

り得ない！！」
「そこでキレる意味が分からん」
「だってっ」
過去の歴史に連なる人たちみたいに、さっさとそーいう行為をさせろと催促してるのかと思うじゃん。“お堅いヤツ”って呆れてるのかなって。
「センセ……気持ちの準備が出来るまで待つ、って言ってくれたのにさ」
自分の気持ちを自覚して、言葉にして、晴れて恋人となってから数ヶ月。何度もそんな場面に出くわしては消滅させてきた。
強引に迫って来る割に肝心なところは強要しない、彼の優しさに甘えてるのは分かってる。
恋愛偏差値ゼロのあたしが、飛び抜けた偏差値を持ってるだろうセンセを前に、最後の一線を越えられないのは臆病なだけだってことも。
「だから指咥えて待ってるだろ。欲しい物を目前に辛抱強く我慢する、過去に類をみない自分に感心してるという意味だ。勝手に勘違いしてキレるなバカ」
視線は手元に落ちたまま恨めしそうに声のトーンを落とすから、それ以上は何も言えなくなる。
「無駄口はいいからさっさと今日の分まで終わらせろ。……まぁ、待たせる時間が延びればそれだけまた、お楽しみの時間が増えるだけだがな」
小さく弧を描いた口元が“お楽しみ”の内容をあたしの脳裏に彷彿とさせる。
イコールそれは、身体に刻まれた快楽の記憶。
「やっ、やるってば！！」
この人は有言実行、初志貫徹。調子に乗せると果てしなく度が過ぎる。
あたしは参考書との睨みあいを続けることに、必死になって集中

した。

本日のノルマが無事達成したのはそれから一時間後。

すかさずノートを取り上げられて“教師モード”の厳しいチェックが入る。いつもながら、緊張の時間。失態を見せたら、この後に待つお戯れタイムの中で何されるかっ！！

「今日も凡ミス連発したら遊んでやろうと、楽しい玩具を用意したんだがな。野生の勘で察したか」

「ひっ」

表情を柔らかくしながらの末恐ろしい発言は、通訳するところ合格ということらしい。

簡単に安心を与えないところがつくづく、センセらしいって思う。オモチャってなに、オモチャって！！　ナニでナニしようとしてたってのよ！！

真っ赤になっているだろうあたしの頭に乗せられた手が二・三度左右に髪を撫でる。

「回答時間も少しずつ短縮してるようだし――学年末テストまでその調子を保てよ」

頬にひんやりとした彼の手が触れれば、顔の熱との温度差にびくりと背中が震えた。

この後に軽いキスをひとつ落としていくのがお決まりのご褒美だった。彼の顔が近付いてくると、反射的にぎゅっと目を瞑って受け身態勢を取る。

だって、照れ臭いんだもん仕方ないじゃん。

――が。間近で気配は感じるけれど、いつまでもやって来ないご褒美にあたしはそっと薄眼を開けてみた。

「いつものアメにも飽きたな。やっぱり出すか。ムチ用のとっておき」

とか！！　キスを寸止めしながら恐ろしい事を言う。
回避されたハズの件がいつの間にか復活して、センセを突き飛ばしてしまった。
「いいっ！　いらないっ！！　飽きてないから！　あたしはいつものご褒美で十分間に合ってる！！」
「手に入れたら試してみたくなるだろ」
「やだやだやだやだ、絶対やだっ！！！　試すならセンセが自分で試してよっ」
「馬鹿も究極までいくと発想が突拍子もないな。あいにく俺には使えない――というより使ってみたところで何の面白味もない」
ねぇっ、なにっ？　一体どんなオモチャ手に入れたっていうのこのヒト！？
恐怖と不安で顔が引き攣るあたしを、からかい顔のセンセが視線で、腕で、捕えてくる。
彼の部屋で過ごす時には、まず勉強。ふたりきり。外で過ごす時だけ限定の、お約束。きちんと付き合い始めてから自然と……ううん、きっと彼がせめてものケジメにと作ってくれた流れだった。
ご褒美のキスの後、抱き寄せられた瞬間から始まる、恋人時間。教師と生徒から、彼と彼女に変わる。
待ち兼ねたように絡みついてくるキスが、身体の奥をきゅんと疼かせた。
「ふぁ……っ」
ソファに横倒しにされ、素肌に乗せられた彼の掌があたしの全身を隙間なく滑って、ひとつひとつの感触と反応を確認していく。ブラを捲くし上げられて強く胸を吸われれば、鼻にかかったような声を上げてしまう。
熱くて柔らかいざらついた感触が、ねっとり胸の尖りに絡みついてきた。
「っやぁ」

指が下着の上から敏感な部分を行き来すると、誘われるように潤いが滲み出てしまう。情けないくらいあっさりと。

「文句なしの反応だな」

するりと入り込んできた指が立てた水音がイヤらしく聞こえる。顔を背けようとすれば、増やした指を出し入れして新たな刺激を与えてくる。

「だめっ……センセ。……んっ」

「玩具は返品してやる」

「……ぇ？」

「直に感触を味わいながら啼かせてる方が、よっぽどいい」

「ひゃ、ゃぁっ」

溢れる蜜が充満した中で、くいと折られた指先が内壁をなぞった。官能的な刺激に堪らず体を捩る。何度も啼いて応えれば満足そうに細められるアッシュグレイの瞳に捉えられながら、必死に縋りついてしまう。

「梨緒」

蕩けてしまいそうに艶めいた、下の名前を囁く声が鼓膜を伝って全身に染み渡る。

愛されている。あたしはこの人に、強く求められているんだって。あたしの全部で感じながら、嬉しさに心は震えるのに。

「……すき」

こんな時にしか言えないような情けない自分だけど。

あたしの中で膨れ上がった彼の存在が愛おしくて仕方ない。

センセが、好き。

ホントは何度だって言えるくらい、大好き。

＜2＞

“諏訪のはね、特別なのよ”

キスから始まる行為の最終目的を“貫通式”と呼んだのも、彼女だった。中学からの親友・紗枝（さえ）は美人で器量良し。彼氏を欠かしたことがない。

けど、性格とお口の悪さは少々難ありで――実はセンセともセフレだったという衝撃の過去を持つ。だからこそ、なんだろうけどさ？

あたしは男性経験といわれるその行為は当然彼が初めてで。

噂には聞いていた下半身の激痛にひたすら叫んでいた初体験から、交わること数回。相変わらず慣れない異物感に、紗枝のあけっぴろげな言葉を思い出していた。

「もう。センセのバカっ、大っキライ！　センセの痛いんだってばぁぁぁっ！！」

そんな“特別”の凶器（？）を持つ彼に夜通し責め続けられた、恋愛初心者の身にもなって欲しい！

公共の場では決して声にすることの出来ない心の叫びを、誰もいない早朝の剣道場であたしは思い切り吐き出した。

予定外の外泊で制服姿のまま。

家に戻るには時間が足らなくて、けど部員達の冷やかしにあうのも嫌だからと。センセがシャワーを浴びている間に道場の鍵をこっそり持ち出して、マンションから逃げるようにして直接やって来た。

「慰めるっていうか、逆に苛められた気がするんだけど」

とっとと道着に着替えたあたしは、三月の肌寒い道場内で手足を擦り合わせながら一連の出来事を振り返ると、顔だけがやたらと熱

かった。

それは、昨日のこと。

卒業式を明後日に控えた放課後に開かれた、剣道部毎年恒例の“追い出し会”。

練習を終えた道場内がパーティ会場に早変わりするとワクワクするのは昨年も同様だったのに。今年はなにかが違ってた。

宴が終わりに向かうにつれ、うるうると滲んでは零れ、じわりと滲んでまた零れ落ちる涙が止まらない。

「やっぱりムリですっ！　先輩もう一年残りましょうよぉ」

「バカ言ってんじゃないの、いい加減に諦めなよ梨緒」

先輩たちとの別れを心底淋しく思う一方で。

置き土産とばかり、あたしに主将を任せるなんて言い出した事をなんとか却下してもらえないかと、必死の交渉をした。

「主将なんてキャラじゃないの分かってるじゃないですかー」

「あのね梨緒？　その辺少し察してよ」

不意に声を顰めた部長があたしに耳打ちしてきた。

「諏訪先生と堂々ふたりきりになる理由が出来るでしょ？　あたしたち三年からの粋な計らいなんだからね？」

「そんなのいらないですってば」

結局撤回されることはなかったけど、コイバナ好きの賑やかな先輩たちがあたしはホントに大好きだった。

会の最後を先輩たちからの感謝と激励の言葉で締めくくられたら、目から鼻から大洪水。早々に役立たなくなったハンカチに代わって大活躍だったハンドタオルも、水気を含んで重たくなるのは束の間だった。

「これ使って冷やした方がいいよ」

お開きになった後、昔馴染みで同級生のカイ―橘海里（たちばなかいり）―が差し出してくれたハンカチはひんやりと冷たくて気持ち良かった。クーラ

ーボックスから拝借したのだという保冷剤を包んだそれを、そっと瞼に宛がった。
「ありがと」
「梨緒が先輩達を頼りにしてたように、オレ達もならないとね」
あたしより遥かに頼りになるのは間違いないカイもまた、男子の主将に任命された。
「あたしには難しそうだからさ、せめて実力だけは胸を張れるセンパイでいられるように頑張ることにするよ。あ、あとカイの足引っ張んないように」
あたしらしく、出来ることから少しずつ。
いてくれるだけで心強いと思われるような先輩を目指して、頑張ろうと誓った。

「梨緒。ちょっと来て」
道場の外で顧問であるセンセを囲んでいた先輩が、あたしを見つけて手招きする。
「諏訪先生にあんたのこと、ヨロシク頼んどいたからね」
「はあ」
「無茶しない、ヘタしない、遊んでポイしないって、三ヶ条取り付けといたから！！」
「無茶？　ヘタ？」
なんの話をしているんだろうと首を傾げるあたしに、「バレンタイン、盛り上がったらしいじゃん」と顔を寄せてきた先輩の顔が意味ありげな笑みを浮かべている。
……。
幾ばくかの沈黙の後、あたしはおののいた。
「な、ななっ、なんでそれをっ！？」
数週間前のバレンタインデー。
確かにあたしはその日ついに、というかようやくというか、【貫通式】を迎えましたけどっ。紗枝以外には話してない、はず。

あたしの口を塞いだ先輩がこっそりと打ち明けてくれた。
「だって次の日、先生ノーネクタイでキスマークちら見せしてたでしょ？　いいことあったんですか、って聞いたら“まあな”ってめっちゃ笑顔で答えてたし。あんな嬉しそうな顔みたの初めてだったから、絶対梨緒となにかあったんだって思ったんだよね」
「え」
一気に顔が、熱くなった。
そこまで大喜びしてくれていたとは……知らなかったから。
「良かったね、梨緒」
「……はい」
センセがあたしの所有者発言をした当時、否定的な意見が多かった生徒の中で「やっぱりね」と好意的な態度を見せてくれた先輩たち。少々お節介なところもあったけど、強力なサポーターには違いなかった。
故に見届けた感があるんだろう。
「先生が浮気したとか、変なこと強要するとか、何かあったらすぐに橘くん頼るんだよ？　あっちはいつでも受け入れるって言ってくれてたからね」
変なこと強要されるのは日常的なんですけど……とはさすがに本人を前に言えない。
ちら、とセンセの顔を窺ってみる。
「駆け込み寺まで手配済みとはお前らも暇だな。余計な根回ししてくれるな」
腕組みをしてすぐ傍で黙って話を聞いていたオトコが、口を開いた。
「先生にも少しくらい危機感持ってもらわないと、梨緒なんてすぐに飽きられちゃうじゃないですか。保険みたいなもんですよ」
「せっ、先輩っ！！　保険て！」
散々背中を押しといて、本音を今ここでバラさなくてもいいと思う！

「誰が飽きるか。まだまだ開拓の余地があるってのに」

口元に薄っすら笑みを浮かべながら返した一言で、悲鳴のような声を上げた先輩たちのボルテージが一気に急上昇。

「きゃーっ、先生、ぶっちゃけ～～！！」

「平気な顔して惚気るところが諏訪先生らしいけどっ」

「ああーっ、もうさっさと帰ろ。なんか虚しくなってきちゃった、梨緒のクセに梨緒のクセに梨緒のクセに～～っ」

興奮したのか八つ当たりなのか良く分からない先輩のひとりに、両手の拳でこめかみをぐりぐりされて悲鳴を上げた。

「センパイ！！　いいっ、痛いっ、痛いってばぁっ！！」

「頑張んなさいよ、梨緒。あたし達みんな、卒業してもあんたと先生のこと応援してるからね」

がっしりと抱き締められて、部長が耳元で囁いた。

「周りの陰口とか嫌がらせなんかに負けないで！」

「どんなにナイスバディで美人な女の人が来たって、先生はチビでおバカなあんたが可愛くて仕方ないんだから、信じてあげてよ」

他の先輩たちもそれぞれエールを送ってくれて、肩を叩いてそれじゃあと帰っていく。

見送るあたしの目には再びじんわりと涙が滲み始めた。

「二日後にまた、そのブサイク顔を見ることになるのか」

「う……うっさいなぁ！」

憎まれ口を叩くオトコを睨み上げた。

人がしっとりと悲しみに浸っているのを分かっていながら、この仕打ち。

「これからじっくり慰めてやる。来い」

誰もいなくなったその場所で、差し出された手。

抱き締めて頭を撫でるだけじゃないことも、連れて行かれるだろう場所も分かっていたけど、あたしはその手を取ったんだ。

（――だからあんまり文句も言えないんだけどさ）

連れて行かれたセンセのマンションで、使用人が用意したと思われる美味しいスイーツをご馳走になって。甘い言葉で口説かれながら、あたしも戴かれてしまって。

結局朝まで、隅々堪能されるハメになってしまった。

「あの体力どこからきてるんだろ。こっそりどっかで鍛えてんじゃないのかな」

運動神経は良さそうだけど汗が似合わないハズのセンセが、あたしの上では体を揺らし息を乱して汗まで浮かべるんだから。

長時間に渡って何度も繰り返してたら、体力だって相当奪われてるはずだ。だから密かに体力づくりでもしているのではないのかと。

（きっとそう、絶対そう。でなきゃあんな動き……）

「お、思い出しちゃダメっ、あたし！！」

乱れた息に混じってあたしを呼ぶ声が蘇って、体が勝手にどうにかなってしまいそうだった。振り切るようにして両手を上に引き上げ全身を伸ばす。

そこへがらりと開かれた道場の入り口。

「超さむっ！！　んだよこれ、ありえねー」

聞いたこともない声は部員のものじゃない。

そこに、見たこともない男の子が現れた。オレンジに近い茶髪、紫のダウンベストに白いパーカー、細身のパンツを纏った脚を擦り合わせて険しい顔。

「さっきの雄叫びなに、あれ」

あたしがいるのにお構いなしで、靴を脱ぎ棄てズカズカと上がり込んできた彼を制した。
「べっ！！　別にちょっと憂さ晴らしっていうか――ってちょっとキミ！！　キミこそなに？　勝手に入って来たらダメだよ」
「見学。つか、下見？」
「それなら練習は9時からだから、出直してきて」
「別に練習見に来たワケじゃねーし。あんたちっこいね、今時小学生でももうちょいデカくね？　ま、お陰ですぐ分かったけど」
シシシ、と歯を見せて笑う遠慮も謙遜もない彼の態度に嫌悪感を抱いた。
「余計なお世話っ！　……あたしだって分かったって、どういうこと」
「さーね。でもリオ、ってあんたでしょ」
ウチのガッコの生徒なんだろうか。
こんな生意気で目立ちそうな外見の下級生がいたら、目に付きそうなもんだけど。
「そうだけど。初対面のクセに呼び捨てにしないでよっ。それに！入って来ないでって言ってるの、聞こえないの！」
「冷てー。このクソ寒い中わざわざ見に来てやったんだから。感謝してよ」
「頼んでもいないのになんで感謝しなきゃなんないのよっ」
「ガキかよ、あんた」
にやりと引き上がった口元は、からかいの色が含まれる見慣れたそれとはまた違う。
詰めてくる距離に対して一歩、また一歩と後退していたあたしは、ついに壁を背に行き止まってしまった。得体の知れない彼に視線を定めたまま。
追い詰められ顔の両側に腕を衝立られて、いよいよ逃げ場を失ったあたしは威嚇するように叫んだ。
「なんなのよっ！！」

黙っていたら脚が竦んでしまいそうな、妙に危険な香りのする彼に。
「オレ？」
目線を合わせた顔が、耳元に寄せられる。
笑いを含んだ声で囁かれた。
「もうすぐ一年生」
新入生？　ってことは中学生!?　嘘でしょ？　全然見えないから!!
二つも年下だと分かった途端、妙な余裕があたしの中に生まれた。
「離れてよ！　中学生のクセに色気づいてんじゃない!!　人呼ぶからね！」
自慢の腕力でぐいと目の前の胸を押し返したあたしの両腕が、簡単に捕えられてしまった。振り切れないほどの強い力で壁際に押しつけられる。
ぞくり。恐怖に背中が震えた。
「どーぞ？　その前に消えるし」
どこまでも余裕たっぷりの声を響かせて、覆い被さるようにあたしの視界を塞ぐ。
まったりと唇を食まれたと自覚したのは、離れてから数秒後。
「な……に」
「よろしく。リオセンパイ」
両腕を解放されて呆然とするあたしの視界から忽然と消えた男の子。
驚きと衝撃でドキドキと鼓動が鳴り続ける胸の奥。
センセのとこから逃げ出したりしたから、罰でも当たったんだろうか。
床にへたりこんだあたしは、そんなことを思っていた。

<1>

ベストなタイミングで満開になった桜が迎える春、４月。
ついに今日から三年生、いよいよ高校生活最後の学年が始まる…
…というのにあたしの朝は相変わらずで、新学期早々朝寝坊。
ギリギリに駆け込んだ昇降口前には紗枝が腕組みをして出迎えてくれていた。
「おっそーい！」
「さ、紗枝っ、おはよ！　ごめんっ寝坊しちゃった！！」
「初日から寝坊なんて余裕ねぇ。また夜中まで漫画でも読みふけってたんでしょう？」
「あ……あはは……ピンポーン……」
「夜更かしした割に、めっきりお肌が艶めいちゃってるのは誰かさんのお陰ね」
「そそ、そんなことないって！」
勘の鋭い紗枝に最初から隠し事なんてするつもりもないんだけど。
自分から報告したのは最初きりなのに、結局いつもこんな感じで明るみに出てしまう“カレ事情”。
一度解禁になったのをいいことに、春休み中ずっと、と言っていいほどセンセに散々“可愛がられ”たなんて。自分からは口が裂けても絶対言えないから、ある意味助かってるというか。
「それよりさ。クラスどうだったっ？」
「三人仲良く一緒よ。あぁ違ったわね。四人揃って、ってとこかしら」
「四人？　あたしと紗枝と……」
昇降口の入り口扉に貼り出されたクラス編成。紗枝が指差す三つ目のクラスで見つけたそこに書かれた名前を見つけるのと、彼女が言うのはほぼ同時だった。
「橘くんと、諏訪もね」

カイの名前はともかくとして。
そこにまさかの【担任・諏訪伊織（すわいおり）】の文字があった。
「ええっ！！　センセ！？　なんでっ？　担任持ちたくないってワガママ通してたんじゃなかったの！？」
「それがねぇ梨緒。諏訪以外の先生たち総取っ替えよ。誰一人残ってないの」
「うそ……なんで？」
「さあ？　どういうことか私にも分からないわよ」
先生が総入れ替えなんて、普通だったらあり得ない。しかもセンセひとり残してなんて……担任を持ったこともなにか関係があるのかな……

『間もなく始業式を行います。生徒は体育館へ移動して下さい』

呆然としかけたところへ校内放送が流れてあたしは現状に我に返った。
「わわっ、やっば！　紗枝、先に行ってて！　あたしソッコー荷物置いてから行くから！！」
「急ぐのは結構だけど、転んで怪我していきなり保健室行きとかやめてよ」
「うはは。気をつけとくー」
忙しく上履きに履き替えて、今までとは廊下を逆に曲がる。先の階段を三階まで昇れば新しい教室。階段を一段飛ばしで駆け上がると、二階付近でぞろぞろと流れるように下りてきた生徒の波に遭遇する。
「なにあれ。彼氏が担任だと、遅刻もナシにしてもらえるわけ？」
「よゆーあるぅ」
擦れ違いざまに野次が聞こえて足が止まる。ひんやりとした壁に背をつけて振り返ったけど、声の主は分からなかった。
（今の、あたしのことだよね？）

担任って立場になると、あんな言い方されるんだ。
学園内では“公認の仲”なんて言われてるあたしとセンセ。生徒の前で「誹謗中傷は全部引き受ける」なんて宣言してくれたお陰で実害はほとんどなかったものの、陰で疎ましく思われてるのは知ってた。
「なんで担任なんて引き受けちゃったかな、センセってば」
よりによってあたしのクラスなんてさ。色々面倒なことになるの分かってるハズなのに。断れないような人じゃないことは確かだから、センセが納得して引き受けたってことなんだろうけど。
「なに考えてんのか分かんないよ」
「人に文句つけてる暇があったら、さっさと荷物置いて移動しろ。僻まれるのが嫌なら二度と寝坊しないことだな」
「あ……センセ……」
生徒の波が途切れて響いた低い声。
姿を見せたセンセはほんの一瞬、目を合わせただけだった。すっと横を過ぎていく空気が、壁と同じようにひんやりと冷たかった。
（淋しいとか、思っちゃダメだ）
頬を叩きながら、まったりと甘く過ごした春休みの恋人モードから抜け切れていない自分を叱咤した。

集会の類で生徒達のざわめきは、常だった。
ところが。理事長代理と紹介された人物が壇上に上がって生徒達を一瞥すると、体育館内が一瞬にして静寂に包まれたから驚いた。
半端ない威圧感を大放出しているのは、理事長代理の京極という人。
「今回理事長は体調を崩され療養に入られた。ここ数年、急激に学園の風紀が乱れたと気に病んでおられたので、心労が重なったと思われる。代理として就任依頼を受けた以上は、私の手で風潮を一新し理事長をお迎えするつもりだ」
綺麗に左から横分けされた髪型のせいだけじゃないと思うけど。

紳士服売り場に並ぶマネキンみたいな、体温を感じさせない人だった。

「こわそーだね、あの人」

遅れて並んだクラスの女子最後尾。隣にいるカイにぽそり、囁いた。

「そうだね。容赦しない感じがする」

「……やだなぁ、なんか」

このピリピリとした雰囲気も、壇上に立つあの人も。

自由で伸び伸びした校風が好きだったんだけど。

「遊びや恋愛事にうつつを抜かす暇など、君たちにはない。より現実的に感じてもらうため新たな教師陣を揃えた。今後、この学園は進学重視の授業内容にシフト移行していく。そのつもりでいるように」

ずどん、と背中を撃ち抜かれたような衝撃だった。

（進学重視？　それって授業内容が難しくなるってこと？？　……まずい。それは非常に、まずいよぉぉ）

だってあたしは剣道の特待生として入学し、今までやって来た。正直学業の成績は学年スレスレ。なんとか留年だけは間逃れるようにしてきたのに進学重視の授業内容なんて、ついて行けっこない。……っていうかスポーツ特待生制度自体、微妙じゃない？

あたしは急な不安に襲われながら、真新しい顔触れの大人たちを眺めた。ずらり並んだその中に唯一見覚えのある顔がヤケに目立って見える。

――あれ？　と首を傾げた。

おかしなことに気付いてしまったのだ。

教師全員、同じような細い銀縁メガネを掛けている。カッツカツに四角い黒の太縁メガネ仕様のセンセが、ひとり浮いて見えるのはそのせいだ。

なんでだろう、単なる偶然？　と思う一方で。実は理事長代理っ

てメガネっ子好きで、教師を手配するときにメガネまで支給したんだろうかとか、現実逃避思考に走ったあたしはつい面白おかしく考えてしまって。

「ぷっ」

しん、と静まる式の最中に。場違いに噴き出してしまったのだった。

当然集まる周囲の、いや、生徒中の視線。

更には壇上からも、突き刺さるような視線。

吹き矢でも飛ばされて倒れる事が出来たなら、そっちの方がよっぽどよかった。

（き……気まずいっ、どうしよう！！）

救いを求めるように視線が動いたのはごく自然だった。立ち並ぶ生徒の隙間から覗き見たセンセは、露骨にあたしをシカトする。隣のカイからはため息が聞こえる。

ちょっとちょっと！！　お願いだから、誰か何とか言って突っ込んでっ！！！

＜2＞

教壇を前に立つセンセが、ほぼ正面。
彼が教室へ入って来るなり、クラスメイトの視線がちらちらとあたしへ向けられる。今までは二日に一度くらいのことだから別になんてことなかった。
（めんどくさ……）
少しだけ、気が重くなった。
同時に頑張れと背中を押してくれた先輩たちの声が蘇って来て、気持ちを奮い起す。

「――以上。俺が担任としてこのクラスを受け持つ上での方針だ。質問ある奴」

どんな話をしてたのかさっぱり分かんない。
項垂れて視線を伏せ気味だったあたしの耳に、すぐ後ろの女子を指名するセンセの声が聞こえた。
「担任が特定の生徒を堂々特別扱いするの、見せつけられるの嫌なんですけど。っていうか、理事長代理が言ってた“乱れた風紀”って先生と誰かのことじゃないんですか？」
度胸あるなー、というのがまず感想で。次には鋭い針でちくりちくりと背中を突かれるようなユウウツがやってくる。
この声、聞き覚えがある。さっき階段で遅刻がどうとか嫌味飛ばしてたあの声だ。
よりによって席が前後なんてデキすぎ。
しかも彼女の言う乱れた云々のくだりは、あたしたちのことかなって思った節があるだけに耳がイタイ。他にもクラス全員が、ううんきっと学校中の生徒がみんな、同じように受け止めたんじゃない

だろうか。
　強気であたしとの関係を押し通してきたセンセにとっても、今回ばかりはバツが悪いだろうと諦めにも似た同情すらしたのに。

「ああ。確実に標的にされてるな」

　あっさりと。はっきりと。
　容認するセリフに、あたしは思わず顔を上げた。
「旧教師陣の中から俺だけ残して担任に就かせたのも、お前のように反発する生徒を増やす為だと思ってる。学園内の膿を出し切って一掃するつもりだろ。ただ、ひとつ言っておく。俺は就業中に、生徒を特別扱いした覚えは一切ない」
「だって先生、追試なんて言ってふたりきりでいるの皆が知らないとでも思ってるんですか？」
「ふたりきり？　モノは言いようだな。追試も三度目になれば国宝級最低レベルの成績の奴しか残らない。救いようのない馬鹿の相手なんて、必要を迫られて致し方なくに決まってるだろうが。担当教師じゃなけりゃ俺だってパスしたい」
　うわ、ひど。そうなの？　嫌々追試勉強みてたわけ？
　ケチョンケチョンに言われても反論できず、肩を竦めて小さくなるあたしの背後で唖然とした声がぽつり、漏れた。
「……え」
【風紀を乱している誰か】とのことを認めたと思ったらいきなり非難する、センセの言動に呆然とする気持ちも分かる。
　ごめんねー驚かせて。びっくりするぐらい成績悪いんだよー、あたし。
「クラス全体に提案だ」
　企み口調になってることに気付いて、彼の口から何が飛び出すのだろうとハラハラした。またとんでもないこと言い出さなきゃいいけど。

「突然の進学重視システムへの移行で、今後他にもついていけない奴が出るはずだ。俺も初めて担任を持って留年の生徒を出すのはプライドが許さない。定期テストで赤点くらった奴をクラスメイトのお前らが補助しろ。こっちの特別補修を組む手間も省ける。他の担当教師にもそう伝えておいてやるから」

ええー、と面倒臭そうな声があちこちで上がった。

そりゃそうだよ。誰が好んでお荷物の世話をするっていうの。

「該当する奴が再追試になった場合、指導不足ということで全員揃って追試を受けてもらうことになるがな」

にやり。

勝ち誇ったような笑みを浮かべたセンセに、桜吹雪が代名詞のお奉行様がダブって見えた気がした。

「従来通り特別補修制度を続けるか、お前らが尽力してやるのか。選ばせてやる――特別扱いと不平を唱えたお前。どっちにする」

鋭い視線があたしを素通りして後ろの彼女へ向けられる。

面倒臭いことを引き受けてくれるなという圧力を感じる教室中の視線もまた、一緒に。

「じゅ、従来通りで……いいです……」

涙混じりにも聞こえた声に、あたしはちょっとホッとした。

「あーもういい気味ったら！」

緊張のＨＲを終えて、午前中で解散となった廊下は生徒たちが溢れてる。

紗枝が必要以上に大きな声で叫ぶから、あたしは他人のフリをしようとしたのに。腕を絡めて引き寄せられて、カイと三人で並んで歩くことを余儀なくされた。

「ちょっとやり過ぎかと思ったけど、結構爽快だったね」

「あの子、一年の時に諏訪にフラれてるの。二年越しの逆恨みってやつ？　女々しい女」

飛び出した裏ネタにこっそりなるほどと納得しながら。他にもきっといるだろう予備軍の存在を思うと、軽い頭痛がした。

「諏訪が担任の肩書きに縛られてどうなることかと思ったけど、今日の振る舞いを見てる限りは問題なさそうね。ちゃーんと、梨緒のこと守ってくれたし」

「守るって……別にそーいうわけじゃないと思うけど」

確かに非難の眼差しから救われた感じはあったけど。その割には途中、あたしが傷つくようなことかなり言ってたよ？　あのひと言はまだ引き摺ってるんだから。絶対追及してやるんだから。

だけど結局……。

「どうかした？　梨緒」

黙り込んだあたしを覗き込むように、カイが訊ねる。

「ううん。なんでもない」

結局一度も、教室の中でセンセと目が合うことはなかったなって思っただけ。まともに交わした会話も階段での素っ気ないやり取りだけだし。

割り切らなきゃと思うのに、やっぱり春休みボケから抜け出せないあたしはガッカリしてる。

「さっきはありがとうございましたって、お礼のひとつも言ってきたら？」

見抜いたように紗枝に言われた。

ちょっとだけ会いたいって。話がしたいって、欲求。

一度家に帰れば会うことも話すことも出来るのに。今じゃなきゃヤダなんて、ワガママって思われるのが嫌で抑えてる気持ち。

紗枝は意地悪だ。我慢でいっぱいに膨らんだ風船みたいなあたしを、突いて裂こうとする。

「ほら、お礼する！！」

腕を解いた紗枝に逆向きにされると背中を押された。

とん、と前方によろめいた勢いで、戸惑いが振り払われた足はようやく動き出した。

早く、早くと。だけど乱れた息がばれないようにと。
ワクワクとドキドキを抑えつつ辿り着いた資料準備室。ここはセンセに宛がわれた、いわゆるプライベートルーム的な仕事場。一方であたしたちが時折甘い時間を過ごしてきた、特別な部屋・通称諏訪の間。
大きくひとつ深呼吸して、ノックをしてから扉を開いた。
「あれ。開かない」
力任せに引いてみるも、がっちりと施錠されている様子だった。
この部屋に鍵が掛かってたことなんて一度もないのに。
散々迷って緊張してここまで来たのに、拍子抜け。
「……なんだぁ」
「この部屋に何か用でも？」
「うわっ！」
い、いつの間にっ！！
あたしの背後に立っていたのは、無表情代表みたいな理事長代理だった。

「誰に会いに来た、と訊ねた方が正解か」

嘲るようにふんと鼻であしらって。
見下ろす視線も物言いも、虫けら扱いするみたいに薄くて雑で。
センセが言ってた通り、この人はあたしたちを標的にしてるんだって確信した。

＜3＞

グレーの細身スーツを身に纏い、七：三に分けられたブラウンの短い髪の下、上半分だけフレームのついたメガネを掛けた男の人。京極理事長代理は、病気療養中だという理事長の代わりにしては若すぎる三十代くらいの人だった。

「弄ばれているのにも気付かないとは、愚かな女だ」

眉一つ動かさず吐き捨てるように言う。

一瞬耳を疑った。

仮にも理事長代理って身分で、生徒を”愚かな女”呼ばわりするってさ！

「初対面でいきなり酷くないですか。……あたしとセンセはちゃんと、普通に、付き合ってますっ！　見てもいないのに変な風に言わないで下さい」

「素性もろくに知らない男のいいように振り回されているだけだろう。勘違いも甚だしい」

小さく鼻で笑うセリフは、あたしのイタイところを突いてくる。

確かに、何も知らない。

センセがどこぞのお金持ちのお坊ちゃまらしいという話を噂で聞いただけだし、どうして教師なんて仕事をしてるのか、本当らしい理由も訊いたことない。

けど。

「いいじゃないですか！　どこの誰だって、センセに変わりはないんですからっ」

そうだよ。家がお金持ちだって、そうでなくたって。どうしようもないドSで、根性も、口も悪いセンセには変わりない。あたしが

今接している彼が、違ってしまうことなんてないんだから。
「無能な人間の常套句だな。くだらない」
「なっ……」
冷めた眼差し、心ない言葉。【じょうとうく】って言葉の意味は分かんないけど。“無能”から始まって“くだらない”で終わるだけで十分バカにされてることは分かる。
なんでそこまでされなきゃなんないワケ！
どうにも苛立つ感情をむき出しにして、思い切り理事長代理の腕に噛みついてやろうかと動物的な衝動に駆られた。

「理事長代理ともあろう男が、そんなチマチマした生徒ひとり相手に何してる」

「センセっ」
嫌味のこもった声すら心地よく響く低い声は、彼だった。
あたしを挟んで相対するふたりが、顔では平静を装いながら嫌味の応酬を始めた。
「しばらく会わない間に、お前も趣味が落ちたものだ」
「そっちこそ、人の趣味に口出しするほど暇なのか。学園のことを第一にと言うのなら、外へ向けて精力的に方針転換をアピールする方が効果的だと思うがな」
「不愉快な態度は相変わらずか」
「父親似だ。悪かったな」
「……」
（ひとの頭上で爆弾の投げ合いみたいなの、やめて欲しいんだけどな）
ふたりは知り合いなんだろうかと思わせる会話に聞こえなくもない。っていっても、聞くのは止めといた方が良さそうな雰囲気だ。
願いが通じたのか勝負がついたのか。
「行くぞ」

自然と体が縮こまっていたあたしの腕をセンセが掴んで引き寄せた。
「さっさと捨ててしまえ。そんな価値のない女」
去り際に理事長代理から更に冷たく浴びせられた言葉は、きっちりあたしの耳にも届いてた。
――捨ててしまえ。
――そんな価値のない女。

京極理事長代理という人が、腕を引いて行く目の前の男に勝るとも劣らない毒舌家なんだってことはよ～～く分かった。
「休みボケで帰り途も分からなくなったのか、お前は。真っ直ぐ帰れと言っただろうが」
昇降口まで送り届けてくれたような形になって、ようやく手を離したセンセが呆れたようにそう言った。
「さっき教室で庇ってくれたから、センセにお礼言わなきゃって思ってさ……」
というのは口実で、ホントは顔を見て話がしたかった、と。
紗枝みたいに気持ちを察してくれたらどんなに楽だろう。いや、案外彼も人の心を見透かすようなところもあるから、ひょっとしたら気付いてくれてるかも――。
などと甘い期待を抱いたあたしが、バカだった。
「いらん」
「え」
「とっとと帰れ」
手を払うようにしてそれだけを言うと、センセはそのまま姿を消してしまったのだった。

最後の高校生活は、舞い込んできた春の嵐で波乱含みになりそう

だ。
顔触れが一新した先生たち。進学重視に方針転換されてしまった学校。奪われてしまった諏訪の間、あたしの担任に就いてしまったセンセ。価値がないから捨ててしまえだなんて敵意を向けてくる、理事長代理。

「ねえっ！？　あたし何かしたっ？」
ぐるぐると駆け巡る色んなことに嫌気が差して、思わず叫ぶ。
携帯の向こうで「鼓膜が破れるじゃないのよ」と紗枝のグチが聞こえる。
「あ……ごめん。でも今日はありがと」
センセがあのタイミングで現れたのは、玄関付近で彼と遭遇した紗枝のおかげらしい。
てっきり一緒にいるのだと思っていたあたしの姿がなく、どうしたのだと訊ねたセンセに「会いに行ったみたいですよ？」と紗枝が告げると、走り去っていったって。
『顔じゃ無表情装ってても、あんな必死に走ってたらバレバレよねぇ』
珍しいもの見ちゃったわ、と笑う。
そこまでしてやって来てくれたことを嬉しく思う反面、淋しさも訪れる。
せっかく会いに行ったのにさ。おまけに理事長代理に酷いことまで言われたのにさ。お礼はいらないとか。とっとと帰れって。とっとと帰れって！！！
「センセってば最っ低！！！！！」
『だから電話口で叫ばないでちょうだい、拡声器娘！！』
だってこのイライラとした気持ちが、ムカムカとしたストレスがっ。
どこに発散したらいいのか分からないんだもん！！！

――その時だった。

あたしの名前を呼びながら階段を上がって来るお母さんの足音が聞こえて、部屋の扉が開かれた。

「聞こえてるなら返事くらいしなさい」

「今電話中なんだもん」

お母さんがにっこりと笑う。

「あらそーう？　じゃあ追い返してもよかった？　来てるんだけど。諏訪先生」

「えぇっ！」

「早くしないとお父さん帰って来ちゃうから、支度して行きなさい」

『ばーっちり、聞こえたわよ。ほらほらさっさと行く。明日じっくり話聞かせてよ？　じゃあね』

お母さんとの会話が携帯越しに筒抜けで、気を利かせた紗枝が通話を終わらせる。

お父さんには諏訪とのことはまだ内緒。遭遇するのはまだちょっとマズい。色んなドキドキを抱えながら慌てて駆け下りた階段。

玄関の扉を開いて門の外。

「来るのが遅れたのは、お前のせいだぞ」

ふてぶてしくも普段通りの小憎い笑みを浮かべた、彼の姿が愛おしかった。

＜4＞

センセが家を訪ねてきた時間は9時を回っていた。
お母さんから一時間だけ外出の許しをもらったと、車を走らせながら言う。
イタリア製の赤い高級スポーツカーは目立つこと極まりないけど、今夜は月を隠した濃紺の闇が派手な車も少しだけ隠してくれるような気がした。
「今後、人の話は素直に聞いておけ。伝言を伝えに向かった玄関に姿はない、訊けば俺に会いにいったという。あの部屋で京極が待ち受けてるなんて頭にないだろうから追ってみれば、あのザマだ」
「……だって……」
「標的にされていると言っただろうが。あそこが真っ先に押さえられることくらい想定しろ。こっちはすぐに帰るつもりでいたってのに、お陰で嫌がらせの事務処理に今まで時間を取られた」
すぐ帰るつもりって……あ、だから”とっとと帰れ”って言ったのかな。
冷たくあしらわれた意味が理解できたら肩の力がすっと抜けた。最低なんて言ってごめん、と心の中で謝って。
「ったく。就任挨拶中にメガネ受けして噴き出すなんて前代未聞だ。すっかり奴はお冠だぞ」
「あ、センセ。あたしが笑っちゃった理由分かってたんだ？」
「感激するとこじゃねぇ！」
ぺちっと。
頭に飛んで来るセンセの手の平。いつもなら痛いと文句をつけるのも、ふたりきりになれていつもの会話、変わらない態度なのが今は嬉しくて。
「えへへ」

頬も自然と緩んで声になってしまう。
「京極に毒づかれて気でもふれたか。気味が悪い」
人が乙女モード全開でふわふわしたい気分でいる時に、ホントひと言余計。
「だけどセンセが担任なんてびっくりだったよ？　面倒がってたのに、なんで受けたの？」
「オトナの事情だ」
「そうやってごまかすんだからさぁ」
「傍にいてやるんだ。泣いて喜べ」
赤信号で停止した車中、からかいの色を含んだ眼差しを向けられて胸がきゅっと締めつけられた。耳慣れた高慢口調が、こんな時には愛しく思えちゃうから困る。
そのまま頬を赤らめて黙って俯いてたりすればきっと可愛い女子なんだろうけど。
「……あたしは、今まで通りでよかった」
なんて言葉が口をついて出ちゃう辺り、ああっ、あたし悲惨なくらい可愛くないっ！！！
言って置きながら勝手に落ち込んだのがバレたのか、彼がふっと鼻で笑った。

信号が色を変えると同時に、再び車は低いエンジン音を唸らせて走り出す。やがて街を外れて海岸沿いを走って行くと、広い駐車場へ入って行った。映画館やホームセンター、ちょっとした飲食店や衣料品店が立ち並んだ場所だった。
店の閉店時間が迫っているだろう遅い時刻のせいか、駐車場に車はまばらだ。
「一時間の制限じゃこの辺が限界か」
腕時計に目をやったセンセがエンジンを止める。
ここはどこなんだろうと、フロントガラス越しに外の風景を注視したあたしの視界。邪魔するオトコの顔がアップで迫ってきた。次

に唇がパックリと塞がれてしまい呼吸に慌て、持ち主の腕をタップする。
「ん……ふっ」
まるでウォーミングアップといわんばかりの、浮いては触れてを繰り返すキス。合間に呼吸のタイミングを整えると、見計らったように長くて深いキスに切り替わる。口内で絡み合うお互いの欲求に、とくとくと、少しずつ確実に胸の鼓動が速くなっていくのはいつものことだ。
いつ誰の目に止まるかも知れないスリリングな状況に緊張しているのか。髪や頬や首筋を撫でる彼の指が、更に下を求めてくるかもしれないという期待にも似た緊張なのか。
頭の中まで脈打ったような状態のあたしには、分からなくなってた。
「そんな顔するのは、週末まで取って置け」
「……うっ」
「間違っても授業中に見せるなよ」
いつの間にか外していたメガネを掛け直して、くすりと笑う。
体中が熱いのに。もっと欲しいと思うのに。
平気な顔で終わりを告げる彼が恨めしい。
「イジワル。こんな……中途半端」
むくれて吐き捨てるあたしの顎を、彼の指が捉えて持ち上げる。
「お前だけが不満だと思うな」
「……はい？」
「遅くなったからな。会わずに済まそうとも考えた。こんな、ガキみたいに夢中でがっつくキスなんてするつもりもなかった。みんなお前のせいだ。会いたいと、触れたいと思わせる、お前が悪い」
アッシュグレイの瞳に真っすぐ見つめられて、言葉のひとつひとつが体中に染みていく。
予想に反した行動の責任全部をあたしに押しつけて。それでも会いたかったんだと、触れていたかったんだということらしい。

彼の言葉を変換すれば、ちゃんと強い愛情が伝わってくる。
あたしと同じように、彼もまた会いたいと思ってくれてたことがめちゃくちゃ嬉しい。
「す……素直じゃないんだから」
それは、自分にも向けた言葉だった。
「ヤってる最中にしか好きだと言えない奴に言われたくない」
持ち上げられた顔の先、瞳を細めた彼がちゅっと軽く口付ける。
「やっ、ヤってる最中とか！　そーいう言い方するの超ヤラシイ！！」
「そのヤラシイことしてもらえなくて、不満なんだろうが」
「ぐっ……」
言葉を詰まらせるあたしを横目に車のエンジンをスタートさせる。
言い合いで勝てるなんて思ってないけど、やっぱり悔しい。
「す……好きだよ！　あたしセンセのこと、ちゃんと好きだからね！！」
しっかりと目を逸らさずに。運転席の彼に向けてスキを告げる。
面食らったように二・三度瞬きしてみせた彼が、正面に向き直ってギアを入れると大きくハンドルを切った。
「ムキになって言われて、俺が喜ぶとでも思ってんのか」
大きく引き上げられた口の端。
からかって楽しんでいる時の証拠だ。
絶対、喜んでるクセに！　ホント意地悪なんだからっ！！！

＜5＞

京極理事長代理という人は、何事も徹底的にやるタイプの人間らしい。

これでもかのダメ押しが、ついに剣道部にまで押し寄せた。

「新しい……顧問の先生、ですか。失礼ですけど、小堺先生は剣道の経験は」

腕組みをしたまま不機嫌を顔全面に表しているセンセの隣。ひょろりとした立ち姿が頼りなさげなその人にカイが訪ねた。

「ありません」

ずれ落ちてくるメガネを持ち上げながら、きっぱりと答える。

部員達から“本当に諏訪先生じゃなくなるの？”“大丈夫か？”とざわめきが上がった。

そりゃそうだろう。小堺先生は、普段は白衣を着て試験管を手にしている科学の先生だ。剣道部の顧問どころか運動全般とは見るからに縁がなさそうな雰囲気だし。

そんな先生がウチの部の新顧問として就任すると言うんだから、活躍を期待するどころか見離されたも同然。明らかな嫌がらせとしか思えない——送り込んできたあの人の。

してやったりとほくそ笑むマネキン顔が脳裏に浮かんで、イラっとする。

「僕たちは、諏訪先生指導の下で実績を残して来ました。なのにどうして突然、経験もない先生に顧問が変わるのか納得の行く説明をお願いしたいんですけど」

剣道部男子部長でもあるカイが、その場にいる部員全員の気持ちを代弁して食い下がった。

「それは、京極理事長代理のご意向だからです」

名前を出せば逆らえないだろうと高を括ったような態度に、カチンと来た。
「理事長代理、理事長代理って！」
「ひっ……」
その名前があたしの神経を逆なでしたなんて気付かないんだろうけど。恨むなら、イライラをＭＡＸにまで跳ね上げる禁句ワードを口にした、自分を責めてもらおうじゃない。
「出来もしない仕事引き受けて、あたしたちのことバカにしてんですか！　こっちは勝つために必死で練習してきてるんですけど！？　いてもいなくてもいいような顧問なんて必要ないし！」
「……こ、顧問がいなければ、部としての活動は一切、で、出来なくなりますがっ？」
「だから！　今さら替える必要ないって言ってるんです！」
「ひゃうっ」
なあにが、ひゃう、だっての。すっかり警戒モードで腰の引けた小堺先生に鼻息を荒くしたあたしは、気配を消したままの仏頂面に無茶振りしてみる。
「センセもさっきから黙ってないで何か言ってよ！」
「……」
反応なし。ふんっ、この冷血漢！！
「と、とにかく、これは決定ですっ」
ビビリのクセにそこだけは最後まで強気なのが気に食わなくて、ぎろり、あたしは小堺先生を睨み上げた。
「たた、確かに伝えましたから……今日は取り敢えずこれで解散して下さいぃっ」
一方的に解散を告げると、足早に道場を立ち去っていく。
「ばーっか」
細い背中にべぇ、とあたしは舌を出した。
「梨緒それはやり過ぎ。気持ちも分かるけど、少し落ち着いて」
「だってこんなやり方卑怯じゃん！　部員みんな巻き込んでさ……

全国狙ってるのに、センセの指導が受けられなかったらムリだよ！」

任せたよ、と卒業していった先輩たちの言葉が蘇る。

団体戦での全国大会出場。叶うかもしれない目標を自分のせいでダメにするなんて、これ以上やるせないことはない。

「ごめんみんな、あたしのせいで！！」

あたしは部員の前で頭を下げた。

「別に時任のせいじゃなくね」

……へ？

「そうだよ。梨緒は被害者でしょ？　諏訪先生とのことで理事長代理に酷いこと言われてるって聞いたよ。愚かな女だとか無能だとか、いくらなんでもカワイそうだよねって話してたんだ」

「ひっでぇな、それ」

「でしょー！　そりゃ梨緒はちょっとおバカかもしれないけど、その言い方はなくない？」

諏訪の間の前で罵られた時の会話を、誰かが見ていたらしい。同情してくれる三年部員たちの言葉が嬉しかった。

「みんな……ありがと」

「でもだったらそれって、どっちかっていったら時任先輩のせいっていうより……」

なんとなく呟いてしまった二年男子のひと言に、一同の視線が自然と一点に集中した。腕組みをしたままの、センセの元へ。

「お前ら揃いも揃っていい度胸だな。俺が顧問を外されて言いたい放題か」

ようやく言葉を発したかと思えば、冷めた眼差しだけをこちらへ向けて普段通りの悪態をつく。

「や、そーいうわけじゃないんすけど……」

「否定はしない、責任逃れをするつもりもない。だが理事長代理の下した決定に異論を唱えるより、時々ここへ足を運んでお前らの練

習を窺う方が、無駄な労力を使うことなく平和的且つ穏便に事は解決する」

――やっぱりセンセは、桜吹雪のお奉行様みたいだ。

場違いな感心を抱きつつ、あたしは思う。冷静な判断で最良の手を打ち出してくる。それはまるで、一度だけ真剣勝負をした時のセンセの剣道と似てるって感じた。

（冷血漢なんて言ってごめんね、センセ）

見捨てられたワケじゃないと分かると途端にやる気がみなぎってくるなんて、あたしホント単純。けどこの単純さで人生乗り切って来たんだから。

「やろうよ、カイ。あたし達だけで出来ることをめいっぱい。ダテに二年もセンセに扱かれて来たんじゃないって、あのマネキン男に思い知らせてやろうよ！」

火のついた闘志はめらめらと一気に燃え上がり、あたしの両手に拳を握らせる。

「見てなさいよねぇっ！！」

「マネキン男って」

ぷっとカイが噴き出した。

「そーだそーだ、やってやろうぜ！」

「悔しがる顔とか見てみたいかも！　代理の癖にデカイ態度が気に入らなかったんだよね」

「いいっすね、楽しそうっすね。めっちゃ遣り甲斐あるじゃないっすか」

あたしの闘志が乗り移ったように盛り上がり始めた部員たち。先代から引き継いだノリの良さが、こんなところで団結力となって力を発揮するなんて思ってもみなかった。

（先輩たち、感謝）

「そういうことなんで、センセ。抜き打ちチェックよろしくお願い

します！」
「ふざけた練習内容なら容赦なく見放すからな。お前ら全員覚悟しとけよ」
はい、と答える声が幾重にも重なって道場を震わせた。
満足そうに引き上げられたセンセの口の端。腕組みが解かれてズボンのポケットへと差し込まれた。ゆっくりと翻る背中は、頼れる愛しい人のそれだった。

いつもなら迷惑を気にして電話を遠慮する時間帯。今日の勢いに後押しされたように、あたしは迷わずセンセの携帯を呼びだしていた。
二回コールをしただけで耳に響いた彼の声。
『どうした』
毎回きゅっと胸が苦しくなるのは、受ける時にお決まりのセリフが気遣うように優しいトーンで流れこんで来るからだった。
「今日はありがと。顧問外されるってセンセも知らなかったんでしょ？」
先に道場へやって来たのは小堺先生だった。その姿を見た彼の顔色が、明らかに驚きの色に染まっていくのが分かったから。
『京極は、俺とお前の接点を片っ端から潰すつもりだ。部の方へも何かしら手出しするだろうとは思ってたがな、あの科学馬鹿を送り込んでくるとは』
科学馬鹿、をやたら強調する辺りにセンセの苛立ち具合が窺えて、簡単に受け入れたワケじゃないんだなって思った。
「でも練習をずっと見てて貰えないのは、不安だし物足らない気がするなー」
練習中、センセも逐一口を挟むワケじゃない。けど、見られてるって意識は常にあたしの中に働いていい緊張感になってたから。それがなくなるのは、って思うとね。

『勇ましく宣言したヤツの言葉とも思えないな。お前に一瞬でもジャンヌ・ダルクを重ねたのは、俺の不覚だったか』

「……ジャンヌ……？」

どっかで聞いたことがあるような名前だけど、誰だっけそれ。思わず黙って考え込んでいるとため息が音となって聞こえてきた。

『答えの入ってない引き出しをこじ開けようとするな。無駄だ、スルーしろ』

むっ、失礼な。

「部員のみんなに迷惑掛けてるのに、あたしが淋しいなんて言えないよ。センセにはやっぱり傍にいて欲しいとかさ」

『……』

「……週末は、会える？」

淋しい繋がりでぽろっとそんなことを口走った。

残業続きのセンセと平日の放課後に会う時間はめっきり減っていたから。ゆっくり会いたいと無性にそんな気分になった。電話の向こうで続く沈黙が余りに長くて、「センセ？　聞いてる？」そうあたしが確認したほどだ。

『なんだその畳み掛け』

「は？」

『顔が見えないのをいいことに、ここぞとばかりに可愛げ出して煽るなんて上等だな』

電話越しに伝わる曇りがちな雰囲気に意味が分からず。

「か、可愛げ？　煽ってる？　何が？　どこが？　なんで怒ってんの？」

呆気に取られて返した言葉が更に不愉快にさせたようで。

『週末と言わず明日にでも、無理矢理時間作って会いに行ってやる。この間みたいな往復込の一時間じゃ済ませない、がっつり“休憩二時間”コース行くからな』

休憩二時間て……どこに連れ込もうとしてんのよ！！
それに明日は。
「あ、あたしバイトあるからムリ！」
『……バイトだと』
より低音に落ちた声が耳に響いて、ぞくりと背筋が寒くなる。か、完全に魔王モード発動してるんですけど。
「だだ、だってほらっ！　春休み中に組んだローテーションが今週までだし」
昨年の夏休みに見つけたリカーショップでアルバイトを続けている。
夏合宿でセンセから指摘を受けた腕の筋力強化を図るべく、選んだ場所なんだけど。何の因果かその店にはセンセの天敵ともいうべく人もまた、働いていたのだ。
『筋力アップは十分だと言ったよな。必要ならダンベルくらい買ってやる。なんならスポーツジムの契約してやってもいい。だからさっさと辞めろ、あんなとこ』
「い、いやでも、人手足らないから辞めないでって言われてるし」
無くならない佐伯さんに対する嫌悪感は相変わらずで頭がイタイ。何かと融通を利かせてくれるからあたしとしても続けておきたいのに。
『俺は辞めろと言ってる』
ううっ、顔も見えないのに十分怖いってば！！
「お小遣いも足らないんだもん！　来週からは土日のどっちかだけだから許してよ」
『お前の小遣いなんて、どうせ部活帰りの飲み食いに消えるだけだろうが。橘なんかとフラついてないで真っ直ぐ帰れ。そうすりゃバイトする意味もなくなる』
ぎく。なんでカイと一緒だって、そんなことまで知ってるんだろ。地獄耳？　千里眼？　魔王入ってるから魔術かなにかってこと？？？？

「それだけじゃないの！　これでも色々あるんです！　センセはお金に困ったことなんてないから分かんないだろうけどっ」

センセと付き合うようになって、食事をするのも遊びをするのもお金はみんな任せきり。

社会人相手だから仕方ないのかもしれないけどさ、サプライズ的に何かしてあげたいとか思ったりするんだよ、あたしだって。だからせめてもという乙女ゴコロを分かって、っていうのは難しいんだろうけど。

「とにかくね、明日はムリだから。週末にしようよ」

『ムカつくなお前』

ドスの利いた声が耳元に響いて、あたしは思わず携帯を浮かせてしまった。

『すぐにでも会いたいようなセリフ吐いたのはそっちだろうが』

「ちょ、ちょっと待ってよ？　あたしは“週末は会える？”って聞いただけ！　すぐなんてひとっ言も言ってないから！」

内心ちょっとそんなこと思ってたけど。

バイトの事となるとムキになる彼に対して、いよいよこっちも引くに引けなくなってきた。

『俺が会いに行ってやると言ってる。なのに何がバイトだ、このバカ。優先すべきは俺の欲求の解消だ』

「はぁっ！？」

な、なんか話が変わって来てない？？

『ストレスで俺を殺す気か。明日、お前のバイトを阻止して絶対行くからな。覚悟しとけ』

「か、覚悟って」

『心身共に、色々だ』

ひ、ひえ……。

子供の遠足張りに気合入ってるんだけど、このヒト。っていうか“休憩二時間”で済まされるんだろうか、不安。

ぷつりとそれきり切られてしまった携帯をぼんやり耳に当てたま

ま、あたしはでっかいため息を漏らした。

＜1＞

暗雲立ちこめる新学年が始まって二週間。
桜の花も散り始めて緑の葉がちらほらと見え始めた。情緒に浸ってこうして桜の木を見上げているのは、あたしくらいだ。
「もう終わっちゃうのかー」
咲き誇る姿を見せているのも一年間でほんのひと時。次の開花に向けてじっくりと準備をしていくこの植物は、忍耐強いと思う。最後まで見届けてあげたいって、応援したくなる。
「梨緒」
道場へ向かう途中、足を止めていた背中を叩かれて振り返ると、カイが笑顔で立っていた。元々チビのあたしと背の高いカイには距離がある。その距離が、ここ数カ月で更に伸びた気がしていた。
「カイ、どこまでおっきくなるつもり？　男の子の伸び率って尋常じゃないよ。あたしなんて中学から全然変わんないのに。あと五センチくらいは欲しいのになぁ」
「いーじゃん。梨緒は小さくて可愛いから」
「小さくて、は余計」
悲しいかな、身長以外はすくすくと育ってる。そんなことはカイには内緒だけど。
「だけどホント。去年に比べて、梨緒はすごくキレイになったと思うよ。諏訪先生効果だって男子の中じゃ結構話題に上がってる」
「え、男子ってばそんな話してるの？　やだなぁ……」
真顔でキレイになったなんて褒められて、照れ臭くて目を逸らした。自覚はないにせよ、恋をすると女の子はキレイになるって言う説はまんざら嘘でもなさそうだ。
“梨緒ってばこの頃お色気ムンムンよ”

冗談交じりに紗枝にも言われたことを思い出して、そろそろと視線は自分の胸元へ。この一年で一番育ってるのが胸の大きさなんて、もっと言えない。だってそれこそ、誰かさんの――。

「うわわっ、あたしなにをっ！！！」

やんわりと胸を揉む彼の大きな手の感触だとか体温だとか。耳元で囁かれる声だとか触れる吐息までもリアルに再現されてしまって、昼間からピンクモードなのが恥ずかしい。こんなんじゃ、アダルト雑誌で盛り上がる男子と大して変わんないじゃん。

（そんなんじゃないんだってばぁ！）

ふるふると、意識を掻き消すように頭を抱えた。

「どうかした？　大丈夫？　諏訪先生と言えば、始業式以来大人しいよね」

「大人しい？」

「前ほど目立たなくなったっていうか。理事長代理のお陰で校内の監視が厳しくなって、女子が騒がなくなったせいかな」

「そうかもねー。型にハマるのがヤダとか言ってた割に、担任もサマになってきたっぽく見えるもん」

「アハハ。梨緒にそこまで言われたら、先生も不本意だろうな」

「失礼だなーもう！」

カイが子供みたいに屈託のない笑顔を見せる。

「だーけーど、」

あたしとカイの間を割って入って来た紗枝が、艶々の口元に笑みを浮かべながら意味深に口にした。

「見るたび梨緒の身体に“愛され痕”が増えてくのからすると、相当溜まってるわよー？」

「ささ、紗枝っ！」

いきなり出てきたと思ったらこんなところで暴露しないで！！

カイもいるのにっ。

実際紗枝の言葉通り学校で大人しくしている反動なのか、一歩外へ出たセンセは荒々しい。隙を見つけてはあたしを迎えにやって来

て、時に車の中だったり、時に“がっつり休憩コース”だったり。

『監視の目を盗んで重ねる逢瀬ってのも、盛り上がるもんだな』

部活終わりの道場内、だったり。

言葉巧みに口説かれて肌を重ねる、甘い時間を過ごしてた。

「結城が言ってるのが本当なら、それ、他の女子にもバレてるんじゃない？」

気まずそうに首の辺りを指で掻きながら、カイからの的確な指摘。

そんなこと、気にもしてなかった。あたしは途端に真っ青になる。

「ヤバい、かな」

「ヤバい、よね」

視線を交わして沈黙が走る。

「今さら遅いわよ。女子の情報網甘く見ないで。道場の合鍵作って諏訪と梨緒がナニしてるなんて、とっくに京極理事長代理の耳にも届いてるわ、間違いなく」

（お願いだからそんな詳細は伏せといて！！）

慌てて紗枝の口を両手で塞いで、あ然とするカイに「ち、違うんだよっ」と苦しいながらも一応の言い訳をしておいた。

知らぬは当人たちばかり……ひょっとしたらセンセは気付いていたかもしれないけど。でもでも、ってことは覗かれてたりしたかもしれないじゃん？　また写真とか撮られたりして、出回ってるかもしれない。

「紗枝もさ、気付いてたならなんでもっと早く言ってくれなかったの！　どーすんの、あのマネキン理事長代理にまた嫌味言われちゃう！！　今度は嫌味だけじゃ済まないかもしれないじゃん！」

筒抜けらしい事実が明るみになると、焦る・慌てる・パニくる思考は落ち着く場所を失って、彷徨うばかり。困り果てるあたしを目の前にしても、親友の紗枝は余裕の笑顔で言ったものだ。

「自分の欲に溺れてジタバタする諏訪の姿なんて、見てみたいじゃ

ない」
「こ、こ、根性わる〜〜っ！！」
「やーねぇ。諏訪には負けるわ」
じゃーねーと。陸上部の練習へ向かった紗枝の背中を見送りながら、項垂れるあたし。諏訪張りのSっ気女子が身近にいたの、幸せボケしてすっかり忘れてた……
「結城って、絶対敵に回したくないタイプだね」
ぽそり漏らしたカイの同情めいたセリフに、「味方にしても、あんまり変わらないと思うよ」と正直な胸の内を明かした。

落ち込んだ気分を立て直すように極力努めて、あたしとカイは道場前に辿り着く。深く吐き出したため息の原因は、今日が入部希望の新入生を迎える日だからだった。
「こんな低いテンションで“部長です、よろしく！”なんて笑えそうにもないんだけど、あたし」
「じゃあ、気分が上がる情報をひとつあげる。今年の新入生、去年ウチの活躍を見て入ってきた有望株が結構いるらしいよ」
「それホント！？」
「うん。だからね、ここは無理にでも気張ってもらって、いつもの元気な梨緒の笑顔で迎えてあげて欲しいんだけどな」
さすがの理事長代理も、新入生の受け入れまでは関与出来なかったのかな。勝つことに貪欲な生徒が入部を希望してくれるのは、すごく嬉しい。士気が高まれば練習にも活気がでる。顧問がどうしようもないんだから、あたしたちで盛り上げていくしかないんだもん。
「よぉーし、頑張る！」
勢い良く玄関の扉を開いてカイとふたりで道場内に足を踏み入れる。
「こんにちはー！！」
「あ、男子部長の橘先輩と、女子部長の時任先輩です」

世話役の二年生部員・花沢くんが新入部員にあたし達を紹介してくれた。

「「宜しくお願いします！！」」

ずらりとならんだ新入生。男子七名に女子五名。十分だと思った。ひとりひとりの顔を名前を覚えようとしているところに、遅れている男子が一名いるのだと言われた。

「そいつ、ムチャクチャ強いらしいっすよ」

「強いって、どれくらい？」

「一昨年に中学日本一になった源学園の副将やってたって聞いたんですけど……だったよな？」

「はい。そうです」

カイに訊ねられて花沢くんが一年生に確認を取ると、こっくり頷き返した。

「源学園って言ったら、カイの後輩だね。聞いたことないの？」

「オレ剣道部じゃなかった、って言っただろ？　それに中等科と高等科は敷地が分かれてたし、特に学校の剣道部には興味もなかったから活躍してた個人の名前まではさすがに知らないよ」

「え！　橘先輩、剣道部入ってなかったんすか？　じゃなんでそんな強いんっすか……」

驚いたように花沢くんが目を丸くする。

そりゃそうだよね、中学・高校と剣道部にも入ってなかった人が全国大会一歩手前まで行けちゃうくらいの実力者なんだもん。

「剣道始めたのは小学生の頃だし、帰宅部しつつ道場には通い続けてたからかな」

「「へぇー」」

今度はあたしも花沢くんと一緒に声を上げた。

「あれ。時任先輩も知らなかったんすか」

「うん。道場通ってたって話は初めて聞いた」

その時だった。
「ちーっす。遅れましたー」
間の抜けた声を響かせて道場に入って来た一年生は、見覚えのある顔。勝気な眼差し、オレンジ色に近い茶髪。年上の恋人を思わせる口元の笑み。

「あ、あ、あ、あぁぁぁ～～～っっ！！！！！」

指を差して大絶叫したあたし。耳をつんざくような大音量のそれに、カイも花沢くんも、そこにいたみんなが同じように耳を塞いだ。
「よろしく。センパイ」
目の前の彼だけが。
出逢ったあの日を思わせる、挑発的な笑みを浮かべてそう言った。

＜2＞

自分が出した大声で、微かに頭痛がする。
入部希望の一年生に紛れこんだ約一名が、更なる悩みのタネになるのは目に見えていた。高津亜藍（たかつあらん）、どこぞのハーフかと思うような名前の生意気な新入生。
態度に大きく問題を抱えたその彼が、中学では全国優勝を果たした経験者だというんだから邪険に出来ないのがまた、ツライとこ。
「梨緒と高津、知り合いだったんだ？」
「う、う～ん……知り合い、というか……」
「センパイ、あん時もでかい声で叫んでたよね」
高津くんに入学前の話を持ち出された瞬間、どきりと心臓が跳ねたのは危険信号だったのかもしれない。
「なんだよ高津。あん時もって、お前入学前にウチに来たことあったのかよ」
「つか時任先輩に会ってたんだ？」
「たまたまココの前通り掛かったんで入学前に挨拶でも、と思ったらリオセンパイが雄叫び上げてたっつーか？」
後輩たちの容赦ない質問攻めにひとりドキドキするあたしの様子を楽しむように、高津くんは薄っすらとほくそ笑む。
よく言う！　“下見に来た”って言ってたクセに！　この大ボラ吹きっ。
言葉をぐっと飲み込みながらあたしは歯噛みした。
「なんだっけ、すげぇ意味不明なこと叫んでたっけ。“センセのバカ、大キライ、センセの痛――”」
「うわあああああああっ！！！！！！」
良く滑る口が、聞く人が聞いたら何の話か悟ってしまうだろう一語一句を正確に再生しようとするから、あたしは慌てた。

目には目を、声には声を。
迷惑そうに眉を顰めるカイやその他部員のことはこの際お構いなしで、わが身を守る。
「あ、あれはちょっとしたグチみたいなもんで、ストレス発散してただけなの！　だからそんなことここで言わないで欲しいんだけどっ」
「ふうん。で？　センセの何が痛かったのかそれだけ教えてくんない、センパイ。オレずっと気になってんだよね」
「だっ、だからキミはさぁぁっ！！！！」
言わないで、って言ってんじゃない！　ばっちり目が笑ってんの！
こうなったら制御不能な後輩の口はいよいよ両手で塞いでしまうに限る、と強行手段に出たのだけれど。予想に反し、勢い良く飛びつくとあっさり倒れる高津くん。思い切り覆い被さる形であたしもまた、倒れ込む。
「ワザと倒れないでよ！　危ないじゃん！」
「いきなり押し倒しといてなにそれ。文句言いたいのはこっちなんだけど」
「押し倒してないから！」
この間は必死に押し返してもビクともしなかったくせに。
「さっきからセンパイ何イラついてんの。生理？」

……このヒト、脳天ぶったたいてもいいですか？

理事長代理に対するのとはまた違ったイライラが募る。高津くんを跨ぐようにして膝をついたあたしは、胸倉を掴んでひと言モノ申してやろうと制服のシャツに手を掛けた。
「あのねぇっ」
「それとも」
あたしが引き上げるより先、肘をついて半身をゆっくりと起こした彼が不敵な笑みを浮かべる。

「ちゃんとした挨拶には、キスだけじゃ足らなかった？」

道場内にはっきりと響き渡った破壊力抜群のひと言が、一気にその場を静まり返らせた。

色素の薄い茶色の瞳が間近に迫って。

――ハメられたと。

呆然とあたしはようやく気付いた。

高津くんはきっと、これを言う機会を窺っていたに違いないのに。まんまとその場を与えてしまったあたしって、やっぱりバカ。頭の痛みがほんの少し強くなった気がした。

「……キス、って言った？　今」

「誰が？　高津くんと梨緒？　え、キス？？」

「諏訪先生知ってんのかな」

「いやー？　時任の放心状態からすっと違うんじゃね」

「うわ、ドロドロ」

静けさの後にざわざわと、みんなが好き勝手放題言い始める。

「あ、あんなのはねっ、キスの内に入んないのっ！！　ちょっと掠ったくらいじゃん！」

動揺したら負けだと思って、多少の嘘を加えて必死に強がった。誰に見られていた訳でもないんだから、この際言ったもん勝ち。部員達にも、大したことはなかったのだと思わせることも出来るし。

「一体さっきから、な……なんの騒ぎですかっ。しょく……職員室にまで、聞こえます、がっ！？」

大きく肩で息をしながらやって来たのは小堺先生。今日は新入生との顔合わせだけを済ませて解散するように指示を出していたから、職員室であたしの叫び声を聞きつけて走ってきたんだろう。

男子生徒に跨ったあたしの姿を見て、更に声を上擦らせ目を剥い

た。
「と、時任さん!?　きききっ、君はなにをしているんですかっっ!!!!!」
失神寸前みたいな金切り声を上げながら、二・三歩後退した。
「へ？　あっ、これは事故です事故っ！　彼の口を塞ごうとしたらこんな状態になっちゃっただけで！」
「く、口を塞ぐなんて、おぉっ、恐ろしいことをっ！」
「先生、勘違いしないで！　あたしはこのヒトを黙らせようとしただけでっ」
ああ、なんか違う！　口にすればするほどドツボにハマってく気がする!!
「だだだ、黙らせるっ!?　男子生徒の体に跨って……暴行未遂なんて。京極理事長代理の耳に入れたら何とおっしゃるか……どうなっても、私は知りませんっ」
「ちょっと待ってってば!!」
暴行未遂、だなんてまた物騒な言葉を口走り、半狂乱で走り去った小堺先生を追いかけようと慌てて立ち上がった。理事長代理の元へ行く前に絶対阻止しなきゃ。
「梨緒、どこ行くの」
「小堺先生捕まえて誤解解いてくる！　ったく、逃げ足だけは速いんだから」
訊ねるカイに短く答えて玄関で靴を履き外へ出る。出てすぐの場所に、人の気配。
「柔道部にでも鞍替えして寝技の特訓か？　押し倒すだの跨るだのと、剣道とは程遠い単語の羅列を耳にしたのは気のせいか」
それはそれはどす黒いオーラを全身から漂わせて、あたしを横目に窺うセンセが立っていた。
「お前が探してる鳩を捕まえてみたが、話次第じゃこのまま解放ってことも有り得る」
言葉はまるでナイフを喉元に突きつけられたような脅迫で。彼の

右腕には、がっちり捕獲された鳩の首根っこ……もとい、小堺先生の白衣の襟。

「あ、あはははは……」

乾いたあたしの笑い声だけが、空しくそこに響いてた。

全ての事情を包み隠さず話すと言う条件の下、センセが小堺先生を解放した。解放直前、センセが耳打ちしたのは何だったんだろう。小堺先生は青ざめながら、こくこくと壊れた人形みたいに何度も首を縦に振っていた。

どこまでも人の弱みを握る事にかけては天下一品の彼に感心二割、呆れが六割。

「なんだその目は」

「センセって悪だくみしてる時の顔が、本当にイキイキしてるなって思ってさ」

軽蔑のような恐怖のような、フクザツな気持ちが残りの二割。

「お前は少し危機感持てよ。さて、どこから突っ込んで欲しい」

「いやー……別に突っ込みはいらない、です」

道場の壁に追い立てられたあたしは、ぽつりぽつりとこれまでの経緯を白状せざるを得なかった。端折らず事実をただ、ひたすらに。

「――ということで、ちょっとした騒ぎになってたワケで……」

途中口を挟むことはなかったものの、センセの眉間に深く皺が刻み込まれていくたびに顔色を窺って、肩を竦めて。いつか怒鳴られるだろうとビクビクしていたっていうのに。

「俺にも跨ったことない癖に、何してんだお前」

「……そこっ!?」

全てを聞き終えたセンセの第一声は、それだった。

＜3＞

だいたいさ。

センセが夜通し無茶なんてしてくれなきゃ、翌朝早々マンション抜け出して道場になんて行かなかったのに。そしたら高津くんにも会わずに済んで、あんな不意打ちのキスをされることもなかったんだ。センセにも半分は責任あるんだから！

“竹刀を持たなきゃ隙だらけ”を理由に雷を落とされて、どーにもこーにも立場が危うくなったら言ってやろうかと思ってた。

それなのに。

彼から返って来た的外れな反応に、拍子抜けもいいところ。

「跨ったこともないクセにって……キスされたことは怒んないの、センセ」

理由にちょっと眉をしかめてしまうけど、その件に関してセンセから怒りは感じられなかった。

「“掠っただけ”が本当かどうか怪しいもんだが、舌入れてきた訳じゃないならこの際許してやる」

「ななっ、ないないっ！！　それはホント絶対ないから！！」

「で。黙ってた理由は、バレなきゃいいだろうと甘く見てたか」

ふるふるとあたしは首を横に振る。

「違うよ！　怒鳴られるの覚悟してたもん。……けど、わざわざ“キスされました”って報告されたってセンセがムダに傷つくだけかなって思って。あたしならそう感じるから、黙ってたんだよ」

分かって欲しいな、その辺のキモチ。傷つけるのは嫌だって思えるくらいセンセを大切に感じてるんだよってこと。

それにさ。

「それに……好きなヒトに、言いたくないじゃん。無理矢理……さ

れた話なんてさ」
　センセの目をごまかせるワケないのは百も承知だもん。バレるのも時間の問題で、そうなれば仕方ないって腹を据えてた。
　それでも言えなかったのは、キスされたなんて報告することが本気で嫌だったから。今だって思い出したら、他の人が触れた唇の感触がやっぱり嫌で。
　目の前のセンセのシャツを、指先できつく握った。
「センセ以外にキスされて……ヤだったんだから」
　うわわ、言ったよあたし!!
　本当は泣きたいくらいだった、弱くて素直なキモチを告げてた。
「そうか」
　壁に押し付けられていた背中が、納得したように頷いたセンセの腕に攫われて抱き寄せられた。
「俺にこの場で抱けと？」
　突拍子もない発言に、慌てふためいて押し返したセンセの胸。
「だっ、抱くっ？　なんでそんな話になっちゃうのか分かんないんだけどっ。あたしはただ、相手がセンセじゃなかったからヤダって……」
「黙れ。それ以上煽るような台詞連呼したらこの場で喰う」
「ぎゃっ」
　煽ったつもりなんて全くなかった口から漏れた、乙女らしからぬあたしの奇声が「騒ぐな」とセンセのキスに掻き消される。
　道場の入口はすぐ隣。中から聞こえてくる部員の声を聞きながら交わすキスにドキドキした。深くならず離れてもいかない唇が心地良かった。
　やっぱりセンセがいい――そう、しみじみしてたのに。
「生憎こっちも、お前が他の奴に股開いたのが至極不満でな」
「表現全然違ってる！　下品ないい方しないでよっ！　だいたいさっきから、なんでそこばっかやたらこだわるかなっ」
　人がせっかくいい気分に浸ってるのに、しつこく蒸し返すんだか

ら！

「経験薄には抵抗あるかと、気遣って乗せるの遠慮してやってたのに。先に愉しみを奪われたんだ、当然だろうが」

「た……たまたまそんな体勢になっちゃっただけだし！　何かしてたワケじゃないし！　センセが言ってるのとは全っ然違うの分かってんでしょっ、被害妄想強過ぎだってばっ」

「ナニかしてて堪るかよ。被害妄想強くて結構。むしろ現場を目撃されてなかっただけ感謝しろ、もししてたら……」

強制、脅迫、拘束、拉致。

あたしの脳裏に浮かんだ単語はやけに犯罪的イメージなモノばかりで。なんだかちょっとセンセに申し訳ないような気になった。

……けど、そんなのは束の間だった。

「速攻部室に連れ込んで、おフザケでも二度と“たまたまそんな体勢”なんて出来ないように延々身体に言い聞かせてやったところだ」

ひぃっ。

やっぱりこのヒトって、そんなヒト。自分の中の彼に対する認識に間違いはなかったのだと思い知らされるハメになる。

「ということで、今日は俺の部屋でじっくりお前に新しい体位を教え込むことに決めた」

「センセ、その接続詞もおかしいよ！　っていうかガッコで何の話してんのっ」

「うるせえ」

うわ、逆切れ。体位を教え込むとか。魔王モードがほんのり発動しかけてる気がするんだけど？

「こんなのはな」

あたしの頬をさわりと撫でた冷たい指の感触と、放課後に待ち構える“お勉強”に対する緊張で背中が寒くなった。

「可愛い嫉妬だ」

囁くように言われて、今度は深く絡まるキスをした。
呼吸するタイミングも与えないくらいに貪られて。全然可愛くなんてないけど、ほんのちょとだけセンセの嫉妬が伝わって来た気がした。

「あの、部長。センセと生徒がこんなとこでヤらしいキスしてるけど、いいの。コレ」
高津くんの声に我に返って離れようとするのに、解放されるどころか強く押し込まれたあたしは胸に埋もれた。
「どうして諏訪先生……見境なくいちゃつくの、少し控えてくれませんか。場所くらい弁えて下さいよ。新入部員に余計な説明する必要が出てきて、オレが困るんですから」
部長、と呼ばれたカイの呆れた声が聞こえる。
こんな状況の尻ぬぐいなんて、誰だって困るよねー。ごめんねーカイ。
「剣道部的にこのパターンは日常的にアリなんだと、部長のお前からよく指導しておけ」
「……子供みたいなこと言わないで下さい」
「特にそこの珍獣、鎖に繋いで檻に放り込んどけ。他人のモノをつまみ食いするような奴には、指導より先に躾の必要がある」
センセはどうして彼が高津くんだって分かったんだろ……本能、とか？　まぁ見るからに、って感じだから察したのかな。
「あれ。勝手に手出したこと、センパイから聞いたんだ？　センセ、尋問得意そうだもんね」
「おい、高津やめとけって！」
「相手、諏訪先生だぞ、分かってんのかよ！？」
集まって来た先輩部員達の制止する声も無視で、肩を揺らしながら笑う高津くんがセンセの前に立ちはだかった。
「こんなちっこいのに、ガッコのセンセやってるカレシがいたなんて知らなかったから。ごめんね、センセ」

嘘っぽくて気持ちのない口調が好きになれない。出逢った時もそう、高津くんはワザと人を不愉快にさせるモノの言い方をする。

「でもオレ、他人のモノに手出すのって楽しくて好き。諏訪センセだって、散々やってきたでしょ。略奪混じりの遊びなんてさ」

「見当違いも甚だしい。餌を見つけちゃホイホイ飛びかかる、ハイエナもどきの快楽思考なんざ理解出来るか。こっちは差し出された餌も選り好みしてからしか遊んだことがないんでな」

学園中で鬼だ悪魔だと恐れられるセンセに、臆するどころか逆に挑発仕掛けてくる高津くんの怖いモノ知らずもほどがあるけどっ。負けず嫌い発揮して遊び自慢するセンセもどうかしてる。

「選り好みして、それ？」

ククッ、と高津くんの肩が小刻みに震える。

それって言った？　それってなによっ。

「まんま、クソ生意気な一年だな」

「……こっわ。そっちこそ、噂通りの毒舌淫行教師だよね」

選り好みの件で噴き出されたことで、時間差であたしが切れた。

センセの腕に抱かれたまま、じたばたと手足を動かして苛立ちをアピールする。

「こんなで悪かったねっ！！　どーせチビだし、顔だって美しくないけどさっ、キミに“それ”呼ばわりされる覚えなんて、これっぽっちもないんだからっ……んぐ」

「どさくさに紛れて人の足を踏みつけんじゃねぇ。ここで騒ぐな、鼓膜が破れる」

吐き出しきれなかった非難の声は、センセの手にがっつり塞がれた。

「あががっ！！（だってさ！！）」

「自分の欠点をよくよく自覚してる奴をブスとは呼ばん。救われたな」

「んんん～～～っっ！！！（なによそれ～～～～っ！！！）」

言いたい放題のセンセの口こそ塞いでやりたいのに、がっちりと

片腕で抱え込まれたあたしの身体はビクともしない。
「そんなにカノジョが大事なら、リオセンパイこそ鎖に繋いどいた方がいいよ。こっちも、キスだけじゃ物足らなくなるかもしれないしね？」
これでもか、のひと言を投げつけて高津くんがセンセの横を素通りしていく。
どんだけ度胸が据わってんの、あの子。神経図太いにもほどがあるでしょ。カイも部員達もハラハラしながら見守る中を、気だるげにポケットに両手を突っ込んで歩いていく後ろ姿。オレンジ色の揺れる髪を睨みつけた。
「すげぇな……アイツ」
部員たちの感心しちゃう気持ちも分かる。
「一応出来る限りの指導はしますけど、高津はあんな感じなんで更生させられる保証はないですからね。諏訪先生」
ため息漏れちゃうカイの憂鬱な気分もよーく分かる。
けどっ。
「挑発上等。度胸だけは認めてやる」
あたしの身の危険が堂々宣言されたっていうのに、何でセンセが余裕こいちゃってるのかそこだけは全っ然、分かんないんですけどっ？？

＜4＞

「面白いったらもう！　なんなのよ次から次へと現れる鬼畜キャラ！！」

お腹を抱えて笑う紗枝って言うのも割とレアだったりする。椅子に座ったまま足をじたばたさせて、前後に身体を揺らしながら笑い転げる様子をクラスメイトも呆然と眺めてる。

「類は友を呼ぶにも程があるっていうか、よくもまぁ揃ったものよねぇ。梨緒のＳ寄せ体質が相当強力なんだとしか思えないわ」

「そんな体質嬉しくないし、あたしは全然笑えないんですけどー」

「そうねぇ。あんたの彼氏も相当笑えない状況だって思うと楽しいわよねぇ」

限界を越えてついに涙まで浮かべた紗枝が目尻を指で拭った。

センセが窮地に追い込まれるのが何よりの楽しみって言うんだから、紗枝だってある意味同類な気がするんだけどな。

「残念だけど、センセは高津くん相手に全然余裕って感じだったよ」

「多少の余裕は確かにあるんでしょうけど、全然ってことはないんじゃない。現に昨日は結局門限ギリギリになるまで解放してくれなかったっていうし？」

どんだけ夢中よ、と再び笑い始める紗枝に、あたしは声量に気遣いながら訴えた。

「あのね、それはホント笑い話になんないんだからねっ！？」

一夜明けたあたしのカラダが（どの辺がとか具体的には口に出せないんだけど）とにかく散々なことになっていたのだ。

放課後には宣言通りセンセのマンションへ連れ込まれ、指導という名の調教を施されることになって。それはそれは嬉しそうに、心の底から愉しそうに、慣れない行為の形に戸惑うあたしを見上げな

がら、浮かべた彼の笑みが忘れられない。
「他の男に跨ってた梨緒にも問題」
「ちょっ！！　声おっきい！！」
「無断外泊させられなかっただけ感謝なさいよ。生意気だっていう新入生も、あんた達盛り上げるのに一役買ったって思えば褒めてしかるべきだわ」
「盛り上がったのはあっちだけ！」
「本当？　梨緒の方も夢中になってあちこち咬みついたりしなかった？」
うふふー。なんて。
重ねた指に顎を乗せながら、あたしを見つめる紗枝の瞳がランランと輝いている。
「あ、あたし、トイレ行って来るっ」
居づらくなったあたしは廊下へ飛びだした。
元々勘の鋭い紗枝だけど、なんでそんなことまで分かっちゃうんだろ。実は彼女の言う通り、あちこちこそしなかったものの確かに咬みついてしまったのは事実なんだ……。
（教室戻りづらいなー）
特に行きたくもなかったトイレの手前、壁に寄り掛かって深く息を吐き出した。

センセがしたくもない残業続きでストレス溜めてたのは知ってた。“愛され痕”の一件がバレてるって発覚して以来、学校でするのを止めてくれた。
それらのお陰で解消し切れない不満がまだまだあるんだってことは、昨日、言葉や態度で嫌というほど思い知らされた。

『お前が全然足りてない。京極が邪魔してくれなきゃ毎日抱いてやるのにな』

甘えたような雰囲気を匂わせて口惜しそうにキスまでされたら、少しは協力的になってあげてもいいのかな、とか。一瞬でも流されかけたことを思い返して身震いする。

「梨緒？　なにしてるのこんなとこで」

我に返ったところでトイレから出てきたカイに声を掛けられた。

「……ちょっと、考え事？」

「そ？　昨日あれから諏訪先生と大変じゃなかった？」

「えっ？　あ、えと、まぁ……それなりに……」

苦笑いを浮かべた表情で、カイが訊ねた意味を察することが出来た。時々こんなイタズラめいた事を言うことが増えた気がする。

「梨緒、いちいち否定しなくなったよね。困ったな」

「なんでカイが困るの」

「戸惑わせたくてからかってるのに、あっさり認められたら手を出したくても気が失せるでしょ？」

教室までカイと一緒に戻ることに決めて、並んで歩く廊下で恥ずかしげもなくさらりと言われ、あたしは思わず足を止めてしまった。

「だっ、出したいのっ！？」

「うん。出したいよ。前にも言ったけどさ、この頃の梨緒はすごく女の子っぽくって可愛いから。キスしたり押し倒したりしたことがあるだけに、歯痒いんだよね」

廊下から差し込む朝日を背景に、人懐っこい笑顔全開で「押し倒す」って単語はさすがにどうかと。爽やか過ぎて不釣り合いだってことに気付いてないんだと思う。うん、きっとそう。

「カイってさ、なに言っても許されちゃいそうな雰囲気あるよね。役得だよ」

「そう？　じゃあもっと他にも言ってもいい？」

同じように足を止めたカイの口調に直感が働いたあたしは、慌てて両手を突き出して止めた。

「ちょっと待って！！　やっぱり訂正、許されないようなこともあるかもっ！！」

なんか、聞いちゃいけないこと言いそうな雰囲気だった！
「なんだ残念」
大きな体を小さく竦めるカイが苦笑する。
「あのねカイ。お願いだから隙あらば、とか……しないでね？　あたしカイのこと嫌いになりたくないんだからね」
「分かってるよ、ごめん。ちょっとふざけ過ぎたね」
そういえば、と別な話題に切り替わる。
「昨日の帰り、M高の原田に会ったんだ。定例の練習試合申し込んで断られたんだけど、どうかしたのかって訊かれたよ」
隣町のM高剣道部とは十年以上交流がある。地区大会前のこの時期に、調整を兼ねて練習試合を行うのが定例になっていた。中でも原田くんは中学時代からの有名剣士で、県内で彼を知らない剣道部員はいないっていうくらいの実力者だ。
「聞いてないよね？　そんな話」
「うん。顧問が素人の先生に変わって引き継ぎ事項から漏れてるのかもしれないから、オレから確認しとくとは言っておいたけど。どう思う？」
「きっと理事長代理にでも相談したに決まってるよ。じゃなかったら他校からの申し込みに自力で断るなんて、小堺先生には絶対できないって」
おろおろしながら理事長代理に判断を仰いでいる様子が目に浮かんで、一気に不愉快な気分になった。
「オレも同感。放課後直談判しに行ってみる？」
「ん、絶対行く！　あたし今年こそ原田くんに勝ちたいんだもん！」
「あぁそっか。梨緒的に譲れない理由はそこだったね」
声を上げてカイが笑った。
練習試合の最後には自由に個人戦を行える流れになっていて、あたしは苦手とする剣道スタイルの原田くんに二年間手合わせをお願いしている。
でも今まで一度も勝つどころか、一本も取れたことがない。

「今年で最後だしせめて一本……ううん、絶対勝ちたいの！　去年より断然自信あるし、勝てる気がするんだ！」
高々と突き上げた拳に気合いを込めた。
「単細胞が。気合いで勝てるなら誰も苦労しない」
ぐんぐん伸びたあたしの鼻っ柱を容赦なく叩き折るような冷めた声の主が、すぐ後ろ。
「センセっ」
ＨＲへ向かう途中のセンセがそこにいた。
正直、昨日の今日でまともに顔を見られないと思ってたから、【教師モード】のこんな彼らしい登場が心の底からありがたかった。
「男子の全国レベルを甘くみるな。苦手意識を克服したところで実力が縮まった訳じゃねぇぞ」
「うっ」
「けど諏訪先生、昨年のこの時期に比べたら梨緒がかなり実力つけてるのは認めますよね」
ばっさりと一刀両断されたあたしに、カイがさり気なく助け船を出してくれる。
「そんなものは個人レベルの比較に過ぎない。練習量だけで言えば、Ｍ高の方が遥かに上だ。それに原田は近隣大学から誘われて定期的に練習に参加していると聞いている」
「え！　すごい」
「それでも勝つと言い切るつもりか」
与えられた情報だけからしたら到底敵わないかもしれない。全国レベルの男子選手に勝とうなんて、最初から無謀だってことは分かってる。
「それでも、やってみなきゃ分からないよ。練習に手を抜いてきたつもりないし、今の状態で負けるなら実力不足だって素直に認める。やる前から諦めるのは、秒殺で負けるよりイヤ」
「梨緒らしいね」
信頼を寄せるセンセの指導に従って練習してきたんだから、負け

ても悔いはないんだよって。
センセの背中に宣言してみせた。
「練習試合が出来ないんじゃ、元も子もないがな」
一度もあたしの顔を見ることなく、それだけを言うと教室の中へと姿を消していく。
少し前のあたしなら冷たい態度に不満を唱えたのかもしれないけど。
彼の白い首筋に見つけてしまった。ワイシャツで詰めた襟元から、動きを見せるたびにちらり覗く戯れの痕。
昨日の彼は今日のセンセに違いなくて。恥ずかしいけどそんなことが嬉しくて。
「相変わらず素っ気ないね諏訪先生」
慰めるように言ってくれたカイの言葉にも、笑って返せる余裕があった。

「だって、センセだもん」

センセが余裕だったワケ、あたしにもほんのちょっと分かる気がするよ。

＜5＞

放課後。カイと打ち合わせた後に職員室の小堺先生を訪ねた。
M高からの練習試合を断った理由についての直談判だった。

「先生。再来月に控えている地区大会へ向けて、今月と来月に他校との練習試合を組んで調整をつけたいんですけど、それに向けての練習メニューを今日から僕と時任さんで組んで進めますので宜しくお願いします」

真っ先に練習試合の件を追及しようと思ってたあたしを黙らせた理由はこれなのか、と納得した。もっともらしい理屈を並べてさり気なく練習試合の必要性を説くなんて、さすがだと思った。おまけに口を挟む隙も与えないなんて、カイもなかなかの策士家だ。

机の上でテキストを捲っていた小堺先生が、ずれ落ちたメガネを持ち上げながら顔を上げた。

「必要ありません」

あたしたちは顔を見合わせ、互いに耳を疑った。

「は？」

「どういう意味ですか」

今のニュアンスでいくと練習試合どころか、練習すら必要ないって風に聞こえたんだけど。

「大会と同じ時期に学期末考査が控えてますので、そちらを最優先にしてもらわないと。大会へ向けての練習より、テストに向けての勉強をして下さい。これは理事長代理のご意向でも――」

いつぞやと同じような言葉で締め掛かった小堺先生に、あたしは切れた。

「ふざけないでよ！！」

「ひっ」

ここが職員室ということも忘れて声を張り上げ、白衣につかみかかる寸前だった。ガタガタと椅子の音を立てて、弱腰の先生が頬を引き攣らせる。

「練習試合の話を勝手に断ったって、相手のガッコの生徒に聞いたんですけど！　ずっと続けて来たことなのに今年はどうしたんだって言われたんですからっ！　今までもテストと時期が近いことあったけど両立させて来てるんだから、大丈夫だってば！！」

「梨緒、落ち着いて」

カイが腕を掴んでくれなかったら、思い切り小堺先生の体を揺さぶっていたかもしれない。

周囲の先生たちは聞こえない風を装って知らんフリ。……しながらバッチリ耳を傾けてる感じ。

「ほ、補習を受けるような結果を出していたら……そ、それは、両立させているとは言いませんっ！！」

「はあっ！？」

それって、確実にあたしのこと言ってる？

またあたし？　って言葉は呑み込んで、先生に詰め寄った。

「あのっ」

「ひぃぃ」

「梨緒ってば」

大きな手がもう一本追加されて。両腕を押さえ込まれて引き寄せられた。

あたしから逃れるようにテキストを頭に乗せて縮こまる、ひ弱な顧問を見下ろして嘆息。

「カイ、M高に連絡取って練習試合組み直してもらおうよ。あたし達でも手配できるよね」

「だ、ダメです！　理事長代理が期末考査を最優先させろと……」

理事長代理、理事長代理とまだ言うか。冷徹な細面の顔が浮かんで来て、腹が立つ。

こうなったら徹底的にやってやろーじゃない。

「両立させれば文句ないんでしょ！　補習受けない点数取ればいいわけでしょ、いーわよ、やるわよ、勉強も大会へ向けての練習もきっちりやってやるんだから！　だから小堺先生は口出ししないで下さい！！」

気迫に圧倒された小堺先生は、ついに椅子からずり落ちた。

「そういうことなので、両立させていく意向を剣道部員の総意として京極理事長代理に宜しく伝えて下さい。小堺先生」

柔らかな物腰でカイがお願いしてるというのに。すっかりビビってしまった先生は言葉を失ったまま、無言だった。

職員室を出てすぐに、ごく自然にカイ交じり合った視線。

「言っちゃったね、梨緒」

「ん……言っちゃった」

売り言葉に買い言葉。出てしまった言葉は取り戻せない。

補習受けない点数取ればなんて、今さらながら事の重大さを少しずつ感じ始めて少々ブルーになってきた。

「あんな威勢のいい啖呵切ったからには後戻り出来ないからね？　梨緒の勉強はオレがみてあげるけど、他の部員にも徹底して置かないとまずいな」

「みんな割と優秀でしょ。あたしより成績ヤバい子なんていないって。大丈夫だよ、うん！」

腰に手を当て大きく頷いた。そんな様子にカイがお腹を抱えて笑う。

「言い切るんだ、そこ。ある意味すごい自信だけど」

今までセンセに散々「国宝級」だの「底」だのバカの珍品呼ばわりされてきたから、そりゃ自信もつくってもんよ。ダテに鍛えられてないもん……ってなんか違うか。

「とにかく、みんな集めてミーティングしなきゃね！」

あたしみたいなおバカな後輩が、どうぞいませんように。

自分勝手な神頼みをこっそりしてみた。

男女の部員が全員集まったところで、カイから今後の活動について簡単な説明をしてもらう。
最終的な目標は1月に行われる全国大会。夏休み中に幕が開ける予選を突破しなければ始まらないんだけど、再来月に地区内で行われる大会はその予備戦ってことで。
「次の大会は学年別で団体・個人戦が行われるから、毎年一年の実力を見る目安にしてる。団体・個人の出場枠の割り振りはオレの方で練習の様子を見て決めるから。大会の内容によっては、夏休みの予選に向けて二・三年レギュラーも容赦なく振り落とすから覚悟しといて」
目標が掲げられると、部員達の眼がやる気に満ちた色に変わった。
「それと。地区大会の時期が期末考査と近くて、成績に影響が出るんじゃないかって指摘されてる。ウチの部は目の敵にされてるみたいだからね。下手すれば部活停止なんてこともあり得るかもしれない。くれぐれも補習者が出ないように、各自勉強の方もしっかり頼むよ」
すると。二・三年生の視線が一斉にあたしへと向けられた。
「それって時任先輩が一番ヤバいんじゃないですか」
「どーすんですかっ。部停とかシャレになんないっすよ」
「梨緒ぉ～～大丈夫なのっ??　ホント頼むからね！」
「橘くんお願いだからしっかりカテキョしてやって！！」
揃いも揃ってこの人たちってば……。
「センパイ、部長のクセにバカなんだ？　どーしよーもねーじゃん、カッコわり」
なにをっ！！
声の主をキッと睨みつける。小生意気な暴言を飛ばして来た相手は当然彼だ。高津亜藍。挑発に乗ったらダメ、と自分に言い聞かせて軽くあしらってみた。
「文句言う前に自分の心配でもしてたら」

「オレ、頭いいからご心配なく。なんならセンパイのカテキョ引き受けてやってもいいよ？」

一年のクセに、どうしたら三年の勉強見れるっていうのよっ！

教科書見りゃ簡単でしょ、っていう嫌味なワケっ！？

やっぱりムカつく！！！

握った拳がふるふると震え出して、一発殴ってやろうかなんてイケナイことまで頭を過って。いよいよグーにしようか、パーにしようかというところまで考え始めた時だった。

「高津。梨緒はバカじゃないよ」

険悪な場の雰囲気を中和する、カイの穏やかな声が響いた。

「人より少し勉強に対する意識が欠如してるだけ。どんなに成績優秀でも剣道の腕がど素人の部長じゃ、そっちの方がカッコつかないだろ？　その点彼女はどこに出ても自慢できる、立派な女子剣道部の部長だから誇るべきだと思うけど」

なんか微妙に「おバカ」を言い替えて上手いこと話を擦りかえられてるだけのような気もしないけど。

カイのフォローに部員達から笑い声が上がったから、まあよしとしとくか。

――と、その場はなんとか収まったものの。

用事があるからと先に帰宅したカイの代わりに道場の戸締りをしていた時、高津くんの逆襲はやってきた。

「昨日はセンセといっぱいシたの？　勉強嫌いで剣道バカなリオセンパイ」

突然ふうっと耳の後ろに息を吹きかけられて、あたしは思わずその場にヘタりこんだ。

「な、な、な、なにすんのっ」

そこは弱点なんだってばっ！！　ついでに今、色々とんでもないこと言ってたよねっ！？

「高津くんっ、キミ帰ったんじゃなかった？」
腰が抜けるような脱力感から立ち直れずに見上げれば、オレンジの髪がふわりと揺れる。
「だってセンパイ」
にやりと笑った高津くんが体を折って手を伸ばした。
あたしへ伸びてきた指が、耳裏の髪をそっと除ける。
「こんなとこにキスマークつけてヤラシイから、気になってさ？」
首筋にさわりと触れる指先の感触にぞくり、ぞくりと体が震えた。
「やっ」
再び弱い部分を責められて思わず。全身を駆け巡った刺激に、センセ以外には聞かせたことのない声が漏れだしてしまった。
「……へぇ。見掛けに寄らずかわいい声」
「うっ、うっさい！　触んないでよっ」
思い切り手を叩き落して、あたしは立ち上がった。
「昨日はセンセに救われて、今日は橘部長にフォローされて？　しまいにはこんなイケメンの後輩にちょっかいだされて、もってもてじゃん。センパイ」
「高津くんのちょっかいだけは余計だけどねっ！　自分でイケメンとか言う人あたし大っキライなんだけど」
「嫌いでいいんじゃない別に。好かれようなんて思ってないし。むしろ大歓迎つーか」
じりじりと追い詰めてくる気配に、ヤバいと思って咄嗟に身を避けた。高津くんの後方へ回り込もうと素早く移動した腕を捉まえられてハッとする。
「動きが遅いって、センパイ。そんなじゃ今年は全国遠いよ」
腕が引き寄せられた瞬間、咄嗟に顔を背けた。
二度もキスされることは避けようと取った行動も、高津くんにとっては作戦の範囲内だったらしい。
くすりと、確かに笑った気配を感じた。差し出すように晒し出した耳へ、掠れ気味の小さな声が直接吹き込まれる。

「オレセンパイのこと、泣かすって決めたから」
「……んなのよっ、あたし何かした？　しつこくされる理由が分かんないんだけどっ！」
「そんなの」
声の後に耳がやんわりと唇に挟まれる感触がやって来て、今度こそ腰が抜ける、そう思った。
「アイツに聞きなよ」
冷たく放った言葉と共に、あたしの身体が道場の扉へ押し付けられた。激しく打ち付けられた背中に痛みが走る。
「いたっ！」
「もっと痛くする？　それとも声上げるほど気持ち良くする？　泣かすって言っても方法は色々あるから、最初くらい選ばせてやってもいいけど？」
体格差と男女の力の差が歴然なのをいいことに、どこまでも優越感に浸った態度が気にいらない。
けど、この前のあたしとは違う。
劣勢になりながらも必死で探した彼の隙。そして気付いた。扉と高津くんに挟まれた状態でも僅かに足だけが自由に動かせるんだってこと。
「どっちもお断り！」
力強く思い切り彼の足を踏みつけて、怯んだ所へつま先で脛を蹴り飛ばす畳み掛け攻撃。
「ってぇ」
どうだ、ざまーみなさいっての。
空手家じゃあるまいし、そこまで鍛えてないだろって予想は見事的中した。
目の前の壁が崩れて、抜け出したあたしは離れた場所からこちらへ向かって来るセンセの姿を見つけた。
「センセっ」
その胸に、躊躇なく飛び込む。

「遠目にも襲われてるのが丸見えだと、さすがに不愉快なんだがな」
受け止めてくれた腕が、力強く抱き返してくれた。
「ごめん。でもっ、何もされなかったよ」
「嘘つけ。耳食われてただろ」
「あ……あははは」
丸見えって、そこまでばっちり見えてたんだ。
「あの体勢なら、急所に膝蹴り喰らわすのが正解だ」
「正解って……なにそれ」
腕の中で見上げた顔に小さく浮んだ勝気な笑み。
呆れるあたしに降りて来た、強がりな彼のキスが唇にひとつ。高津くんに食まれた耳にも、またひとつ。
「簡単に押さえ込まれてんじゃねぇぞ、馬鹿が」
そっと呟かれた言葉が妙に嬉しかった。

<1>

道場の床を踏み込む足音や竹刀の激しく打ち合う音。
部員達から発せられる気合いの声。
フロアの一番日当たりが良い場所に置かれたパイプ椅子が一つ。
耳を塞いだところで遮断することは出来ないそれらの音に、手元の雑誌から時折顔を上げては怪訝そうな顔をして座るのは、顧問とは名ばかりの先生だった。
「嫌なら引っ込んでればいいのに」
「梨緒。聞こえる」
「どうせあの人に余計なことしないように見張ってろ、とかなんとか言われたんでしょ」
あの人、と口に出すだけで嫌な気分にさせる京極理事長代理。
人間味に欠ける、マネキンみたいな人。初対面からあたしを毛嫌いする冷たい人。
大っキライな人。

昼間、廊下で久々鉢合わせた。
今日の星座占いが久々に一位だったんだって、そんなことで上機嫌だったハズなのに。目にしたその顔を認識した途端、不愉快フィルターがあたしのココロを覆って嫌な気分一色に染まった。
改めて見たその顔は、やはり血の気を感じられなくて。サイボーグみたいに冷たい印象。
この人の生きてて楽しいことって何なんだろう、なんて余計な事まで考えてしまう。

『顧問の指示を無視して脅迫紛いに盾突いたそうだな。存在だけでも目障りだというのに、余計な騒ぎをよくも次々と起こしてくれる』

腰巾着の校長先生を引き連れて向かう先は、恐らく応接室だったんだろうと思う。前を通り過ぎてきたその部屋から若い女性の声が聞こえていたから。

目障りなら無視してくれればいいものを、足を止めてわざわざ嫌味を言ってきた。

『大会が近いのに練習するな、なんて言われて納得できませんから』

『無意味なことをする必要はないと示唆したつもりだ』

『勝つ必要がないってことですかっ、それ！』

『そうだ。夏期休業明けに全ての運動部は活動休止となる。進学化へ向けて廃部する意向が決定した。特待制度も廃止する。有終の美を飾る機会が与えられた君たちは、運がいいと感謝すべきだな』

『運動部全部、活動休止？　廃部って……』

突然の全廃宣言に呆然とした。いくらなんでもの急展開に物申さずにいられるもんかっ。

『他の進学校にだって運動部くらいあると思いますけど！　こんな強引に決めて、代理のクセにそこまでする権利あるんですかっ！？』

代理のクセに、という言葉は禁句ワードだったらしい。

無表情が常の顔に乗った細い眉が、嫌悪を示す動きを見せた。

『これは理事長の意思でもある』

『ウソだよっ！』

断言出来る。

この学園のスポーツ特待制度を始めたのは今の理事長だって言ってた。学生時代に経験するスポーツには大人になっても意義があるって、球技大会や水泳大会なんかも始めたって。

だから運動部を全部廃止するなんて理事長が言うわけないんだ絶対に。この人が無理矢理どうかしたに違いないんだから。

『見苦しいな。首の皮一枚で繋がったような無能が』

『な……』

『この学園に君など必要ない。今学期が終了した時点で真っ先に切り落とされる覚悟でもしておくことだな』

あくまでも冷静を装って。どこまでも人を見下して。
『廃部になんてさせないから!!　あたしだって、簡単に切り落とされたりしないんだから!　あんたなんかの嫌がらせに負けたりしないんだからっ』
『きききっ、君っ!!　理事長代理に向かってなんて口の利き方するんだっ!』
慌てふためいてフォローに回る校長もまた憎らしい。
――知るかっ!!!
唾でも吐きかけたいくらいの怒りの気持ちそのままに、あたしは走り去った。

そんなことがあってずっと続いている不快感の理由は、紗枝にもカイにも話してない。
「あーもう!!!　あたしって厄年なのかなぁ!?」
これまでのことに上乗せして一日中引き摺ったイライラが、そんな言葉となって発散される。
「時任先輩怖いっすよ!!　もうちょっと手加減して下さい!」
都合良く打ち込み練習中なのに乗じて憂さ晴らし。
面を叩きつける竹刀の音や感触って、ストレス解消に最適。打たれる側の一年生には申し訳ないけど、今日のところは諦めて。
「まだまだ!　行くよ!」
「えぇぇぇ」
逃げ腰な声に重なるように道場の扉が開かれた。音に何気なく視線を奪われる。姿をみせた人物に、完全に目が釘づけになった。
「センセ……?」
顧問を外され今やすっかり部外者になってしまった彼が現れたからだ。

たまには様子を見に来てやると言ったきり、まだ一度も練習に顔を出さずにいた。
「諏訪先生！」
「先生」
同じように姿を見つけた部員が次々に足を止める。
”諏訪”の名前に弾かれたように椅子から立ち上がったのは、小堺先生だ。勢い余って倒れた椅子を慌てて直して、あたふたとした様子でセンセの元へ近付いて行った。
「あ……あの……諏訪先生は一体何を……」
「授業の内容で分からない部分を小堺先生に伺いたいと、熱心な生徒が職員室を訪ねて来たのでお知らせに。ついでに留守を預かろうかと」
「そそ、そうですか！　それはわざわざ、有難うございます！　でででっ、ではっ、お言葉に甘えて行ってきます！」
見たこともない機敏さで飛び出していく白衣を見送って、

「――な訳あるか」

にやり、悪魔が口の端を上げて笑って見せた。
「……な……」
してやったりの表情を見届けたあたしはそのまま言葉を失って、ぽろっと竹刀を落としてしまった。

（わ、悪いヤツ～～～っ）
鮮やか（？）な手口で顧問を”追い払う”ことに成功したセンセは、部員達に練習を続けるよう告げた傍ら、部長のふたり――つまりあたしとカイを呼び寄せた。
「あんなウソ、すぐにバレてさっさと戻ってきちゃうんじゃないんですか」
「一時間は戻って来れないよう、抜かりなく手配済みだ」

戻って来れないよう抜かりなくって……どんな手配したの、このヒト。

悪巧みには手間も時間も喜んで費やすから、ロクでもない計画を立てたに違いない。まさか「また」使用人利用して悪事に手を貸させてるとか、ないよね？

疑わしげに向けたこちらの視線を知ってか知らずか、それより、と言葉を続ける。

「職員室で脅迫したという遣り取りの一件だが、」

「脅迫じゃないです、直談判！」

「再来週の土曜、M高との練習試合を取り付けておいた。場所は向こう。時間は十時。一分たりとも遅れるな」

「「えっ！」」

あたしとカイ、ふたりが同時に声を上げた。

「諏訪先生が自分から手配してくれたんですか？」

「頭下げるなんて絶対ヤダって、意地でも動かなかったのに？」

間髪置かずの突っ込みに、すっとセンセの眼差しが氷点下の装いに変化したのを見逃さなかった。

こう言う時は逃げるに限ると、体が先に反応する。

「れ、練習行ってきまーす」

「あ。オレも」

同じ雰囲気を察したらしいカイと連れ立った所へ、センセの声が呼び止める。

「おい待て。そっちの馬鹿な方」

むっとしながらも言われて足を止めてしまった自分が悲しい。

先行ってるよ、と苦笑いを浮かべながら部員達の輪に掛けて行くカイの後ろ姿を、横目で恨めしく見送った。

「な、なんでしょーか……」

「お前は少し発言に気をつけろ。仮にも部長だという立場を忘れるな、軽はずみな言動で迷惑被るのはあいつら全員だってことを自覚しやがれ」

「……はい」
こんこんと始まるお説教にしゅんとなる。
「厄年がどうだと叫んでいたが、お前は間もなく前厄を迎える。当たらずも遠からずってとこだ。ひとつ利口になったな」
外まで聞こえてたんだ。あはは。
今度こそ背中を向けて練習に、とトボトボ歩き出すあたしを再度センセの声が引き止める。
「お前は馬鹿だが無能とは違う」
ぴたりと足が止まった。そして、振り返る。
「……センセ聞いてたのっ？」
「応接室に向かう途中で、嫌でも耳に入って来ただけだ」
「だったら、」
助けに入ってくれてもいいのに、と文句を言ってやろうと思えば。
「誰が簡単に辞めさせたりするか」
お説教口調が一転、柔らかくて甘い響きを持ったセリフにどくんと鼓動が跳ねる。
「傍に置いて可愛がる楽しみが減ったら、つまらんだろうが」
レンズ越しの瞳が微かに細められた彼の笑顔が、愛おしくて。力強い味方の存在を再確認して。
駆け寄って抱きつきたい衝動が、大きく胸を締めつけた。

＜2＞

その人がいるだけで、ガラリと空気が変わる。
自然と気持ちが引き締まって、集中力が高まるのを感じた。
いつの間にか部員のみんなに連鎖した張り詰める雰囲気の中での練習は、ここしばらくで一番中身が濃かったように思う。
腕組みをしたまま何も語らない眼差しは厳しいのに。
見守られているような温かい気持ちになったのは、何故なんだろう。

「総じて動きは悪くない。――が、一年は攻めに単調さが窺える。二・三年の動きを見てパターンを増やしてみろ。二年の加瀬、花沢、鮎川。お前らはちっとも学習してねぇぞ、相手のペースに流され過ぎだと言ってる。女相手に攻め込まれていちいち焦る奴があるか」
名指しで指摘を受けた三人が、揃ってあたしを恨めしそうに見てきた。
確かにあたし、君たち全員一本勝負でこてんぱにやっつけちゃったけど、それがなにか？
「男子と同等に試合する人は、女子ってレベルじゃないよな？」
「ああ、だよな」
「こえーもん。時任先輩ハンパなく」
「あのねぇ！　情けないこと言ってんじゃないの！　見てよこの細腕！　こんなのに負けたんだからねっ？」
後輩とはいえ体格差も腕力も遥かに上回る男子が三人、口を揃えて相手が悪かったんだとばかりに言い訳をする。耐えきれなくなったあたしは道着の袖を捲くり上げ、二の腕まで晒して叱咤した。
「立派な筋肉美を兼ね備えた腕だな」
「はいっ？」

あり得ないセンセの横やりに、どっと部員たちから笑いが起こる。
そんなムキムキじゃないんもん、と内心で反論しつつ、恥ずかしくなって慌てて袖を下ろした。
「時任の言う通りだ。お前ら、小学生みたいなチビに負けて悔しいとも思えないなら辞めちまえ」
同意という割に意図的な悪口の含まれた言葉に、激しく反応した。
「ちょちょっ、ちょっとセンセ！　チビは関係ないと思うけどっ？」
「実力差を知らない外野から見た場合の率直な意見だ。どこが悪い」
「だったら別の例えがあるでしょ！？　せめて“女子に負けて”くらい言ってくれてもいいんじゃないですかっ？？」
「聞いてなかったのか。こいつらの中じゃお前は女子を超越してる。その例えは不適切だ」
ぬ、ぬぁ～にをぉ～～っ。
フォローしなさいよっ、フォロー！！　あなたはあたしの彼氏なんでしょーがっっ。
「まーまー。梨緒、落ち着いてよ」
ってあたしの肩に手を置いて宥めるカイだって、しっかり笑い過ぎて目に涙浮かべてるじゃん！！
少し前の乙女な胸キュン、きっちりのしつけて返してもらうんだからぁぁぁっ。

なにあれ！　なんなの！　なんだっていうの！！

思いがけないサプライズで剣道部を訪問してきたセンセの登場は素直に嬉しかった。
彼の目があるだけであんなにも雰囲気が変わるなんて、存在の大きさを思い知らされたっていうか。悔しいけど、いるだけで何か違うって実感。
……剣道部顧問として、ね？
問題はその後だよ、後！

部員のみんなは「久々面白かったなー」なんて、ショーでも満喫したような顔してたけどさ。あたしは全然面白くなんてなかった！

晒した二の腕の筋肉美がどうだとか、小学生みたいなチビにとか、間接的に人が傷つくようなことずけずけと言ってくれちゃってさ。

「あんなのは彼女に言うセリフじゃなーいっ！！」

そーだそーだと、あたしの中の乙女なあたしが拳を高々と上げている。

ちょっと前には恋人モードを臭わせてたクセに。

“傍に置いて可愛がる楽しみが減ったら、つまらんだろうが”

言った声も見せた笑顔も、思い返せばこんだけ胸が苦しくなって大好きって気持ちが溢れて仕方ないっていうのに。

「サドメガネのエロ教師～～～っっ！！！」

「あのねぇ梨緒。あんたの声は元々マイク要らずなんだから、そんなとこで叫ばれた私の鼓膜に今度こそ傷でもついたらどうしてくれるっていうのよ」

「……ごめん」

なんか最近、ずっとこんなパターン。

部活帰りが一緒になった紗枝をカラオケに強引に付き合わせた。

予約をいれた曲がイントロを終えるタイミングで、個室の壁に設置された電話が二度目のベルを鳴らす。

「紗枝、延長お願い」

「帰らなくていいのー？　梨緒」

「いーの！」

時間を確認するようにあたしの携帯を眺めていた紗枝に、短く言って歌い始める。

「……あらそ。ま、いいけど」

受話器を手にした紗枝が“延長お願いしまぁす”と告げると、トイレにでも向かったのか部屋を出て行く。

選曲したのは大好きな男性二人組ユニットのロックなシャウト系ソング。我を忘れて熱唱して、曲が終わる頃になっても紗枝はなかなか帰って来なかった。

（また彼氏と電話でもしてるんだろうな）

大学生の彼氏は紗枝にベタ惚れで「ウザいくらいよ」なんて素っ気なく言う割に、頻繁に送られてくるメールにもきちんと返すし、電話が来れば絶対に優先して受けるし。満更でもなさそうなんだ。

「電話かぁ」

あたしの方からセンセに掛けたことってほとんどないな、そう言えば。

担任を持つまでは一方的なメールを送りつけるだけだった彼の携帯から、声が聞きたいなって思うタイミングで着信があるし。

「センセ忙しそうだしな」

嫌がらせ的残業をこなして帰宅する時間は、あたしには見えないし。

テーブルに乗せられたままの自分の携帯に何気なく視線を落とす。一件のメール受信。そしてあたしの荷物だけしか残されていないことに、ようやく気付いたのだった。

「あ～～～っ！！！　紗枝、逃げたぁぁぁぁっ！！！」

マイクを持って大絶叫。タイミング良く部屋の前を通り過ぎた人たちが何ごとかと硝子越しにこちらを窺うのが見えた。

携帯に手を伸ばすと、ジャストタイミングで勢い良く着信音を響かせるそれに驚いてお手玉をする。

「うわわっ」

小窓に表示された名前に慌てて携帯を耳に当てた。

「もしもし？　センセ？　どうし――」

『どうしただと？　さっさと出て来やがれ』

「えー、だって今延長したばっかりなんだよ、もったいないじゃん。……って。あれ？　センセ今どこにいるの？」

『お前に騒音被害を受けてる店の外だ』

「……へ？」
『いいからとっとと荷物をまとめて出て来いと言ってる。こっちから乗り込んでみろ、そこで襲われる覚悟出来てるんだろうな』
「ななっ！　なんでそんな話になっちゃうワケよっ、出る出る、出ますっ！　すぐに出るから絶対入って来ないでよ！？」
ぶちっと通話を切って急いで部屋を出た。延長したばっかりなのに、と内心むっつりしながら会計を済ませようとすると、
「お会計は先に頂きましたので結構です」
とのこと。
一瞬紗枝の顔が浮かんだけれど、待てよ、と感謝の気持ちが疑惑に変わった。紗枝が消えてセンセが現れる、というこの定番になりつつあるパターンはひょっとして――。
カラオケ店の自動ドアを潜った外に、電話の主が立っていた。それはそれは仏頂面をぶら下げて。
「センセ、また紗枝と“取り引き”したの」
「鼓膜が破れる前に何とかしろと連絡して来たのは結城の方だ」
やっぱり。今回はカラオケ代の立て替えで手を打った、ってとこか。
「はい。これで足りる？」
ふたりの取り引きになんら関係のないあたしは、奢られる意味もないので手にしたままの財布から千円札を三枚抜き取って差し出した。
「とことん馬鹿な女だなお前は」
「はぁっ！？」
「状況を考えろ。俺を警察に差し出されたくなければ、札を今すぐ引っ込めろ」
「……」
言われてあたしは今の状況を考えてみる。
険しく眉を寄せた、仕事帰りでスーツ姿のオトナ。きょとんとする、同じく学校帰りで制服のまま握りしめた現金を突きだす女子高

生。
　確かにまるで、何かの取り引きをしてる怪しい感じ……かな？
「センセはともかく、あたしは変に疑われるようなことないと思うけどなー」
「カラオケ店内の大絶叫が外にまで漏れだすような、人間離れした声の持ち主は十分変人の素質ありだ」
「変人て……今日はセンセに散々ひどいこと言われてるよね、あたし」
　カワイそう、とか。
　拗ねてぼやいたあたしの頬に、触れた冷たい手。
　吹き抜ける風みたいに一瞬だったけど、柔らかく押し当てられたのは確かに彼の唇だった。
「な、なんでいきなりキスとかっ！」
「応急処置」
「あたしはどこもケガしてないし！」
　頬から離れた指が、つんとあたしの胸元を突いた。
「京極に毒されて落ちてるだろうと、仕事切り上げて甘やかすつもりでメール送ったのに、返事寄越さなかったのはお前だ」
「だって……それどころじゃなかったんだもん」
　追い討ちかけるようにセンセが酷いこというから、ますますイラついて仕方なかったんだから。あたしは悪くないよ。
　態度で示した感情が伝わったんだろうか、答えないセンセはそのまま手を引いて車を停めたという場所へ向かって歩き始めた。
「二の腕を曝け出した時には本気で殴ってやろうかと思ったぞ」
　きっかけは、そんなことなんだって。
　簡単に素肌を晒す奴があるかって叱られて。
　散々毒を吐いたのは、あたしの無自覚過ぎる行動に対する苛々からだったと知って、ちょっと怒りも収まった。

＜3＞

そこかしこにコインパーキングが点在しているというのに、このヒトは。

「センセ……またこんなところに車停めてきたの」

「悪いか」

ワケあって自由に使えるらしい一流ホテルの駐車場に車を置いたって。

センセらしい、とか微笑ましく思っちゃってるあたしは、人並み外れた彼の感覚にじわじわ汚染されつつあるんだろう。

でも、車寄せを素通りして建物内へまっしぐらに進もうとした時は、さすがにぶっ飛んだ。

「どこ行くの、ね、まさかここに入るっていうの！？　あたし制服っ、こんな超高級ホテルにマズでしょ！　さすがに場違いだってあたしだって分かるってば！」

ぴたりと足を止めた彼が振り返り、耳元に顔を寄せてくる。

「騒ぐな、じたばたするな、しおらしくしろなんて無駄なことを言うつもりはないが、挙動不審な態度を見せるな。黙って拉致られてろ」

いいな？　の確認代わりに口づけを落とされて、沈黙。

引き摺られるようにしてホテル内へと連れ込まれてしまったのだった。

拉致られてこんな場所に来れるなら、悪くないかも。

……なんて安易な気持ちを抱いてしまった数分後。

「うっわ～！　すごーい、なにこれ眺めサイコ～！！！　夜景とか

めちゃくちゃキレイそう！！」
　センセのマンションを初めて訪ねた時も同じようなことを叫んだ気がする。
　けどマンションとは立地が全く異なって、超高層ビル群を間近に望む都会的な景色はまた圧巻、唖然とした。これまたマンションと同じく最上階にワンフロアだけしかない超ＶＩＰ待遇の部屋を、どうして簡単に利用出来ちゃんうんだか。
「夜景はこの次。予定外の平日お泊まりは、さすがに母親の信頼を失いそうだからな」
「だっ、誰も泊まりたいなんて言ってないじゃん」
　そりゃあこんな所でふたりで夜景とか眺められたら……とか思い浮かべなかったワケじゃないけどさ。
　隣にやって来たセンセが突然あたしの体を折るようにして肩に担ぎ上げた。
「おわっ！？　ちょっ、ちょっとなにすんのセンセ！！」
「お前は一時間でも平気で窓に張り付いて、ほーだのへーだの言いながら興奮してそうだからな。今日の目的を果たすために移動だ」
「だったらせめてお姫様抱っことかにしてよぉっ」
「却下」
「ケチ！」
　じたばたと抵抗したのもほんの僅か。
　すぐ傍にあったソファに放り込まれた。
「そこに座ってろ」
　言うなりいなくなったセンセが飲み物を手に再び戻って来ると、ぴたりと横に腰掛けた。
　今日の目的――京極理事長代理に罵倒されたあたしを励ますつもりらしいけど、それだけのことでわざわざこんなとこ来なくてもいいのに。
　手渡された飲み物に口をつけながらあたしは思う。
「あたし別にそんな落ち込んでないよ？　センセが“辞めさせない

”って言ってくれたし」
「あれには続きがあってな。京極が無謀な強硬手段に出れば全力で阻止してやるが、期末考査の救いようもない有り様をネタに上げられたら、俺も仕方なく諦めざるを得ない可能性もあると」
「えええっ！！　すごく嬉しかったのに！　頼りにしてたのにぃ！」
「頼るのは結構だが甘えるのとは話が別だ。言っただろ、俺も楽しみが減るのは望んでいない。せいぜい励め」
「そりゃ、頑張るけどさ……」
強力な後ろ盾に心強かった気持ちが途端に揺らいでしまうのは、自分の学力に自信がないからだ。
「一気にものすごいプレッシャー！　あーどうしよう！　ギリギリ合格ラインでも、イチャモンつけられてバッサリ切り落とされそ～～っ！！　容赦ないとことか、ちょっとセンセに似てるよね」
「細胞の出所が同じだからな」
「……さいぼう？」
「京極はあれで一応、俺の兄に当たる」

……はい？　今なんて？

飲み物を零しそうになって慌ててテーブルに置いた。
「あに？　兄って、お兄さんだよね。お兄さんっ！？　理事長代理が！？　マネキンとセンセって、兄弟だったのぉぉぉぉっ！！！」

冷徹っぷりとか毒舌っぷりとかメガネ男子だとか。
共通点はそりゃ確かにあったけど。まさかの驚愕告白に大絶叫したところに「うるせえ」とセンセの平手が飛んできた。
「だけど名字が京極って……」
「母親が違う。諏訪が本家だが俺も本来は“外”の子供だ」
「……あ、そ、そうなんだ？」

初めて訊いたセンセの素性が、いきなり外の子供とかデリケートな話題って。どんな顔して返していいのか分かんないじゃん。

引き攣るあたしの頭に乗ったセンセの手が、そのまま胸に引き寄せた。

「下手な同情するな、血縁にはそんな奴らばかりだ。異母兄弟が何人かなんて数えたこともないがな」

「や……やりたい放題なんだ、センセのお父さんて」

さすが、と言いかけて口を噤んだ。

遊び人体質が父親譲りなんだろうってことは、ひとりで納得することにする。

「俺にタネをばら撒く趣味はないから安心しろ」

「趣味はなくてもついうっかり、ってことが……あったかもしれないよ？　血は争えないって言うしさ」

センセが知らないだけで、知らないところでこっそり隠し子が生まれてるってことだって、否定できないじゃん？　ある日道を歩いてたら“この子はあなたの子どもです”って現れちゃうとか！

「それは確実にない」

突っ走る妄想をムッとした表情でセンセがぶった切った。

「言い切っちゃう根拠でもあるの、センセ」

「ある。ナカでイケたのが、お前だけだからだ。それ以上の根拠が必要か？」

飲み物口に含んでたら、間違いなく逆噴射してた。

一体なんのカミングアウトなんでしょう。恥ずかしさのあまり顔上げられないんだけどあたし。

「いらないと、思う」

隠し子要素は無くなったとして……あたしだけナニした、って本当かな？　最中はひたすらされるがままなんだけど？

「なんであたし？」

恐る恐る腕の中で顔を上げてつい、訊いてしまった。

間近で見下ろしてくるアッシュグレイの瞳が柔らかく細められる。

「お前そんなことばっか俺に訊いてくるな」
「だってと、と、特別なこととかさ！　なんにも……してないのに。センセが今まで付き合って来た人の方が、スタイルも良くって経験もあって……なのにあたしにだけって、」
絶対お世辞でしょって思うけど、センセの口からお世辞は確実に出て来ないだろって思うから。
「そこは察しろ」
ゆっくりと引き上がった口元にドキリとする。
指があたしの唇を誘うようになぞるから、ゾクゾクと背筋が震える。
一体どんな口説き文句が飛び出すのかと期待するようなドキドキ感で見守った。

「愛だ」

……は？
あたしは二度目の凍結を迎えた。
「センセ……熱ある？　あ、愛とか言っちゃってるけど自覚ある？」
「至って平熱、意識も自覚もしっかりあるが？」
「だって」
ちゅっと軽く瞼に触れた、センセの唇。
そんな場所にキスしてくるなんて珍しくて、思わず瞬きを繰り返していたところへ
「馬鹿まっしぐらなお前は可愛い」
と言っては、おでこと頬にキス。
「……どしちゃったの、センセ」
「ガキ臭さが抜けて色気も多少出て来たし、たまに恐ろしく素直で惑わされることがある」
とこっちの問いかけをムシしては、目尻と鼻の頭にキス。
「ね、センセってば」

チュッチュチュッチュ、鳥さんみたいな可愛らしキスとか！
魔王君臨の前兆かと思うようなむず痒い口説き文句とか！
調子狂うから、このトロトロ甘々モードなんとかしてっ。
「あの、」
「誰にも渡さない。どこへもやらない。お前はずっと俺のもの」
きゅん。
久々聞いた俺様所有者発言に、ちゃっかり反応しちゃうあたしの乙女スイッチが全開になったところへとどめのひと言。
「好きだ。梨緒」
ずっくんと、大きく波打つ胸の疼きに襲われて、苦しくて。
何の言葉も返せなかったあたしに、重ねられた彼の唇。
優しくて、甘くて、力強くて、意地悪で。
腕に抱かれたまま延々繰り返されるキスに身を委ねて、ふわふわとした夢見心地な時間が過ぎていった。
そのまま流れでお戯れになるのかと思いきや、全くなにもないままホテルを出た帰りの車中。
天変地異の前触れかとセンセの横顔ばかりを窺った。
「手を出されなかったのがそんなに不満か」
「じゃなくて、まさかだったから！　あんな立派なホテルに連れ込まれたからあたしてっきりセンセに散々されるんだと……」
休憩数時間も覚悟してたのに、キスだけなんて嘘みたい。
っていうかホテル代がっ！　あ、別にあたしはナニかしたかったワケじゃなくてね？　車の中でも済ませられたようなことをあんな所でしなくても、って思ったワケでさ。
「まぁ最初はその気だったんだがな」
なんだ、やっぱり？
「徹底的に甘やかされるだけってのも、たまにはいいもんだろ」
「……徹底され過ぎてお尻が浮くような変な気分が、お陰でまだ抜

けないんですけど」
「可愛がられ慣れてない反動か。不憫だな」
「うっさい！」
「お預けにした夜景とそっちは、来月の楽しみに取って置いてやることにした」
「来月？」
「誕生日だろ、お前」
そうだ。６月にはあたしの１８歳の誕生日が控えてる。
担任を持つと生徒の個人情報を嫌でも目にするからたまたま知った、なんて素っ気なく言うけど。
「平日だろうが残業だろうが祝ってやる。帰れると思うなよ。散々どころかめちゃくちゃしてやるから」
がっつり夜通しでお祝い（？）する気満々な意気込みがみえみえで、ありがとうと素直に言わせないところがやっぱりセンセらしいというか。
「できれば普通でお願い、センセ」
あたしから出せる要求なんて、せいぜいそんなもの。
それも助手席の窓ガラスへ向かってひとり言みたいにしか呟けないって、なんか虚しい。

＜4＞

先週末。

小堺先生には内緒で行われたM高との練習試合。

現地へ向かうと「引率代行だ」と高飛車ぶって待ち構えていたセンセを見つけて、カイとふたりで笑った。

「この間練習覗きに来てくれた時の部員の雰囲気とか、昨日の練習試合の感じとかさ。やっぱり諏訪先生が必要だって感じたよオレ。何とか顧問に復帰できないかな」

あたしだって同じ気持ちだけど、やっぱりあの理事長代理がいる限り厳しいと思うんだ。それよりも、夏休み後の運動部が存続危機だってことの方が気掛かりだ。

『誰にも言うな。その件は俺に預けろ』

センセから口止めされている。

退学が危ぶまれるあたしの事も、部活の事も。期末考査はそれなりに結果を出さないと厳しいようなことを言われたものの、お奉行様みたいなセンセのことだからなんとか上手く凌いでくれるんだと信じてる。

「だけど梨緒。原田に勝てなくて残念だったね」

練習試合の話題を振られて「うん」と頷き返した。

「センセが言ってた通り、去年より格段に上手くなってたよね原田くん。けど一本取れたし」

三年続いた対戦は結局黒星で終わったけど、大金星だと思う。

実際試合後のセンセも、まさか一本奪えるとは思わなかったって言ってた。褒めた後、容赦ない指摘で釘を差すことも忘れなかった

けど。
「でも高津くんがあんだけ強いのにはビックリだったなー」
「そうだね、まさかのM高三年レギュラーに勝ったからね。あの諏訪先生まで感心してたくらいだから。夏の予選のレギュラー入り、検討しようと思ってるんだ」
「まーねー、あれだけの実力見せつけられたら誰も文句言わないんじゃない？　ただなぁ。練習態度はマジメなのに、それ以外の態度と口の悪さが許せない。人として好きになれないよあたし」
「秀でてる人間てどこか欠けてるモノだっていうし、仕方ないよ」
「そーかなあ？　だってカイはなんにも欠けてないよ？　頭もいいし、優しいし、カッコイイし、背も高いじゃん」
指を折りながら改めて確認すると、実はもの凄く完璧な男の子なんじゃないかってことに気付いた。
「うわ、すご。カイって出来すぎ！」
「褒め殺して、誕生日プレゼントの上乗せでも期待してる？」
「え……誕生日？」
思わぬ切り返しに間抜けな顔で聞き返してしまう。時期を近くして同じ話題を別々に振って来られるとは思ってなかったから。
「そう来月だろ。当日は先生との約束あるんだよね？」
「あ……うん。……あのさ、あたし誕生日なんてカイに教えたっけ」
「小学校の時にオレが聞いたんだよ」
「え」
またずい分と時間が遡った気がするんだけど。
「毎年特に意識しなくても、カレンダー見ると“梨緒の誕生日だな”って思うように習慣づいてるっていうか。友達の誕生日とかでもあるだろ、そういうの」
「うん、分かるんだけど……ごめん。あたしはカイの誕生日覚えてないや……」
初恋の相手同士だったはずなんだけどな。
好きでした、なんて胸張って言えない自分が申し訳なくて小さく

なると、カイが笑った。
「気にしてないよ。だって梨緒、諏訪先生の誕生日にも興味示さなかったのに。オレの誕生日はしっかり覚えてるなんてことになったら、間違いなく刺される」
「あははは……」
その件を突っ込まれると返す言葉もありまセン。
「一緒にお祝い出来なくてもいいから、プレゼントだけは渡したいんだ。卒業したら会えなくなるだろうし」
ちょっとだけ目を伏せたカイの言葉を噛みしめる。
成績優秀なカイは国公立大学への進学を希望してるって聞いたから、万に一つ、あたしの進路が進学の方向へ向かったとしても接点はないと思う。
やっと再会できたのにまたさよならなんて、淋しいな。
「そんな顔してると、隙あらば手を出さないって約束守れなくなる」
困ったように笑うカイが大人びて見えた。

残り少ない昼休み。センセとふたりでちょっとした校内デート。
マネキン男がどこからか覗いてるかもしれないけど、そんなのは知ったこっちゃない。
あれ……なんかあたし、思考が誰かさんに似てきた?
校舎の壁に寄り掛かりながらグラウンドを周回している生徒を見つめる、メガネの「誰かさん」をじっと観察。なに考えてるのかさっぱり読めない横顔に諦めをつけたあたしは、そうだ、と思い出した。
「カイが、やっぱり顧問に復帰して欲しいって言ってたよ?」
「実質的な顧問不在状態の中で部長の重圧がじわじわ効いてんだろ。自信のなさから来る甘えに過ぎん。放っておけ」
「冷たいなぁ」
「あの時みたいにお前がしおらしく縋って来るなら、考えてやらな

いこともないがな」
ゆっくりと上がる口角が、彼らしい悪だくみの表情を作り出す。
擦れ違いが続いて自分から会いたいなんて電話で言った、あれだ。
「がっつり休憩二時間コース！？」
「お前。やっぱり身体の絡みとセットの方が覚えがいいな」
「ややっ、それはちょっと違うんじゃないかな？？　たまたまだよ、ほら、あん時色々あったしさ」
味を占めて事あるごとにあんな思いするのは絶対避けたい！
あたふたと身振り手振りを加えながら必死で異論を唱えてみたところ、
「橘といえば」
センセはあっさり話題を替えて引いてくれた。
胸を撫で下ろしたのも束の間。
「あいつ、隙あらばなんて事をまだ言ってるらしいな。往生際の悪い」
「なななななっ！！　な、なんでその話っ！？」
あたしぽろっと言っちゃったっけ？
右へ左へ首を傾げて脳内記憶フル稼働。
……。
（いやいやいや、言ってない！　うん、言ってない！！）
ブンブン横に振ったり、こくこくと縦に頷いたり。
首も柔軟に解れたことろで衝撃の波、再び。
「お前のズボラな性格のお陰で刺されず済んで、あいつも命拾いしたな」
やーんっ！！　だからなんでそんな詳しく知ってんのよっ、この地獄耳！！
生徒の中に紗枝以外のスパイでも雇ってるんじゃないかと、あたしは頭を抱えた。
「いつ牙を剥くか分からない善人気取りの優男相手には、絶対的な油断が生まれる。食うぞ食うぞと牙剥き出しの猛獣小僧より性質が

悪い」
「……ぷっ」
猛獣小僧と例えられた高津くんが、余りにどんぴしゃなイメージで。思わず吹き出すあたしの脳天にセンセのチョップが落ちて来た。
「いいっ！！！！　たぁぁぁっ！！！！　なにすんの、仮にもカノジョにっ！」
「今の話のどこに笑うツボがある。“仮にもカノジョ”なら警戒しろと言ってんだろうがウスラトンカチ」
「ウスラ……？」
おまけの語尾は、きっと小馬鹿にする例えに違いない不思議ワード。リピートしてみるものの結局迷子になって、再び首を捻ったあたしを横目で見下ろす眼差しが冷ややかだ。
反復も出来ないクセに興味持ってごめんなさいっ！
逃げの思考は態度にそのまま出ていたらしく、距離を置いたあたしの腕をセンセの手が捉まえて引き寄せた。
「逃げるな」
「に、逃げてないし」
それぞれの袖が微かに触れ合う位置で並んだだけなのに、ドキドキするのはセンセから仄かに香る香水の匂いのせいだろうか。
大人の人ってみんなタバコの臭いがするんだって思ってた。
お父さんだって、通学電車の中で一緒になる会社員だって、バイト先の店長や佐伯さんだってそうだったから。
「センセって、タバコ吸わないよね？　昔から？」
「ヤニ混じりのキスの催促か。ニガイばかりでいいことないらしいぞ」
だーっ！！！　だからなんですぐそっち方向に話が向いちゃうかなっ。
「もーいいっ、訊いたあたしがバカでしたっ」
「そんな理由で二十歳過ぎた頃早々に止めた」
「へ？」

二十歳過ぎた頃早々にって……ちょいとおかしな時系列になってない、それ。
　っていうかそれってキスした相手に言われたから止めたとか、そんなニュアンスで聞こえちゃいましたけど？　だよね、多分。
……。
なんか、フクザツ？　ちょっと……ヤキモチ？
「そんなことより宿泊許可は取れたのか」
あたしの誕生日をお祝いしてくれるっていう、アレだ。
「まだ。だって言われたのこの間じゃん。いくら誕生日祝って貰えるからってさ、お泊りお願いするのってすっごく恥ずかしいんだから」
そーいうことシてきます、って言ってるようなものなんだから。
「お前、俺に股開くより恥ずかしいことがあったのか」
しれっと真顔のセンセと目が合って数秒。
「ちょちょちょちょちょぉぉっ！！！！」
露骨なセクハラ発言に力任せで突き飛ばした。
誰も見てないかもしれないけどっ、聞いてもないかもしれないけどっ。
お天道様にばっちり見下ろされてるんだからね！！

＜5＞

夜から降水確率８０パーセントの雨予報。
鉛色の雲に覆われてとうとう太陽が姿を見せることはなかったけど。六月に入ってから続いているじとりした湿気は変わらず鬱陶しかったけど。
天気にそぐわない心持ちで浮かれていたのは、今日があたしの誕生日で放課後に控えているセンセとの約束があったからだ。

「センセ、早いね」
「一日中へらへらと顔緩ませて露骨に楽しみにされたら、暗示にもかかる」
一時間以内に迎えに行くから、と学校で別れてから三十分しか経ってない。
駅のコインロッカーに預けた荷物を取り出して着替えを済ませたあたしが、ファストフードで飲み物を手に席に着くとほぼ同時に携帯電話が鳴り出した。
「制服のままでいいと言っただろ」
「やっ、やだってば！　自分はスーツだからってさ、この前めちゃくちゃ恥ずかしかったんだからねっ。センセだってジャージでいいから、って言われても来ないでしょ！？」
「どうしてジャージの例えが出てくる。それに俺はそんな物持っていない」
「だから例えばの話！」
「……意味の分からない例えに想定が及ぶか馬鹿が」
あっさりとやりこめられて言葉に詰まる。
「鞄がだいぶ腹いっぱいのようだが、何泊するつもりだお前」
車を走らせながらルームミラーで後部座席に放られたカバンを確

認したセンセが言った。
「パジャマとか明日の授業の準備とか、お腹痛くなった時用に薬とか……」
「無駄なもんばっかり持って来やがって。腹痛の薬ってお前どんだけ食うつもりだ？　それともなにか、剥かれて寝るの確定で寝冷え対策か。だったら寝巻も必要ないと気付いてもいいものだが」
可愛げない口調ながらもくすくすと笑うセンセの横顔が楽しそう。
確かにパジャマはギリギリまで迷ったけど、持って行かない自分がやる気満々みたいなのも嫌だから詰め込んできたんだけどさ。
「センセの荷物は？」
「店に連絡して一式調達済みだ、ホテルに届けてある」
「ちょ……調達ってまさか……」
「スーツなんて持ち歩くくらいなら、買った方が早い」
このずれまくった金銭感覚！！
まあね、あたしなんかに超高級ホテルのスイートルームを用意するような人だから、普通じゃないんだけどさ。

薄暗くなり始めたビル群の合間に、太陽が残していった赤。
対照的に染まり始めた、空の紺。中間の境界線は紫色に染まっている。
宵闇が濃くなっていくごとに建物の明かりが際立って、見渡す限り光の粒だらけ。
ホテルの最上階から見下ろした風景がこの前と全然違って、とっても神秘的だった。

（うわー綺麗だぁー）

「風・呂」
窓ガラスに張り付くあたしに背後から、覆い被さって頬を寄せた

センセが言って来る。
「ひゃっ、ど……どうぞ？」
「勧めてる場合か。お前も一緒に決まってんだろ」
張り付いていた腕ごと引き剥がされて。
「へ？　やっ、い、いいってば！　センセ疲れてるだろうし、ゆっくりひとりで入ってきたらいいよ、うん！」
「遠慮するな、誕生日の時くらい俺が背中を流してやる」
「誕生日くらいって……いつもじゃんっ。で、それだけじゃ済まなくてエッチなことするパターンだし！！！」
「背中を流すとは、そういうもんだ」
「ちが～～～～うっ！！！！」
あーだこーだの応酬をしつつ容赦なくぐいぐい引っ張られていく浴室に、あたしは絶叫と共に押し込まれることになった。

「ダメだ……センセの思うツボだ……」
脱衣スペースの段階からいちゃこらされて、ゆっくり疲れを取るって感じじゃ全然なかった。
泊まりでお祝い、なんて計画に乗った時点で分かっていたことだけど、センセだってはしゃぎ過ぎだと思う。
がっくり項垂れているあたしの鼻腔に漂って来る香ばしい匂い。
「いい匂いがするんだけどなに……うわ」
ダイニングスペースいっぱいに用意された豪華な食事。テーブルにセッティングされたグラスにセンセが飲み物を注いでいる。
「食い地の張ったお前の鼻なら、嗅ぎつけてすぐに出てくると思った。さっさと来い、軽く動いて腹が減った」
「……軽く！？」
あれが？　風呂場の壁やら浴槽で後ろから下から散々した、あれが軽くって表現の扱いになっちゃうワケ！！
軽蔑の眼差しを向けながら彼の向かい側に腰掛ける。

落とした部屋の明かりを補うようにテーブルに飾られたキャンドル。柔らかい光がゆらゆらと揺れる先に彼の眼差し。
メガネが細いシルバーフレームの恋人仕様になるだけで、がらりと雰囲気の変わる整った顔立ちにドキリとした。
「誕生日、おめでとう。梨緒」
この間の甘やかしモードの時みたいな柔らかい口調だった。
センセに“おめでとう”を言われるのは、これで三度目。
一度目は、昨年の剣道の大会で優勝した時。そして二度目は年明け。それぞれ意味は違うけど、センセの口からその言葉を言われるとあたしの気持ちはぐっと上がる。
「ありがとセン……」
グラスを合わせる手が止まった。
少しだけ考えて、改めて言葉にした。

「今日はこんな素敵な誕生日パーティ用意してくれて、ありがと。……伊織」

呼び慣れない下の名前は口にするたび俯いてしまうけど、
「好き、だよ」
そのひと言は真っ直ぐ目を見てちゃんと言えた。
触れ合ったグラスが透明感のある綺麗な高音を響かせる。
「悪くない響きだ」
小さく笑ってシャンパンを口にした彼が、とても嬉しそうだった。

並べられた料理はどれもこれもが美味しくて、相変わらず小食なセンセが余分に取り分けてくれるからついつい食べ過ぎちゃう。
「うーん、シアワセ～～！！　こんな贅沢、学校の先生のお給料だけじゃ出来ないよね」
「宿泊代すら賄えん」

「……だよね。あんな立派なマンションに住めたり、高い車乗ったり、使用人がいたりするのって全部センセが諏訪のお家に引き取られたお陰ってことでしょ？　この間思ったんだけどさ、理事長代理の方が年上なのになんで本家にセンセなの？」

「理由は様々らしいが年功序列は関係ないってことは確かだな。俺の場合はたまたま母親が死んで身寄りがなくなったからなのか、そこまでは知らん。継ぐ気もないから興味もない」

「え、お母さん……」

「四歳の時に病死した。俺が暇潰しに教師を目指した理由は、母親が就いていた職業に対する単純な興味からだ」

「センセのお母さんて、先生やってたんだ」

次々と過去が明らかになる度、驚かされるセンセの話。

彼のお母さんてどんな人だったんだろうと想像してみる。

肌の白さとイエローブラウンの髪、アッシュグレーの瞳を携えた整った顔立ちをそのままに。あたしの中で性別を違えてみたら、童話に出てくるお姫様みたいな美人像が浮かび上がった。

「ものすごく綺麗な人だったんだろうなー。あ、でもセンセってお父さん似って言ってたっけ」

漏れた言葉に、彼は苦笑いを浮かべた。

「中身はな」

「どうして後継ぎなのに継がないの？　楽して威張れそうなのに」

そろそろデザートが食べたいかな、とテーブルの上を見渡してみる。

席を立った先生がキッチンに入って冷蔵庫から何かを取り出した。

「今日そこまでだ、続きはまた後日。デザート、ケーキとソルベどっちがいいんだ」

「え、どっちにしよう？　どっちもってダメ？　センセ食べないでしょ？」

「言うと思った」

空いたお皿を手際よく片付けて、蓋のついた皿が二つ並ぶ。左側

に置かれた方を開けてみる。
「あれ？　ケーキとソルベが一緒になってるよ？」
どっち選んでも同じなんじゃん、と向かい側の彼を軽く睨みつけてもう一方の蓋もまた取ってみる。
するとそこにはラッピングされた小さな箱がちょこんと乗せられていた。
「あ……」
話が長引くと困る訳はこれかと、納得してほくそ笑んだ。センセも案外キザったらしいことするんだなって。
「開けても、いい？」
「ああ」
包装を開いてみれば中には可愛らしいハートのピンクの石が施された指輪が入っていた。
「わ、可愛い。センセが選んでくれたんだよね。似合わないのに……恥ずかしくなかった？」
「うるせえ。雰囲気ぶち壊しのひと言余計だ」
「あははは。すごく嬉しいよ。ありがと！」
「教師の給料で買えるのはその程度がせいぜいで、俺としては不満だがな」
「センセの価値観高すぎなの！　あたしなんてその百分の一くらいで十分喜べるんだから。それにここには、あたしが日々扱かれてる涙の分も入ってるワケでしょ？」
キャンドルの淡い光を反射してキラキラと輝く小さな指輪。
労働なんて億劫でしかない彼が注ぎ込んだ時間の詰まったプレゼント。
これ以上嬉しいものなんてないよ。
「指輪なんて貰うの初めて。なんか、オトナな感じだね。へへ」
照れ臭くて緩みっ放しの顔がなかなか元に戻らない。
「貸してみろ」
再び席を立ち上がったセンセが傍に寄って来て、指輪とあたしの

右手を手に取った。ひんやりとした彼の手の感触と、指輪を嵌めるって行為にどきどきする。
「ぴ……ぴったりだね、いつの間にサイズなんて計ってたの？　気付かなかったけど」
　見上げると、椅子の背とテーブルにそれぞれ手をついたセンセが覆い被さるようにキスをしてくる。
「いつも触れてれば分かる」
「そ、そーいうもの？」
　何気なく手を繋いでいた間に指の太さを意識されてたのかと思ったら、急に恥ずかしくなった。一般比1．2倍は確実のか細さからは縁遠い指には、地黒の肌に次いでコンプレックスがある。
「さて。感謝の気持ちは是非とも行為で返してもらおうか」
「え？」
　無理矢理引かれた椅子に座ったままのあたしを、軽々と横抱きにして抱え上げた。
「お姫様抱っこがご所望だったな」
「はっ？　あの、でっ、デザートまだ食べてないんだけど」
「こっちはデザートどころか、ご馳走前にお預け状態でな。そろそろガッツリ食わせろ」
「嘘つきっ！　お預けって、ガッツリって、お風呂でしたじゃんっ」
「あんなのは食前酒みたいなもんだ」
　嘘だぁぁぁぁぁっ。
「や、先にデザート！」
「無理」
「無理とか言わないでよ、すぐじゃん、すぐっ」
　したくないって言ってるワケじゃないのを察して欲しいのに、エンジンが掛かった彼の耳には全く届いてくれないようだ。
「心配するな。こっちもすぐに、とっておきを味あわせてやるから」
「センセが言うとエロいことしか思い浮かばないんだけどっ」
「この状況でエロいこと以外が思いつくわけねぇだろ、普通」

「あぁっ開き直ってる！　なにそれぇっ」
連れ込まれた寝室には、キングサイズのふかふかベッドが待っていて。
縫い付けられて蕩かすようなキスをされたら抵抗も出来なくて。
繰り返しやって来る甘くて痺れる気持ちいい波にさんざん溺れた。

早朝に気だるさが残る体で目が覚めた時、静かに寝息を立てながら腕枕をする彼が隣。
指に光る指輪を確認すると、裸の胸に擦り寄った。

――センセ、大好き。ありがとう。

トクトクと静かにリズムを刻む鼓動に耳を澄ませながら、瞼をそっと被せた。

<1>

夏休みまで一ヶ月を切った。
剣道部で出場予定の地区大会翌日から期末考査が始まる。仕組まれたような試験日程を訊いた時には腹が立ったものだけど、両立させると息巻いた以上とにかくやるしかない。
部活終わりにファストフードへ立ち寄って、軽く（？）空腹を満たしつつ試験勉強をする日々が続いている。
「ストラップ、諏訪先生に何も言われなかった？」
専任の教育係・カイが不意にそんな話題を持ち出して来た。
あたしの携帯につけられた小さなオレンジ色の石が綺麗なストラップは、カイからの誕生日プレゼント。
「あ、うんだいじょぶ……」
――というのは実はウソ。センセは目敏く気付いてた。

『新顔だな』
携帯を弄るあたしの手元に向けられたセンセの視線が捉えていたのがそのストラップだった。
紗枝からのプレゼントなんだ、とその場しのぎの嘘をついたあたしにそれ以上の追及はやって来なかったから心底ホッとした。
『親友に贈るプレゼントにしちゃ奮発したもんだな、結城も』
ひとりごとみたいに呟いたセンセの言葉が気になって、後に紗枝に確認してみたところ。
『あぁそれね。スワロフスキーの限定ストラップだから、二万近くするんじゃないかしら。諏訪はそんな高価な物を私が梨緒に贈る訳ないって気付いてて、ワザと言ったのよ』
クリスタルで有名なそのブランドはあたしだって知ってた。
限定、と名のつくものに希少価値がどれだけあるのかってことも。
そんなものを「こんな物でごめん」と小さな紙袋に入れて手渡し

てきたカイの、さり気なさに乗せた気持ちの大きさだったりだとか。
全てお見通しの上でスルーしてくれたセンセの気使いだったりとか。

後になって知らされたたくさんのことにため息が漏れたのだった。

「ホントありがとね。みんなに可愛いって言われるんだよ」
「そっか、気に入ってもらえてよかった」
大きな体に似つかわしくない子供みたいな無邪気な笑顔を見せてカイが喜んでくれるから、寄せてくれた気持ちの部分は黙って受け取ることにしようと思う。
「試験勉強中のデート封印、梨緒から切り出したんだって？」
「……うん」
ノートを書き写していた手を止めた。
「校内でもふたりきりにならないようにお互い意識して健気だって、結城が褒めてたよ」
「だって。おバカなあたしの彼氏が担任のセンセなんて、カンニング疑惑確定だもん。見えない所でのこと言われるのは悔しいけど、仕方ないって諦めてるからさ。気持ちの上で堂々としていたいっていうか」
ガッコの中でも、外でも。剣道部の指導以外、試験が終わるまではセンセとふたりきりにならない。
気休めにしかならない小さな決意を抱いてから一週間が経過した。
「それ、諏訪先生に言ってあげたら喜ぶんじゃない」
「……恥ずかしいから絶対ヤダ」
カッと熱くなる顔を隠すように、再びノートに向き直ってペンを走らせる。
喜ばせたら、そのまま体に返ってくるもん。
センセには単純に勉強に集中したいって理由で決意を伝えた。なにか言いたそうにも見えたけど、「分かった」ってそれきり。

再び集中して一時間。気付けば店の外が薄っすら夜色に染まりかけていた。

向かい側で時々あたしの質問に答えてくれていたカイの手元に、一枚の紙。

「それ何？」

「ん？　次の大会のオーダーをね、どう割り振るか考えてた。女子はこれで問題ないと思うんだけど、部長の意見聞かせて」

すっと目の前に差し出されたＡ４サイズの紙に、学年ごとに団体・個人と仕切られたメモ書き。

女子の部分について異論はなかった。

「男子、なにか迷ってるの」

一年男子の団体戦メンバーがひとり分空白になって、丸印がつけられていた。

「高津、どっちで出そうかと思って」

「え。迷わず個人戦じゃない？　団体戦ってガラじゃないよ」

「だけど中学では副将を務めてたって言うだろ？　前に梨緒が言ってた通り練習“だけ”は真面目に取り組む奴だし、実力もあるから。剣道の場合団体っていっても中身は個人戦だしね、高津が後半に控えることで他の四人に相乗効果が出るかもって期待も捨てきれなくてさ」

つまり、他のメンバーがプレッシャーに気負わないで安心して思い切った試合が出来るんじゃないかってことか。言われてみると、それも一理あるかな。

「じゃ団体で出してみたら？　チームワークがどうとかは別として、柱になる素質があるのか見極めるのにはいいかもしれないよ？」

「ん、そうしてみよう」

団体戦の欄に「高津」の文字を書き込んだ用紙をカイがしまい込むと、ふたりで店を出た。

「進路、どうした？」

「実は……まだ。センセにもいい加減にしろって言われてるんだけど、なんかさ。とりあえず進学、なんて言えるだけの頭があればいいんだけど……」
「意外に警察官とか向いてる気がするけどな。梨緒正義感強いし、剣道だって続けられるし」
「……警察官……」
嫌いじゃないかも。
進学かフリーターかくらいしか候補になかったあたしには目から鱗だった。
「試験は避けられないけど、高卒で受験出来るよ。あ、でも梨緒の場合身体制限がどうかな」
と言ってカイが携帯を操作し始める。
「あぁあった。女子の場合は身長１５５センチ以上だって」
「うわ、ギリギリ。でも警察官てちょっといいかな、考えてみる。カイはなんでそんな詳しいの？」
「オレもちょっと考えてたから」
「そうなんだ」
（センセに相談したら、なんて言うかな）
メールならいいかなと、真っ先に思い浮かんだ顔。電話をすれば「どうした」と聞いてくる普段の声まで思い出されてきゅっと胸が締まった。
「電話くらい、してもいいんじゃない？」
携帯を握り締めるあたしを見下ろして、察したようにカイが言ってくれる。
甘える気持ちを外から促されると、張り詰めていたものが緩みそうになる。
ダメダメ、と首を振って携帯をカバンに押し込んだ。
「テスト終わるまではしないって決めたから」
それまで、内緒にしておけばいい。
言った時に驚いたような顔をするだろう彼の顔を想像したら、自

然と頬が緩んだ。

＜2＞

――テスト終わるまではしないって決めたから。

なんて気丈なことをカイに言ってはみたものの。

さすがに週末になると、持て余す時間が多くなって淋しく感じた。

「慣れってホント怖いよね」

バイトへ行くには絶好のチャンスだったワケなんだけど、センセと会うのを封印してる状況じゃちょっと……と断念。

映画を見たり買い物したり、カラオケに行ってみたり。

時間を潰す方法はいくらでもあるというのに、あたしが選んだのは手っ取り早く近所の散歩だった。

机にかじりついていられるのもせいぜい一時間が限界だっていうんだから、受験勉強なんて到底無理な体質なのだとしみじみ思い知らされる。

「カイが言ってた警察官、真剣に目指してみようかなぁ」

両親にも軽い気持ちで相談してみたら、公務員って肩書きがよっぽど強力なのか手放しで喜んで勧めた。あとはあたしの気持ちひとつなんだけど……。

踏み切れないでいるのは、最後の後押しが欲しいと思ってるからだ。

「やっぱり相談するだけなら……」

電話くらいいいんじゃない、と言ったカイの言葉があたしの決意を揺るがせる。

ポケットから取り出した携帯を開いてアドレス帳に並んだ名前をじっと眺めた。キーの上を彷徨う指があたしらしくない。

「あーもう！　なんであんなこと言っちゃったんだろ」

――気持ちの上で堂々としていたいから。

言葉は決して嘘じゃない。簡単だって思ってた。

言葉を交わさないでいるのがこんなにじれったく感じるなんて思わなかった。

悔しいけどイライラするのもウロウロするのも、痩せ我慢の結果の禁断症状。

「……会いたいな」

「そうだと思って会いに来てやったぞ。感謝しろ」

「へっ!?」

ついに空耳まで聞こえたかと周囲を見渡せば、背後に立つのは紛れもないセンセ本人だった。

「気配消さないでってば！　なんでセンセっ？　どーしてここ……」

「忍びよったつもりはない。人の車を廃人みたいな顔で素通りしたの気付いてないだろ」

「車？　ウソ……あ」

あんな真っ赤な超高級スポーツカーを見逃すはずがない、と彼の後方に視線を這わせれば存在感抜群のそれは確かに路肩に駐車されていた。

ホントに全然気付かなかったなんて、重症かも。

「なにをらしくもなく気使ってるのかは知らんが、負担になるだけの気使いなど無意味だと学べ、馬鹿が」

「別に負担とか思ってないし」

「欲求抑えて夢遊病紛いの徘徊するのが正常とでも言うつもりか」

「気晴らしで散歩してるだけだよ。我慢なんてしてないもん」

説教口調はガッコで見せるセンセそのものだった。

でも。

引き寄せて抱き締めてくれた腕の強さは、恋人のそれだった。

「電話くらいしてこい」

苛立ったように言われてつい、ワガママだらけの八つ当たりをセ

ンセにぶつけた。
「センセがしてくれればいいじゃん。掛かって来た電話ならムシしたりしないのに。あたしが自分から言ったこと引っ込められないの分かってるでしょ」
「頑なプライドをたまに尊重してやろうと思えば、その言い草。散々俺を自分勝手呼ばわりしといて、どの口が言う」
「だって！　こんな時ばっかり素直に言うことできくんだもんセンセってば！」
ああっ、自分勝手が止まらない。
「もう頼まれても聞いてやらん。心配するな」
投げやりに答える彼が、腕の中に閉じ込めたあたしの顎を捉えて持ち上げた。
「口で言わずと目でモノを言う術をお前が身につけるとは、思ってもみなかった。それに対して俺がこんなにあっさり陥落するとも、な」
困ったように眉を下げる顔なんて、初めて目にした。
知らず知らずにあたしってば最強技を身につけてたってこと？
これは……。
「……センセの弱点見つけちゃった……」
「生憎だが、得意気になるのはまだ早い」
負けず嫌いが口を塞いで、覚悟しろって。
必殺技が飛び出す度に、いつでもどこでもこうしてキスして黙らせてやるからって。
その手に出られたら、敵わない。
だってセンセのキスはどんな最強兵器も敵わない、あたしを心ごと捉えて離さないとっておきの魔法なんだから。

確かあたしは散歩の途中で、当てもなくふらふらと近所を周回するはずだったのに。

「俺も連れて行け、案内しろ」
気を利かせてやって来たのだと突然現れた彼氏は、あたしを強引に車の助手席に押し込んだ。
「案内しろって言われても……散歩って歩いてするもんでしょ？それに特に場所決めてたワケじゃないんだけど」
「なら今すぐ決めろ。付き合ってやる」
「そんなむちゃくちゃな……」
無茶な申し出に、あたしはふと思いついた行き先に彼を案内しようと決めたのだけど。
「いいけど、途中からは車で行けないよ？」
「適当に置ける場所を探せばいい」
取り敢えず道を案内するものの、数分で道はT字路に差し掛かった。
正面には細い道路が通っているのだけれど、狭い間隔で鉄の棒が二本、車の侵入を防ぐように立てられていた。
「この先、なんだけど」
「なら歩いていく」
「え？　こんな細い道路に路駐したら邪魔だから！　それにイタズラされちゃうよ？　ここら辺にはセンセが御用達にするような立派なホテルも建ってなければ、コインパーキングすらないんだよ？」
どーすんの？　と地元のあたしが言うのに動じないのが彼らしい。放つ言動もまた、彼ならではというか。
「暇な店の駐車場を、金を支払って使ってやれば済む話だ」
言いながらセンセがゆっくりと車を左に進めた。
ターゲットになったのは、個人経営のクリーニング店。
お得意さんくらいしか来ないのだろう、店主らしきおじさんはカウンター前で腕組みをしながら気持ちよさげに船を漕いでいた。
自動ドアを潜ると電子音が鳴った。虚ろな顔でこちらの顔を確かめて、新顔と分かると途端にぱっきり目を覚ました。
「はい、いらっしゃいませー」

そしてすぐに怪訝な表情になった。
だってあたし達の手には荷物が何一つなかったんだから。
「えー今日はどういったご用で……」
「少しの間、店の前の駐車スペースを借りたい」
「……は？　いえあのそれはちょっと……」
嫌そうに顔を歪める店主の前で、センセは財布から取り出した万券を2枚黙ってカウンターに置いた。
「どど、どうぞどうぞ！　一日置いてもらっても構いませんから！」
世の中金でなんでも片付く、なんてドラマじゃ聞いたことがあるけど。目の当たりにするとなんか切ない。
店の外まで出てきて見送る店主を横目に、あたしはセンセを睨みつけた。
「あーいうのって買収って言うんじゃないの？」
「馬鹿言うな。一種の間借りだ」
――なんか、違うと思う。

＜3＞

秋になればたくさんの実をつける柿の木が目印の小さな平屋。車が一台やっと通れるほどの細い道を挟んだ向かい側に、【遠間道場】はあった。年期の入った直筆看板がなかったら単なるプレハブ小屋だ。

「風情のある道場だな」

声の主の性格上、皮肉かと思われた横顔。レンズの奥に潜んだアッシュグレイの瞳が穏やかな様子だったので、そうではないと判断できた。

「あたしとカイはここで剣道教えてもらってたんだ」

ガラリと扉を開けば一畳程の小さな玄関。靴を脱ぎ散らかす度叱られた、小学生の頃を思い出して苦笑いした。

「おはようございます！」

ひょっこりと顔を覗かせると、右側に広がるフロアの中央に懐かしい顔があった。

使い込んで色褪せた紺地の道着に身を包んだ、ツルピカ師匠こと遠間先生だった。

練習時間までは時間があるんだろう、まだ誰もいないその場所で竹刀を振っていた。

「おお、梨緒かの！？　よく来たよく来た、入りなさい。三年ぶりじゃな」

「……うん。あの時は、ありがとうございました」

中学の全国大会決勝で敗退したあたしは、翌日結果を報告がてら顔を覗かせたこの道場で先生の笑顔を見るなり泣きだした。

悔しくて、もっと強くなりたくて。涙を落ち着けてから時間を忘れて稽古をつけてもらった三年前。

「もっと顔を出しなさい」

「……うん」
素直に頷いたり甘えたり。
先生の前だと、あたしはいつでも小学生の頃のように戻ってしまう。
「失礼します」
そろそろと足を踏み入れるあたしの後ろに、センセが続いた。
「おや」
明らかに、あたしとは年齢も見た目も不釣り合いな大人の彼を見て目を丸くした先生が、説明を乞うように視線を向けてくる。
「えっと、あの、こ、この人は……つきあってる……ひと、で。一応彼氏、とゆーか……えと」
うはっ、めちゃくちゃ恥ずかしいんですけどっ!?
なんかお父さんに初めて紹介する時ってこんな感じなのかな!?
っていうかお父さんでもないのになんでこんなに緊張するんだろっ!!
しどろもどろでパニくるあたしに痺れを切らしたのか、
「初めてお目に掛かります。梨緒さんとお付き合いさせてもらっている“一応彼氏”の諏訪と申します」
こんな時でも多少の嫌味を交えることを忘れない、センセ自ら自己紹介。
横目でちらりと見下ろしてくる彼から、冷ややかに非難する殺気を感じて背中が凍る。
仕方ないじゃん!　に、睨まないでよぉ!!
「ほ〜ぉそうかい。いっちょまえに男なんぞ連れて来おって。あの男勝りの梨緒がなぁ、娘らしくなったもんだ」
ホントお陰さまで“色々”女らしくなったんだよ、先生。
……と内心で訴えかけながら訪ねた理由を告げた。
「この間お母さんがここ覗いていったって聞いて、先生の顔見に来たの。腰が悪いって言ってたのは大丈夫ですか?」
「年だからのぅ、治りゃせん。だがまだまだ竹刀は振れるぞ?　ど

うだい梨緒、せっかく来たのだから手合わせして行きなさい。時間はあるのだろう？」
「はい……」
とは言ったものの。どうしよう、と窺った隣の顔が小さく頷いたのを確認した。

「お願いします！」
道場に備え付けの道着と防具を借りて竹刀を交える。
小さくなったと思った体のどこにそんな力が潜んでいるのだろうと。打ち込んだ竹刀を受け止められたその返しにあたしは感じていた。
昔からずっと不思議だった。先生は隙だらけのように見えるのに、いざ攻めようとするとどこを攻めていいのか分からなくなる。
今だと思って踏み込んだ瞬間、先生はバランスを崩してその場に膝をついた。
「先生っ！？　大丈夫！？　あたし手加減しなさ過ぎたよね？」
竹刀を放り投げて走り寄れば、
「……こら、梨緒。竹刀を粗末に……扱うんでないと言っているだろう」
昔によく言われていたセリフを耳にした。
試合に負けると竹刀に八つ当たりするのがしょっちゅうだったあの頃も、同じように叱られた。
「うん。ごめんなさい」
「梨緒に、手加減されるほど……まだまだ、腕は……鈍っちゃおらん」
同じように駆け寄ったセンセが、遠間先生の面を結び付けている紐を解くと顔色が悪かった。
「先生……死んだりしたらやだよ？」
「お前な。自分の師匠だろうが、勝手に殺すな」

「だってすごい顔色悪いんだもん」
おどおどするばかりで泣きそうになるあたしの頭を、笑みを浮かべて「大丈夫だ」と撫でるセンセの手が心強かった。
「少し休みましょう。肩に掴まって下さい」
彼が小手を外した先生の脇の下から自分の肩を入れて、体を支えるようにして立ち上がる。
フロアの端にある木製のベンチまで移動して、そこへ座らせた。
「なんの、軽い眩暈だよ。そそっかしいところは変わらんなぁ、梨緒は」
「賑やかなのは彼女の性分ですし」
「負けん気は強いし、道場一の頑固者。諏訪くんも苦労が絶えないだろうに」
「ええ、本当に。本音を吐かせるまでに相当時間を掛けましたから」
「ちょっ、な、何の話しようとしてんのっ！　気苦労絶えないのはあたしの方なんだからね！」
下手したら付き合うまでの事とか平気で語り始めちゃうんじゃないかってヒヤヒヤした。思わず声を荒げると、先生の皺枯れた笑い声が上がった。
「いい相手に巡り会えて良かったの、梨緒」
「え？　あ……うん」
本人前にいるのにまた素直に頷いちゃったけど、耳まで熱い。
黙って口元を緩めてるセンセの顔を見たら、全身が沸騰しそうなくらい恥ずかしかった。
「「ツルピカ師匠ー！！！　おはよーございまーっす！！！」」
俯きかけたあたしを救った、元気な子どもたちの声。
道場内が一気に賑やかさを増した。
「おはようございます！！」
「先生、おはようございます！！」
「おはよう」
稽古が始まる時間らしい。けど、歩くのもやっとだった先生に子

供たちの相手は厳しいんじゃないかと提案してみた。
「ねぇ先生。子供たちの稽古、あたし代わりにやってもいいかな？」
「ガキにガキが指導出来んのか」
むっ、失礼な！
「じゃあ一緒にやろうよ！」
「俺は構わんが、部外者が図々しく携わっていいものか判断を仰いでからでないと」
あっさり承諾してくれたセンセが、遠慮がちに遠間先生を振り返る。
「諏訪くんも剣道の心があるのかね？」
「ええ、多少」
「多少じゃないじゃん。なに言っちゃってんのセン……いだっ」
余計な事を言うなと、思い切り脇を抓られた。
結構な厚みでぐいっと行きましたけどっ！？
「そうかね。では教え子の言葉に甘えて、今日は楽させてもらおうか」
こうして涙目のあたしと、何故か鬼顧問の肩書きを隠したがったセンセのふたりで、臨時剣道教室を開くことになったのだった。

＜4＞

ツルピカ師匠こと、あたしに剣道の楽しさを教えてくれた遠間先生の道場に通う小学生は現在十人。

お下がりだって言う防具の装着に手間取る姿が初々しい、一年生の女の子が最年少。女子は彼女を含めて三人しかいなかった。

体調が万全でない先生の代わりに、臨時剣道教室を開校したあたしとセンセ。

小学生相手に楽勝じゃん、なんて思ったのも束の間。「遠慮なく打ち込んでみて」なんて言ってしまった相手の六年生男子の大きいこと！

身長１６０センチ超えってどーいうこと！？　小学生でしょ？発育良すぎない？？

力強さも想像以上で、侮り過ぎたあたしは危うくあっけなく吹っ飛ばされるところだった。

「う、うん、すごくいい感じ。もっと小さく振れれば技も決まりやすくなるよ」

「はい！」

だけどやっぱり小学生。素直な反応がかわいい。

生意気な後輩の指導をしている現状が重なって、子供たちは天使みたいだ。

きらきらとやる気に満ちた顔から、純粋に剣道を楽しんでいるって感じが伝わってくる。あたしもこんな顔して剣道教わっていたんだろうなって懐かしく思う。

――そんな和やかな雰囲気も、容赦ない怒号でぶち壊し。

「違う！　手と足の動きがバラバラ、踏み込みと腕は同時だと言っているだろうが！」

ぴしりと、手にした竹刀で生徒の竹刀を叩き落す。
小学生を相手に手加減なしの指導をする大人げないオトナの声が、子供に負けじとド派手にその場を占めていた。
「ごめ……なさ……僕バカで、うまく出来なくて……」
「泣きごと並べて上達するなら誰も苦労しない。嫌なら辞めろ、やる気がないなら時間の無駄だ」
「ちょっとセンセ」
半泣きの男の子をきつく睨み下ろす鬼師範を窘めようとした時だった。
「上手くなりたい」
きっぱりと言い切る声にセンセが眼差しを和らげた。
「……僕、もっと上手くなって試合に出たいんです」
「だったら注意されたところを意識しながら、人より一本でも多く打ち込み練習をしてみろ。努力は決して裏切らん。必ずお前の力になる」
頑張れ、の言葉の代わりに頭に乗せられたのはセンセの手。
顔に笑みこそ浮かべないけれど、あの手がどれだけ力を与えてくれるかあたしは知っている。

やっぱりセンセはすごい。
罵るだけじゃない、励ますだけじゃない。気持ちを引き上げる対処の仕方をちゃんと心得ている。ガッコのセンセっていう職業柄もあるんだろうけど、突き落として持ち上げる高低差はセンセならではだと思う。

「それにな。どうしようもない馬鹿でも全国に行ったお前の先輩がここにいるぞ」
人がほっこりとした気分になってたところに、なにを言う！
「え。お姉ちゃん……そうなの？」

「まーね。あたしも悔しい、負けるもんかって気持ちで練習頑張ったんだよ」
「そっか、バカでも全国大会に出られるくらい強くなれるんだ！すごいね！」
「え、あ、あれ？」
そっちなの？
男の子のやる気みなぎる嬉々とした視線に、顔が引きつる。
「僕頑張る！」
「が……頑張れー」
と、ひとまず笑顔で言っておいて隣のセンセを睨みつけた。
すると鼻で笑ってぽそりとひと言。
「二位止まりだがな」
ホンっとひと言多いんだからっっ！！！！！

懲りない鬼師範の指導はこの後もターゲットを次々変えては繰り返された。終わってみれば子供たちのセンセを見る目が心なしか怯えているようにも見えたのが、あたしには不安で仕方なかった。
「遠間先生……厳しくしすぎちゃったけど、大丈夫かな」
「なあに、逆にいい刺激になったわ。最近はわたしの目を盗んで手を抜くようになっていたからなぁ」
遠間先生は至極穏やかに笑いながら言ってくれたからいいものの。
「ほらみろ」
「“ほらみろ”じゃない！　いくらなんでもキツく言い過ぎだからね？　相手は小学生なんだからもう少し言い方優しくしようよ、高校生じゃないんだからさ」
「……大して変わらん」
「変わるってば！　今日で道場辞めるとか言ったらどーすんの！！
っていうか今の微妙な空白なに！　人の顔見てうすら笑い浮かべるって失礼過ぎない！？」
踏ん反り返って開き直るセンセに万が一の責任を問うたつもりが、

ついつい怒りの矛先が別を向いてしまう。
「小学生連中にお前が違和感なく溶け込めるんだ、同じ扱いで構わんだろ。それにあれくらいで音を上げるような根性なしが出るっていうなら、今まで指導して来られた遠間先生に敬意を払って一年分の月謝くらいは収めてやる」
なんでもお金に物言わせて解決しようとしないで！！
「違うでしょ！！　だいたいセン――」
「今日はこれで失礼します。お身体、大事になさって下さい」
あたしの口を強引に塞ぐように手を宛がったセンセが、勝手に終わらせる。
鼻までぴたりと蓋をされた耳元に「センセ言うな」と囁かれながら引き摺られ、納得しながらこくこくと頷いた。

道場から去り際に「また手伝いに来るからね」と告げると、「次もふたりで来なさい」と言った遠間先生のことが気がかりだった。
今までにも同じように体調を崩すことはあったに違いないんだ。いくら気持ちが若いからといっても体力は日々衰えていくワケだから。
この道場は、なくしたくない。剣道を楽しんでくれる子供たちがいる限り続けていて欲しい。
あたしはこの時、小さな光を見出した気がした。

＜5＞

足取り軽く、帰り道。
「鼻歌やめろ」
「いーじゃん別に！　テスト勉強の憂鬱を可愛い小学生に癒されて、あたしは気分いーんだもん！」
「お前の勝手に俺を付き合わせるな」
「じゃあ手！　さっさと離せばいーでしょ」
ぶんぶん振り回しても離れないセンセの手。
道場を出てから絡んできた指先はしっかりあたしを捉えて離さない。
「誰が離してやるか」
見下ろしてくる冷めた眼差しに言葉を詰まらせると、そのままキスで塞がれる。
……ここでキスとか、何考えてるのかホント分かんない。
「道場に入り浸るのは考査明けにしろよ。“退学になりました、ここでお世話になります”ということになりたくなかったらな」
「う……分かってるってば。勉強だってちゃんとやってるし」
「ちゃんと、だと？」
ひくりと上がった片眉プラス、うさんくさげに反芻されたら喧嘩腰になるのも当然というもので。
今までになく必死に勉強しているあたしの努力を知りもしないくせに、頭ごなしに疑ってかかる態度が気に入らない。
「本当にちゃんとやってるもん！　学校でも家でも、カイが作ってくれたノート丸暗記出来るくらいみっちり……」
あ、丸暗記は言い過ぎたかな。
なんて心の中で舌を出しながらも主張するあたしに、センセから漏れた超特大級のため息。
「なになになになに、そのバカにした態度！　そりゃあたしは筋金

入りのおバカだけど、分かってるけど、努力してる真っ最中にそんなため息つかれたら、やる気なくすし傷つくんだけど！？」

「あぁ勝手に傷つけ。俺にため息吐かせるようにせっせと実績作ってきたのはお前自身だ、この馬鹿が」

追い打ちをかけるバカ呼ばわりにぷちんと切れたあたしは、渾身の力でセンセの手を振り払うことに成功した。

いつもいつも、このパターンだ。

「もういいよ！」

あたしの頑張りなんてちっとも認めてくれないんだから。

なにさなにさ！“退学になんてさせない”なんて言っといて、結局「馬鹿」のひと言で片付けちゃうんじゃん！

「話を勝手に畳むな」

自由になったはずの手は、またあっさり捕まった。

握られて、引き寄せられて。一気にまくしたてられた。

「お前が“ちゃんと”を強調していい結果が出た試しがないんだが、どういうことかわかるか」

「えと……」

「根拠のない過信が油断を生んで、簡単にコケる。そのパターンの繰り返し」

「なーるほど」

「納得するな、俺に言わすな、自分で気付け！」

空はすっきり晴れているのに、あたしの頭上からはおっきな雷が落ちてくる。

久々怖いよぉ。

「覚えりゃ完璧と思い込んでる橘が作ったノートなんてな、あくまでお前仕様に出来た赤点回避用にすぎん。最低限お前が理解できる範囲でな！」

「だって前のテストの時は、ほとんど出来てたじゃん！」

「ずれた回答を出来たと威張るな！　お前の頭はピーマンレベルだと自覚しろ！！」

「あだっ！！」
ぴしっとおでこに飛んできたでこピン。
不意打ちはめちゃくちゃ痛い！　ツキーンて！！　なんか目の奥の方まで痛いんだけど！！
そりゃ確かに重大なケアレスミスでしたけど。ピーマンて……からっから？
「お前含めて不出来な奴らをまるっと一掃するつもりでいる今回の考査は甘くない」
首の皮一枚で繋がっているのはあたしだけじゃない、ということだ。
「何も知らずにのんびり構えてる奴らもいる中で、危機的状況を把握出来てる分だけお前はツイてる。それを最大限に活かさないでどうする」
「……うん……」
分かってるからそれなりに勉強してきたつもりなんだけどな。
「進むべき道を見つけたんだろうが」
うつむきかけた顔を咄嗟に持ち上げた。
どうして知っているんだろうと、彼を見た。表情から声を読み取った彼が答える。

「今日のお前はそういう顔をしてた」

ああ。やっぱりセンセは何でもお見通しだ。
心に薄っすら宿っただけの光すら捉えてしまう。
生活の中から剣道を切り離せないあたしが、ぼんやりとだけど見出した目指したいと思う道。
「進学は……諦めないでみる。気合い入れなおしてテスト勉強頑張るよあたし。カイのノートだけじゃ足りないっていうならテキスト丸暗記――」
「出来もしないことほざくな」

はい、ごめんなさい。
「週明けから家庭教師を派遣してやる。みっちりしごかれとけ」
「家庭教師？　しごく？　なんで運動部のノリ？」
おまけにセンセ自ら紹介してくるなんて、珍しい。
「いずれ分かる。それより梨緒」
「は、はいっ？」
突然名前で呼ばれてどきりとした。
恋人モードスイッチが入ってもなかなか呼んでもらえないから。
「道場に橘を連れて来るつもりなら学校帰りだけ、道場の練習日以外にしろよ」
「なんで？」
顔を上げた彼のレンズ越し、アッシュグレイの瞳と視線が交じり合う。
しっとりと艶っぽい雰囲気なのは見間違いではないのだと、次の言葉で思い知る。
「はしゃぐお前の顔を見るのは、俺だけでいい」
恥ずかしげもなく告げられて真っ赤になった。
独り占めしたいと暗に言われているようで、ドキドキと鼓動が高鳴りだした。やきもちを口にする彼の態度は相変わらずだけど、嬉しいに決まってる。
「カイを連れてくるのは、遠間先生に会わせたいからだよ。さっきみたいに子どもたち指導するのは、あたしだってセンセと一緒がいいって思ってるんだからね」
素直な気持ちを白状したのも照れくさければ、子供相手にむきになって指導する彼を思い出しては可愛いと、緩んでしまう顔を見られるのも恥ずかしい。
ごまかす為に、えへへ、と笑顔を付け足した。
そんなあたしを見下ろしていた彼が言う。
「昼飯は後回しな」
「え。お腹空いてもう動けないよ！　後回しってどこ行くの」

応える代わりに頬に触れる冷たい手。細められるアッシュグレイの瞳。
変わらない、キスのサインだ。
裏切らない唇がゆっくりと下りてきて優しく触れる。
「ラブホ」
「はっ！？」
「たまに可愛げをだだ漏らすとどういうことになるか、身を以て知ればいい」
「はいっ！？」
可愛げ出したらイコールそーいうことになる図式の理解が追い付かないんですけど！！
「動けないならマグロも許してやる。その代わり、俺がお前喰い散らかしている間はしっかり啼けよ」
息を呑んで完全に固まった隙に絡めてきた腕が、ぐいぐいあたしを引きずっていく。
「あぁっ、あのね、センセっ！　あたしまだ、女の子の日継続中なんだけど！」
この際理由は何でも良かった。だから諦めて、と激しく訴えるのに無情な彼は鼻にも掛けてくれない。
「心配するな。血の味は割と嫌いじゃない」
「へっ！！　変態ぃ～～～～っっ！！！」
どこまで変態趣味なのこのヒトっ！！
日差しが夏色に染まりかける空の下、閑静な住宅街に響いた「変態」の叫び声。
数分後、「継続中」が嘘だとバレてから散々な目に合ったのは言うまでもない。

ｋｉｓｓ　ａｎｄ　ｍｏｒｅ…　＜バレンタイン編＞（前書き）

プロローグから繋がった梨緒とセンセのバレンタイン特別編。
その日は二人にとって特別な記念日。

kiss and more… ＜バレンタイン編＞

「もうすぐバレンタインだね」
愛の告白イベント、バレンタインデーというものにあたしは縁がなかった。
遠い昔に、渡す相手が直前に転校してしまうという空振りの経験をして以来、渡したいと思う相手に巡り合わなかったのは幸か不幸か。
初めて出来たあたしの彼氏は、オトナで、教師で、イジワルで。
「それがどうした」
「ほ、ほらっ！　たたっ、たまにはさ、女子っぽいとこしてみよーかなーとか……思ったりして。あははははは」
なかなか一筋縄ではいかないクセモノだったり、する。

センセが昨年女子生徒から受け取ったチョコは、両手で抱えきれないくらいの大量で。部活が終わった道場でいきなり、部員達の前にぞんざいに広げ始めた時は目が点になった。
“ひとつ残らず持って帰れよ。カードの類が入ってたら捨てるな、焼却処分しろ。これについて一切の口外は勿論、万に一つでも物的証拠が出てくるようなことがあれば、たっぷり尋問してやるからな”
条件付きで無料配布しちゃうとか、あり得ないことを平気でする。
それなのにさ。今年もあちこちで、彼に手渡す予定を打ち合わせている声を耳にしてしまったあたしの心は物凄くフクザツ。
何だかんだとモテるんだ、このヒトは。
「どうせセンセは他からもいっぱい貰うんだろうけど、やっぱり一応彼女、だしさ」
卑屈なキモチは嫌味となって「彼女」って立場を建前にする。
「今年って土曜日でしょ。その日はセンセ仕事ある？　渡しに来て

も平気？」
　彼女の立場は期待となって、学校以外でも手渡せるって「特別感」を口にしてみる。
「……」
　さり気なく訊ねたつもりに、真顔の沈黙が返されること数秒。なんだかちょっと、空気が重たいような感じがしないでも――ない。
　気に障ること言ったかな？　バッチリ目が合ってるから、声は届いてるはずなんだけどな？
「甘い物は好きじゃない。菓子メーカーの思惑に便乗してやる義理もない」
　だから、バレンタインなどに興味なんてさらさらないのだと。
　手元の本に視線を落したオトコは、あっさり切って捨てたのだ。

（今度こそ、彼女らしいことできるかもって思ってたのに）
　あたしはでっかく息を吐き出した。
「バレンタインは絶対ぎゃふんと言わせてやろうって、気合い入れてたのにさ。甘い物が嫌いだとか言って拒否られちゃったら、あたしはどうすりゃいーの？？」
　休み明け、親友の紗枝へノロケ話という名の経過報告をし終えて机に伏せた。
　意気込み十分で乗り込んで、結果空回りしたテンションの矛先をどこへ向けたらいいのか分からない。
「ぎゃふんって……気合いの入れ方間違ってるような気がするけど、まぁいいわ。梨緒もすっかり恋する乙女になって、お姉さんは嬉しいわよ」
　よしよしと。頭を撫でる紗枝の子供扱いは相変わらず。
「だけどさぁ、もーどーしていーか分かんない。今回逃したらしばらくイベントないしさぁ……」
「こだわるわねぇーそこ」
「だってさぁ。普段の流れでさりげなく彼女っぽいこと出来るほど

容量良くないし、余裕もないんだよ？　イベント頼みしかないあたしのキモチ、紗枝なら分かるでしょっ？」

恋人同士になって初めて訪れたイベントはクリスマス。いきなりの一大イベントにどきどきと胸を膨らませていたのに、当日の朝になってお父さんが珍しく家族で食事に出掛けようなんて言い出して、ボツ。それから一週間後の年越しは、三日ほど前から吐き気を伴うカゼに見舞われ寝込むハメになるしさ。

「まだ一度も恋人らしいこと、してないんだよ……」

ようやく打ち破られた乙女モードの扉は全開なのに、満たされないこの複雑な状況。だからこのバレンタインこそは、って。

「そうねぇ。梨緒の気持ちも分かるけど、諏訪の気持ちも痛いほど分かるわよ？」

「紗枝もバレンタイン嫌いなの？」

「ばっか、違うわよ」

指先で鼻の頭を軽く弾かれる。

「イベント、イベントって言う割に大事なこと見落としてる梨緒はやっぱりおバカで、諏訪も苦労するわねって話よ」

「なんでそこでセンセの苦労話？　あたしが見落としてるって、何を？　なにか知ってるなら隠してないで教えてよぉ！」

席を立って離れた紗枝に縋ってみるも、振り切られ。しばらく心当たりを探っては見たけれどヒットせず。

「もーなんなのー！？　気になるじゃん！！」

叫んだあたしの抱えた疑問は、結局バレンタインデー前日まで引っ張られることになる。

バレンタインデーが土曜日にあたる今年は、【決戦の金曜日】となった。

朝からそわそわと落ち着かないのは女子だけじゃない、貰う側の男子もまたいつになくキョロキョロと視線が忙しかった。

センセは一体どうしたんだろ、と気にかけていたところに見つけ

た彼の姿。今日一日の収穫なのか、手にした紙袋に溢れんばかりのチョコが顔を覗かせている。

彼女の申し出を事前に断っておいてそれってどうなの！？

貰いました、って堂々アピールすることないと思うんだけどっ？

どーせあたしのことだから気にしないだろうとか、余裕ぶっこいちゃってるのかもしれないけどさっ！！

ぷちっと、あたしの小さな小さなプライドが音を立てて切れた。

「少しは隠すとかすればいいじゃんっ！　センセのバカっ！！」

正面から近付くと思い切り足を踏みつけて逃げた。

塞ぎこむ格好の場所が最終的に【諏訪の間】しかないっていうのが、なんか虚しいけど。何だかんだと言ってもこれはヤキモチだから。やっぱりどこかでセンセを感じていたいというか、淋しいと言うか。

「……バカ」

センセの仕事用デスクの裏に置かれたハンガーに見つけたコート。ぎゅっと握って引き寄せて、額を寄せた。高そうな香水の、キツすぎない匂いがする。

「あたしのだけ、受け取って欲しかったのにさ」

悔しいのに、悲しいのに。涙がちっとも出て来ないあたしはどこまでも可愛げのない女子だと思う。

「そういう台詞は本人に言え」

「センセっ、な、何しに来たのっ！？」

ラックの陰から姿を現した彼の姿に驚いて、思わずコートで身を隠した。

センセの方はデスクの前に配したソファに腰をおろして、横目であたしを窺う。

「そのまま返してやる、ここは俺の部屋だ。さっきのは何の仕業だ、弁解を聞いてやるから言ってみろ」

「チョコレート、あたしからは受け取らないようなこと言ったのにあんなにたくさん貰ってるから、ムカついただけ」
「“だけ”？　にしては相当勢いづいてたがな」
「だってせっかく！」
隠していたコートから身を乗り出してあたしは叫んだ。
「せっかく、恋人らしいイベントがやっと出来るって思ってたのにセンセ嫌がるし。嫌がったクセにあんなだし。ムカつくの当然だって思わないっ！？」
「時任。お前イベントにこだわる割に、なにか見落してることに気付いてないよな」
センセが、紗枝と同じような事を言うから。近寄って、座る彼を見下ろして問い質した。
「それ、紗枝にも言われた。見落してることってなに？　あたし分かんないんだけど」
「二月十四日、何の日だ」
「え？　だからバレンタイン……」
今さらなにを、と呆れ調子で返したあたしを見上げる視線が鋭くなった。

「違う。バースデーだ、俺の」

「え」
バースデーって……誕生日、だよね。誕生日、センセの誕生日。
途端にサーっと全身から血が引いて行くのを感じた。
「えええ～～～っ！！！！」
テーブルに置かれた雑誌が容赦なくあたしの顔面をヒットする。
「うるせえ！」
「あだっ！　センセ明日、た、たたっ、誕生日だったんだっ！？
……だからムッツリしてたんだね……それは……なるほど」
確かにそれは完全に見落してましたけど。気にもしたことありま

せんでしたけど。
なんで、まさかのバレンタイン。彼女としての落ち度にしては、衝撃的過ぎやしませんか。
「海より深く反省しやがれ、この馬鹿が」
「はい……ごめんなさい……」
しゅるしゅると萎んでいく気力同様に、脱力感からそろそろとその場に腰を下ろした。
「ホントにごめん、センセ。一応彼女とか言っときながら彼氏の誕生日も気にかけないなんて、最悪だよね」
ソファの肘置きに両手を掛けて、センセを見上げる。
「そうだな、最悪だ」
うっ。
項垂れそうになる顔を、顎に指を掛けたセンセに持ち上げられた。
「挽回のチャンスを与えてやる。明日はどうしてくれる」
「……えと、誕生日お祝いする。今からプレゼントは用意出来ないから、ケーキ焼くとか。あ、でも甘くない方がいいんだよね……」
どうしようかと、困った顔でセンセを見つめる。
ぺたりと床に座り込んだあたしに、メガネを外したセンセの顔がぐっと距離を詰めてきた。
現れた左目の下の泣きボクロが色っぽい。アッシュグレイの瞳があたしだけを映して、ゆっくりと揺れた。

「お前を寄越せ」

ずい分と甘い声でもの凄いことを言われてる気がするのは……空耳じゃ……ない、よね？
「よ、寄越せって……それって、つまり……」
「バースデーには欲しい物を受け取る権利がある。明日、宿泊許可を貰って家に来い。交渉が難航するなら俺が直接話してやる」
「あ、あの、えと、センセ？　ちょ、ちょっと待っ……」

「抱くから。お前」
きっぱりと放ったひと言に、ぎゅっと全身が締めつけられる。
はぐらかそうにも、拒絶しようにも無理だった。
からかいの色なんてどこにもない、真剣な眼差しを初めて見てしまったから。センセの本気を、感じてしまったから。
「……うん」
散々待たせてきたし、これはチャンスなのかもしれない。
覚悟を決めて掠れる声で小さく頷くと、唇を塞がれた。
「逃げるなよ。こっちも遠慮なくいくからな」
抱え上げられてセンセの膝の上に座らせられて、またキスをする。
ドキドキと走り出した鼓動は緊張の音。首筋に這わされた舌、背中に回ったセンセの手がブラのホックを外してブラウスの中へ入り込んでくる。
「っん」
既に反応していたあたしのカラダのあちこちを、柔らかくイヤらしく探る指。乱れる息に声が混じる。
「やっ」
「外に聞こえる」
言ったセンセにキスで封じ込められた。
ついに指が一番感じやすい場所へ出入りし始めると、体を捩って恥じらった。塞がれたままの口元からは呻き声みたいなあたしの声が響いてる。解放するどころか、ますます深く指を埋めて内壁を擦りあげられた。
「んんっ」
大きく体が飛び跳ねる。
(ダメ、ホントにもう、ダメだって)
限界だからと訴えるようにセンセのシャツの腕に縋ると、唇が離れていくのと一緒にあっさりと引き抜かれた感触に呆然とした。
「今日はここまで。自分でするなよ、楽しみが減る」
湿った指先をぺろりと舐める赤い舌。にやり引き上げられた口元。

ゆらゆら揺れる愉快そうな瞳。さっき見た真剣さなんて微塵もない、普段と変わらないイジワル顔に戻ってた。

「――で、どうだった？　貫通式を迎えた感想は」

時は一気に飛び越えて二月十六日。

センセの家で誕生日を祝って別な記念日にまでなってしまった週末の話に、紗枝は満足そうに微笑んでいる。

「お陰さまで大盛り上がりだよ、紗枝のバカぁっ！！」

「あらやだ大胆発言ね」

「チョコの一件、全部センセに訊いたんだからねっ」

紙袋に入ったチョコは全部、紗枝に売り渡したのだと言う。チョコを手渡しに現れる生徒には、あらかじめ諏訪の間に用意しておいた紙袋に名前を書いて入れるよう言っただけで、彼は一切受け取っていないとか。

それらのチョコは男子生徒に売り裁かれるんだって。差出人によっては高値がつくだろうな、なんて笑ってたけど！！

「去年は剣道部員に無料配布ですって？　それを聞いてもったいないと思ったの。好きな女子からのチョコが手に入るなんて、男子にしてみたらラッキーだと思わない？」

「だったらボランティアでやればいいでしょぉっ。お金取る必要ないじゃん！！」

「諏訪も私も慈善事業に興味はないの、知ってるでしょ？」

だからこの話はもうおしまい。――そう言って紗枝があたしの頬を引っ張った。

崩れる表情を可笑しく笑って話題を転換する。

「けど。梨緒のママもやるわよね。“絶対帰ってきちゃダメよ”なんて、生娘差し出すんだもの」

「……だって、お母さんセンセのこと大好きなんだもん。“まだなの、まだなの？”って紗枝みたいにずっとしつこく聞いてたんだよ

？　バレンタインが誕生日で、泊まりたいんだけどって話したら途端にものすごい盛り上がっちゃって、聞いてるこっちが恥ずかしかった」

「良かったじゃないの、これで梨緒もオトナの女の仲間入りね」

うふふふ、なんて意味深に口元に笑みを浮かべた。

簡単に紗枝は言ってくれるけどもう、とにかく、大変だったんだから！！

「ずっといっぱいいっぱいだったし……すごく痛かったんだよ！？　ホントにみんなあんな痛いの我慢してるの？　あたしセンセに当分ムリって言っちゃったよ」

本気で身体が裂けるかと思った瞬間は、絶対二度とするもんか、って。

そう、心に誓ったハズなのに。

『こんなあっさり持ってかれそうになるなんてな……』

下半身が完全に繋がった状態で表情を歪めながら、センセが嬉しそうで。時々苦しげに息を乱す色っぽい姿を思い出すと――また見たいかも、とか思ったりして。

気遣うようにゆっくり、じっくりしてくれたのも最初だけだった。

二度目からは徐々に本領を発揮して、奥へ奥へと打ち付けてくる強さは明らかに増していったし、隅々まで掻き回されるような刺激に何度意識を飛ばしたことか。

……っていうか、初めてだっていうのに一晩であんな何度もされるのってどうなの？

「ホント、ムリ」

しみじみと吐き出したため息の様子に、紗枝が苦笑する。

「ま、しばらくは無茶されても文句言えないわね。彼氏の誕生日を気にかけもしなかったのと、散々焦らしたバツだと思って耐えなさい？　一晩中なんて、愛されてる証拠じゃないの。贅沢ねぇ」

肌を重ね合わせながら、熱い吐息混じりに何度も何度も名前を呼ばれた。
好きだって囁いた声が、今もまだ空耳で聞こえるくらい残ってる。
洋服もメガネも身につけない、ありのままの彼を見上げながらとても身近に感じてた。

『……伊織』

初めて呼んだ下の名前は、嬉しそうにキスをしてくる彼の唇に封じ込まれて。
『頭に“気持ちいい”をつけて、もう一回呼んでみろ』
『ばっ、ばか……ぁっ』
最中だってSっ気全開でさんざん辱められて、結局その後に言わされることになったけど。

「思い出し笑いしちゃうくらい、良かったのねぇ」
「わわっ、笑ってなんかないってば！」
紗枝に言われて慌てて両手で顔を覆った。ぺたぺたと、頬の緩みを確認する。
「呆れてただけだって」
キス魔でエロくてどうしようもないくらい、Sな彼。
強引なキスをされたのが始まりで、繰り返されるキスや甘い言葉に振り回され続けた。
嘘をつかない真っ直ぐな想いが嬉しくて、惹かれた。
甘い言葉も触れる指も、撫でるような眼差しにもどうしようもなく虜にさせられる。常に欲しいと、もっと欲しいと望み始めて。
離れられないんじゃないかって思ってる。

キスよりもっと、って感じ始めるのも時間の問題、なのかな。

＜1＞

“オレセンパイのこと泣かすって決めたから”

あんなことを言っておきながら高津くんの小悪魔ぶりが鳴りを潜めているのは、一週間後に迫った地区大会の練習に集中しているせいじゃないかと思ってる。

全体練習の様子を窺いつつ、一際機敏な動きを見せる姿に目を遣った。

悪態ついても剣道に対して向き合う姿は純粋で、今一つ憎み切れない微妙なキャラなのだということがこの頃判明した。

「しっかし、上手いなー」

気になる点を注意すればすぐに修正できるし、アドバイスをすればあっという間に自分のものにしてしまう。

変則的な動きが特徴の高津くんが剣道を始めたのは中学の部活動からだっていうから、相当筋がいい。

先日のM高との練習試合で三年レギュラーに勝ったのが自信になったのか、あれから更に腕を上げてる気がする。

あたし負けちゃう？　やばいやばい、それだけは絶対阻止しなきゃだよ！

「左右のふり幅が尋常じゃないな、あいつはサルか？」

床を飛ぶように移動する高津くんの足さばきに注目したK大剣道部顧問・佐々木先生が、あごひげを撫でながら感心したように言った。

期末考査一週間前は学園全体が部活停止期間。テスト前日に大会を控えたあたしたち剣道部員は、大会の会場にも近く練習場所として最適なK大剣道場でひっそりと活動中だった。

当然ながら顧問の小堺先生には内緒で。

「野ザルっていうんですかねー」
「時任も似たようなもんだったのになぁ。いっちょまえに色気出すようになっちまって、卑猥なもんだな」
「……あのー、佐々木先生？」
あたし、サル扱いだったんですか？　っていうか今そーいう話してるんじゃないんですけど？
「あぁ。お前責めてるんじゃないぞ、諏訪の話だ」
しかし思ったより時間かかったよなあ、と。
まだまだプライベートな話を咲かせて盛り上がる三十路前のクマ男。
センセと友人だっていうその人は、付き合う前のあたしとセンセの微妙な関係を知っていた。

『好きだと一言言ってやれよ？』

毎年恒例の夏合宿で、あたしにそんな助言すらしたものだ。
「けどここで引き受けてもらえて本当に助かりました。練習諦めてたところだったから」
「理事長代理って奴に目の敵にされてるってな。大体の話は聞いてる、根性の腐った野郎だな。オレは好かん。とことん協力してやるから、困ることがあれば遠慮なく言って来い」
「ありがとうございます。心強いです！」

K大剣道部とスペースを二分して一時間の打ち込み練習。その後合同試合形式で一時間。
センセにも引けを取らない“鬼軍曹”佐々木先生の指導の下で練習三日目。根を上げ始めたのは夏合宿未経験の新入生たちだった。
「だー！！！！　鬼だっ、悪魔だっ、ハンパねーっ！！」
「無理……これで折り返しとか絶対無理だよぉ！」
「つか高津化け物じゃねぇ？　なんであれだけ扱かれてあんな涼し

い顔してるワケ」
「ひょっとして高津くんてドM？？」
――そう。生意気風を吹かしまくってる高津くんだけは例外で、息をあげるくらいの運動量をこなしても平然としている。
「高津！　お前そんだけ余力あるなら河本相手に三本やっとけ！」
「……オレはいいですけど。河本先輩やっつけたら、立場なくなるけど構わないんですよね」
たぁーかぁーつぅー！
佐々木先生に挑発的な返事を返す高津くんにひくりと頬が引きつった。
聞いてる方が肝を冷やしてしまうような過剰な自信は一体どっから来るのやら。カイにだってまだ勝てたことがないのによく言った。
相手の河本さんは部長で四回生。一方的に決着がつくだろうとその場にいた全員が予想した雰囲気の中、三回行った三本勝負のラストにまさかの一本を奪い取ったから驚いた。
「次は勝ちますよ」
「ああ望むところだ。次は一本も取らせないからな」
試合後に負け惜しみを忘れなかった高津くんに河本さんも苦笑い。
「なんか少し前に似たようなセリフを耳にした気がするんだけど」
様子を見ていたカイが笑いながらあたしに言った。
「え？　あたしっ？？」
「まぁ高津に限らず、梨緒が見せる負けず嫌いな部分はこの頃剣道部員みんなに伝染しつつあるよね。いい意味でさ。行動で人の心を刺激するってすごいことだよ、先輩たちが梨緒を部長に据えた理由がよく分かる」
褒められっぱなしなんて慣れてないから、カイの言葉に全身がむず痒くなるような恥ずかしさがこみ上げる。
「カイ、言いすぎ」
「照れてるの？　梨緒のそういうとこ可愛いよね」
天然癒し系いい男に笑顔満開で「可愛い」なんて言われてしまう

ような、爽やかパターンに免疫のないあたしの顔面は勢いよく火を噴いた。

道場を出ると蒸し暑さすら感じるような夜だった。

あと数日。大会翌日には期末考査が控えてる。退学の掛かった正念場だ。

「がんばるんだから！」

夜空を見上げて息を吐いた。

「よく吠えるよね」

「……高津くん」

出会った時もそうだった。無茶をするセンセに対して普段は言えないような心の叫びを声にしてたところに、彼が現れた。

「センパイて言葉責めには慣れてるはずじゃないの。相手に合わせて純情ぶるのは作戦なワケ？」

言葉責めだの作戦だのと意味の分からないことを振られて、首を傾げた。

オレンジ色の髪を揺らした高津くんがにやりと笑う。

「“梨緒のそういうとこ可愛いよね”」

「なななななっ！！！！！」

口調を真似たセリフに再び顔が熱を持つ。

やめてやめて！　思い出しちゃうからやめてっ！！

「橘部長って無意識気取ってアレ、実はわざとなんじゃない。そーやってあんたがいちいち反応するから」

「ううっ、うっさい！」

頬を押さえた両手が熱を感じてる。

肩を揺らした高津くんに覗き込まれて反射的に顔を逸らした。

「それやめなよ、目障り」

脅すような声にびくりと体が震えた。
「純情ぶっても中身は卑猥で汚くて、男と変わらないクセにか弱く気取ってんのが気に入らないんだよ女なんて」
吐き捨てるように言われた言葉が、癪に障った。
あたしを特定したわけじゃないんだろうけど、大きく括られた枠の中に放り込まれたのは確信した。
「気取るのがそんなに悪いこと？」
それに対しては物申すよ、あたし！
伏せがちだった顔も持ち直して背筋がしゃんと伸びる。
「だいたいね、一方的に理想を押し付けてくるのは男の方でしょ！女の子は“優しくて、品があって、可愛くて、守ってあげたくなるような子がいい”とか言うから！　一生懸命気取るんじゃない」
お粗末だの女じゃないだの。
散々言われ続けてきたあたしには、「女子たるもの云々……」は身に染みるどころか刷り込まれてきた言葉だ。
「好かれたくて、理想に近づこうって努力すると自然にそうなるの！　卑猥だろうが汚かろうが、そんな中身もひっくるめて好きになるもんでしょ！？　そんなことも分かんない君に女子にモテる資格なんてない！！」
過去に振ってきただろう女の子たちに土下座でもすればいいっ！！
卑猥の塊みたいな人だって、胸が苦しくなるくらい好きになれたあたしを崇めればいい！！
「何があったか知らないけど、高津くんが言ってることは情けない逆恨みにしか聞こえない」
そーだ。どーだ。あたしだってこれくらい――。
ドヤ顔で突き出した顎が、高津くんの手にがっつり鷲づかみにされる。込められた力に殺気すら感じて息を呑んだ。
「あんた、ホントむかつく」

近づいてきた顔にはキスをされるより、顎の骨を砕かれるんじゃないかという危機感の方が大きくて。怖さも痛みも声に出来ずにいたところに

「何やってんだ」

救いの神は下りてきたのだった。

＜2＞

鳴り響いた腹の虫の音に、げらげら笑いっ放しの男の人が目の前。
夕飯時を過ぎた時間のファミレスは、恥ずかしい乙女心を隠せるほどの賑やかさには欠けていた。
「……どんだけデカい虫飼ってんだよ、お前は」
それだけをやっと言って再び笑い転げる。
怒鳴りつけてげんこつひとつ落としたいところだけど、相手が相手だけに「仕方ない」と諦めるしかなかった。
「佐々木先生の練習容赦ないんだもん」
「あいつは根っからの体育会系だから。諦めて扱かれとくことだな」
「センセと同じこと言うんだね佐伯さん」
K大で練習することを提案して手配してくれたのはセンセだ。
部活動が停止になる前日の夜に佐伯さんを手引きして、道場から部員全員の防具と竹刀をごっそり運びだしたっていう。泥棒みたいな真似事も「あいつは見つかるようなヘマはしない」って妙な信頼関係の下に成り立っていたようだ。
「なんかさー、お互いの悪口散々言いながらも親友みたいな関係だったりするよね」
「冗談。諏訪の野郎、しょっちゅう女絡みの修羅場持ち込んできやがって。佐々木とオレがどんだけとばっちり食ってきたか。金が絡まなかったら、あいつの頼みなんて聞く耳持つ気もないね」
回想するのも忌々しそうに眉を寄せて、加えた煙草に火をつける。
バイト先の先輩でセンセとは高校時代からの「知り合い」の佐伯さん。友人、と絶対言わないのは発言通り複雑な過去が原因しているのは間違いないと思う。
「さっさと食っちまおうぜ。また遅くなると苦情がでるからな――お前のセンセから」

目の前に並んだ食事をあっという間に平らげたら、そこからは「お勉強タイム」だ。

――そう。センセが用意した家庭教師は、佐伯さんだった。

本業の“何でも屋”への依頼だったワケなんだけど、大学時代に家庭教師のバイト経験があるというだけに教え方も丁寧で分かりやすい。

自宅近くのファミレスで毎晩のように勉強を見てもらっている。

こうして夕飯がつくのは時々だ。

佐伯さんについて勉強するようになって、センセが言っていた通りカイの対策ノートがいかに優しく作られていたのかが分かった。

「明日から残りは予想問題ひたすら反復。今日はこれで終わりな」

「ありがとうございましたぁー」

頭が疲れる、という感じを知ったのもここ最近。

ほれ、と目の前に差し出されたデザートメニューに一も二もなく飛びついた。

「頼んでいいのっ!?」

「金払いのいい依頼人から三日に一度はよしと言われてるから、好きなもん頼んどけよ」

「わーいやったー!!!!」

万歳して喜ぶあたしを見て、佐伯さんは再びけらけらと笑い出した。

「あいつもこれに癒されてんのかね」

ぽそり呟く声は軽快に音を立てた呼び出しボタンの音に消えてよく聞こえなかった。

帰宅して着替えをしているところに、鳴り響く携帯の着信音。

『遅い』

出るなり、それだ。

「ごめんなさい！　……ってあれ？　なんでセンセ……」

帰宅のタイミングが分かったんだろうと疑問を問いかける前に、声が返ってくる。
『練習の方はどうだ』
「あ、うん。一年生たちはバテ気味だけど全体的には調子上がってるよ」
『ならいい。お前、高津に噛みついたそうだな』
数秒の沈黙。
佐伯さん報告早っ……だけど仕事として引き受けてたら、当然なのかな。
「だってさ、自分勝手で女子を馬鹿にしたようなこと言うから頭に来たんだもん！　おかげでセンセが無駄に敵の多い理由もよ～～～～っく分かったよ」
『俺はそんなものを作った覚えはない』
「知らないだけだから。いつか刺されるよ、センセ」
高津くんみたいに逆恨みした男の人とかに。
『万が一そうなった時には、寂しくないようお前も道連れにしてやるから安心しろ』
「いいっ！　いらない！」
不意に浮かんだ映像は、刃物が突き刺さったままのセンセがやって来てあたしを刺し殺そうとする姿だった。
妙にリアルで背中が寒くなる。だって、やりそうじゃんこの人なら！
『卑猥で汚い男に惚れた女の末路に相応しいと思うがな』
「な……」
なぜそれを。
会話の詳細まで報告しなくていいのにっ。佐伯さんのバカっ。
愉快そうにくつくつと喉を鳴らす音が電話越しに聞こえてきて、ますます恥ずかしい。
「それよりね！　高津くんはセンセに恨みがあるようなこと言ってたんだよね。多分女の人絡みだと思うんだけど、心当たりありませ

んか！」

『ありすぎてどれか分からん』

自棄になって訊いたあたしがバカだったよ、ごめん自分。

「もういいデス。あたしこれからお風呂だから、切るね。電話ありがと」

毎晩のように気に掛けてくれる電話は「頑張れ」と励まされてるみたいで、嬉しいよ。

テストが済んだら感謝の気持ちをちゃんと伝えようと思ってる。

『好きだぞ』

脈絡もなく囁かれた甘い言葉が鼓動を弾ませた。

『馬鹿で短気で感情だだ漏らしで歩いてるようなお前に、俺は惚れてる』

「なに……急に」

『残念な外見もひっくるめて好きだと言ってる』

あたしのセリフの端々を真似たひと言が飛び出してきて、理解した。

高津くんに噛みついた発言が、予想以上に彼を持ち上げているのだと。

自分の方が好きだからと言わんばかりに返してくるなんて……高慢ぶるとこ間違ってるよ。

――けど。

言葉尻にしか色気が添えられないようなひねくれた愛情表現なのに。どくんどくんと胸を打ち鳴らすあたしの体は正直だ。

「あのさ、あたしデザート食べさせてもらってもう十分お腹いっぱいなの！　何にも入らないくらい苦しいんだからね！　苦しいのに

……電話越しに糖分流し込んでこないでよっ、バカ！」
『そっちこそ、顔が見えないのいいことに可愛いこと言ってんじゃねぇぞ馬鹿が』
とろとろに蕩けだしたチョコみたいに甘ったるい彼の声が、流れ込んでは浸み込んでいく。
これ以上ぎゅうぎゅう胸を締め付けて苦しめないでよ。
その場に座り込んで立ち上がれないくらい骨抜きにされてるなんて、さすがのセンセも電話越しじゃ分からないでしょ？
「……うっさい、もう」
泣けちゃうくらい好きなんて、知らないでしょ。

＜3＞

まずかったのかなーと、ちょっと反省してみたりして。
何がって、ほらあれよ。
この間の卑猥だ汚いだっていう高津くんの発言に切れてしまってぎゃんぎゃん喚いてしまった、あれ。
気持ちいいくらいあからさまに反抗的な態度に出た後輩を、どうしてくれようかと思案中。

「橘部長ぉー！　時任先輩ぃーっ！！」
部員の中でも賑やかし代表、二年の花沢くんがバタバタと物凄い勢いでやってきた。
「落ち着けよ花沢。どうした？」
「あのっ、高津が……っ今日も練習休むって」
「……そっか。花沢ありがとう、わざわざ伝えに来てくれて」
「いや、全然いいんすけど……」
鳩の役目を終えても尚心配そうな後輩の背中を、叩いてあたしは送り出した。
「大丈夫。気に掛けてくれてありがと！」
「ここへ来て急にどうしたかなあいつ」
カイも不安を隠せないのは当然、地区大会は明日だ。
学年別に試合が行われる今回の大会で、高津くんが抜けてしまうのはかなりの痛手。――状況を分かってて、彼が練習を拒否してるんだろうってことは分かる。
分かるから、腹が立つ。
「あたしが昼休みに話してくるよ」
「オレも行く」
「ごめんカイ。あたしに任せてもらえないかな？　高津くんとモメ

たのあたしなんだ」
「そういうことなら、任せるよ」

昼休み、向かった教室では見つからなかったオレンジ色の目立つ髪が、屋上でゆらゆらと風に揺らいでいた。
コンクリート壁に寄りかかり立てた片膝に腕を乗せて、ぼんやりと遠くを眺める横顔に声をかける。
「高津くん。練習今日も出ないって聞いたんだけど、あたしに対する嫌がらせのつもり？」
「――そ。センパイの顔みたくないんだよね。放っといてくれる」
むかつくから、と付け足して視線すら寄越さない。
「それが本気なら、明日の試合に高津くんを出すことは出来ないよ」
「へえ。オレが出なきゃ団体戦、ボロボロだと思うけど？」
口元だけを引き上げる。
天狗になってる今の状態で試合に出しても、簡単に足元をすくわれるのがオチ。
過去にあたしもセンセに注意されたことがある。実際強引に出場した試合は、情けないくらいの完敗だった。
経験から学んだあたしは彼を拒絶した。
「あのね。君が思うほど他の一年生は弱くないから。それにね負けたっていいんだよ。本番は来月だし、高津くん抜きでやり抜いた自信とか悔しい気持ちが、案外いい結果生むかもしれないしね」
別にあんたなんかいなくても、と臭わせたことを感じ取ったのか、ようやく向けられた視線が刺すように鋭い。
ほーら、悔しいんじゃない。
「どんなに実力があったって、やる気のない部員を試合に出すほどうちの部は甘くないから。練習来たくないなら来なくていいよ。じゃあね」
プライドが高い分だけ、自分抜きでそこそこの成績を収められたら面白くないと思うんだ。彼だって他の一年生たちの実力があるっ

てことは分かってるはずだから。
ここは一つ、賭けてみようと思う。
道場の子どもたちと同じ目をして練習に取り組む高津くんは、剣道が大好きなはずだから。
制服のスカートまでも巻き上げた突風が、湿気をはらんで生ぬるい。
――明日は、雨かな。
そんなことを思いながら、屋上を後にした。

一歩一歩階段を下っていく足取りがゆっくりに、やがて完全に止まった。
下りきったタイミングで、廊下を横切る理事長代理に遭遇したからだった。
（うわ。タイミング最悪）
できれば期末考査が終わるまで会いたくなかったその人もまた、こちらに気付いて足を止めた。
変わらない冷徹な眼差し。血色の悪い面長の顔。マネキン顔に拍車がかかったというか、なんというか。
「ここへ来て有終の美を飾ることすら期待できそうにないトラブルが発生とは、どこまでも哀れだな」
「……毛嫌いする割に剣道部の事情に詳しいんですね」
「廊下の会話がよもや理事長室にまで響いてくるとは思うまい」
花沢くんがやってきた時のあれ、筒抜けだったのか。
「言っときますけど！！」
びしっと指を差し出して、理事長代理に狙いを定めた。
「このまま剣道部を終わらせるつもりもないし、試合にだって負けるつもりありませんから。全学年団体・個人でがっつり表彰台上がってみせるんで、乞うご期待！」
……あれ、なんかテレビ番組の予告みたいになってるけど、まぁ

いっか。
「低俗だな」
ふん、と鼻であしらった理事長代理の姿が完全に消えたところで、一気に脱力。
「うはぁ～～～～」
しゃがみこんで膝を抱えた。
センセと血が繋がってるって分かっても、やっぱり嫌いだあの人。同じような嫌味言われても、百倍ムカつく。

ごつん。
落ちてきた鈍い痛みに頭を抱えた。

「～～っくぅぅ～～！！」
悔しいけれどそれが何なのかが、重みで分かるくらい馴染みある痛みだ。
「痛いじゃん！　センセのバカっ、なんでいきなり叩くかなっ。角はやめてって言ってるでしょ、いつかあたし血噴くからね！」
「お前はそんなやわじゃないだろ。――それより、見事なまでに下着が丸見えだ。見せたかったらウチでやれ」
冷やかに見下ろしながら、凶器のテキストを抱え直すセンセだった。
「何が“乞うご期待”だ。聞いたぞ、高津が練習拒否してるらしいな。このまま試合もバックれるようなら一年団体は微妙だろうが」
「ご心配なく！　高津くん含めて全員揃って勝ちにいくもん」
「練習サボるのは見逃してやるから試合には出てくれなんて、甘いことほざいたんじゃないだろうな」
「逆だよ。出なくていいって言っておいたの。だから大丈夫。高津くんは来るよ」
大丈夫。声に出したら、自信になった。
「今までの部活で真面目に向き合ってきた高津くんを信じてる。好

きなものからはそう簡単に離れられないでしょ？」
へたりこんだまま見上げると、センセと目が合った。
しばらくの沈黙の後に、そうだな、と呟いて。
体を折った彼の薄い唇があたしの額を掠めるように、触れた。
おおおおっ、おでこっ！？
唇へのキスを期待したつもりじゃないけど、意表を突かれて脳内パニックが発動して両手で額を覆い隠すという奇妙な行動にでしまう。
だって、触れたところがものすごく熱い。
「後者には同意だ」
いなくなる背中から届いた声が、額の熱を全身に駆け巡らせる。
沸騰しそうなほどの高ぶる熱で、侵していく。
――簡単には離れられない好きなもの。
繰り返せばじんわり胸に広がっていく、いつか聞いた彼の声。
“それは、お前”
揺るぎない眼差しとはっきりとした口調。言われた時のことを思い返すと今でもきゅっと胸が締まる。
「人をオカズに盛り上がんないでくれる。気分悪いんだけど」
しっとりとした雰囲気に落ち着きかけたところへ投げかけられた声。
屋上から引き揚げてきた高津くんが、現場を目撃していたらしい。
「こっちもまさかの展開にびっくりしてるとこなのっ」
「びっくりってさ。たかがデコチューなんて子どもダマしに、真っ赤になって動揺してる意味が分かんないね」
「場所の問題じゃないの！　雰囲気っていうか……ギャップってい

うか……とっ、とにかく！　高津くんには理解できないだろうし、してもらわなくていーから！」

「ヤリまくってるクセに、なあに純情ぶってんだか」

さっきまで、強い磁力で床に引きつけられたように立ち上がれなかったのに、嘘みたいにあっさり膝が伸びた。

「ヤリまくってない！　ほどほどっ！！」

「は？」

ぽかんと間の抜けた顔をする高津くんから、ダッシュで逃亡。

あたし何言った！？　バカバカバカッ！！！　ほどほど、ってなに、ほどほどって！！！

＜4＞

試合当日は朝から雨だった。

気分が滅入ってるのは気候のせいじゃない。昨日の練習に、高津くんがとうとう顔を出してはくれなかったから。

もし今日彼が会場に現れても試合に出すことは出来ない。

「来るって信じてたんだけどな……」

試合前最後の練習日だった昨日。

カイには事情を全部白状して、練習に来ないのなら試合には出さないと勝手に宣言してしまったことを謝った。

間違ってないから気にするなって言ってくれた上に、部員たちに包み隠さず話をする役目を買って出てくれた。

「高津、やっぱ来ないっすね」

集合場所のK大に二番乗りした花沢くんが、がっかりしたように漏らした。

練習には来なかった高津くんが、ひょっとしたら来ているんじゃないかと気にして、こんなに早く来てくれたんだと分かるから切ない。

「普通なかなかここまで後輩のこと心配してあげられないよね。ありがと、花沢くん」

「いや……だって勿体ないでしょ、あんだけ剣道上手いのに」

「だよねぇ」

あの性格がこんな時に仇になるなんて……考えてても仕方ない。

数分後、この雨を心配して荷物を運んでやると言ってくれた佐伯さんが、店の車で現れた。防具と竹刀を積み込んで部員が集合するのを待つ……だけだったんだけど。

「ひとつ足らねーぞ」

学校から大学まで輸送した経験から、佐伯さんが荷物の数に疑問

を唱えた。
花沢くんとふたり、積み込まれた荷物の名前を確認する。
「……高津くんのがない……」
「あいつ……」
練習には来ていないのだから、荷物が残っていなくてはおかしな話で。
それがないということは。
「高津なら、練習に来たよ」
「カイ」
紺色の傘を広げた下で、にっこり笑顔でそう言った。
「正確に言うと“来てた”んだよね。練習中にちらっと姿が見えたのに顔出さないから気まずいんだろうと思って、休憩中に高津捉まえて話をしたんだ。みんなが帰った後にオレと佐々木先生でみっちり練習するから、それまで待ってろって」
「だからカイ、珍しく居残り練習するなんて言ってたんだね」
佐々木先生に見てもらいたいところがあるからもう少し練習するなんてさ。
「会場には直接向かうらしいから。今日の大会にはエントリーさせるけどいいよね？」
「……うん」
「でも気まずいったって、みんなに心配かけてるんだから顔くらい出しゃいいのに。ったくよー」
花沢くんの悪口の中にもホッとした様子が窺える。
と、突然。カイがくすくすと笑い始めた。
「どーしたんすか部長」
「いや、ちょっと思い出して。高津さ、気まずいというより恥ずかしかったらしいよ。梨緒に熱く語られて」
「あたし？？」
「オレが事情説明した後に“高津は誰より剣道が好きだから絶対来るって信じてる。大丈夫、心配しなくていい”なんて言われてノコ

ノコ出ていけなかったって。それ訊いて、確かにオレでも躊躇するかなって思ったんだ」

ああ、あれ。聞いてたんだ高津くん。

練習来なきゃ試合に出さない、なんて言ってしまった手前、部員たちを不安にさせたくなくて必死のフォローだった。もちろん、あたしの本当の気持ちだったわけだけど。

「よく分からんが、問題解決ってことだろ。後は思う存分試合してきな」

黙って煙草をふかしていた佐伯さんが、運転席に乗り込んだ。

ぞろぞろと部員たちが集まり始めて、カイが高津くんのことを説明すると歓喜の声が上がる。

その声を合図にしたように、荷物を乗せた佐々木さんの車は一足先に会場へ出発していった。

良かった――気持ちが落ち着いたところへ、あたしの携帯電話が短く震えた。ディスプレイに表示されるセンセの名前に画面を開いてみる。

【全部獲って来い】

それだけ。

なのに不思議と気合いが入った。

――センセにお土産持って帰るからね。

返信を打ち込んで、あたしたちも会場へと移動を始めた。

夏休みに始まるインターハイに向けての前哨戦、調整を兼ねて参加する学校も少なくない。

そんな中、万全の態勢で臨んだ試合結果。午前中に行われた団体

戦は全学年男女ともに優勝・準優勝の成績を収めることができた。
午後になったこれから、個人戦が始まる。
「オレたち勝ったんだから、センパイが優勝獲れないなんてことないよね。まさか」
恥ずかしいから練習に出てこれなかった、なんて可愛いとこあるかと思えばやっぱりこの憎まれ口。
「あのね……試合直前にそーいうプレシャー平気で掛けてくる後輩とかあり得ないんだけど」
「だってあんた強いんでしょ」
「負けないけどっ、獲ってくるけど！　もうさ、集中するから構わないでくれる」
「はいはい」
素直に返事をしてそのまま引っ込むかと思われた高津くんが、何を思ったのかあたしの肩に手を置いて顔を寄せてきた。
「……！」
「勝運のお裾分け」
じゃーね、と会場の閲覧席に戻っていく。
ちょっと待て！　ここには他にも部員がいるんだけど？　っていうか他のガッコの人たちとかにガン見されてるんだけど？
「意外……高津くんのことだから、普通にキスするかと思ってた……」
「ごめん、梨緒。私なんかちょっと萌えた」
同じく個人戦に出場するメンバーたちが呆然とするあたしへ声をかけてくる。
「素直になると案外厄介かもね、高津って」
カイまで冷静に解説してみせるから、ますます意識しちゃう。
「たっ、たかがほっぺにチューしてきただけじゃん！　みんなちょっと騒ぎすぎ！」
「えー。その割には梨緒、顔赤いし！」
「容赦ない諏訪先生と違う責めにぐらっとキちゃったりしてるんじ

ゃなーい？」
「あああっ、もううるさーい！！　トイレ行ってくる！」
うっとうしい冷やかしから逃れるように駆け込んだトイレの鏡を覗き込んで、赤面してるもうひとりの自分とご対面。
優しく宛がわれた高津くんの唇の感触を思い返して、また熱を持つ。

なんなのあいつはっ！　なんであんなことすんのよっ！

あたしは叫びたいのをぐっと堪えて、ざばざばと顔を洗い始めた。

＜5＞

山のようなトロフィーと表彰状を手に剣道部員全員で試合報告に上がった職員室。

迎えたのは信じられないくらいの静寂だった。表彰式も見届けずに帰還した名ばかりの顧問・小堺先生を捉まえて、「これどうすればいいですか」と差し出せば。

「あ……ではこの辺に適当に……」

「適当にって！」

「ひぃっ」

「梨緒」

提出物と同等の扱いが気に入らなくて詰め寄るあたしをカイが引き留めた。

しぶしぶながらに小堺先生を軽く睨んで、指定された場所に持ち帰ったそれらを置いてあたしたちは部屋を出た。

廊下に出ると部員の誰からともなく漏れるため息は納得だ。

「分かってたけど、さすがにあれはないよなぁ」

「なんかねー」

拍手と激励で迎えられた昨年までの雰囲気を知る二・三年はもちろんだけど、新入生たちも好成績にも関わらずあの反応じゃ拍子抜けするのも仕方ないと思う。

「どーでもいーじゃん、あんな奴ら。勝ちたかったの自分らだろ。インターハイ獲れば周りが騒ぎ立てるから、嫌々でも賞賛してくれると思うけど？」

言い方はともかく、高津くんの言うことはもっともだと思う。

「みんな良くやったって！　全然期待してなかった月島くんとか、根性見せた戸田ちゃんとか。佐和だって苦手なタイプ相手に勝ったし、戸頃の決勝の小手とか鮮やかだったよ？　町田も……」

「あーもう時任先輩、分かったから大丈夫ですって！　大泣きして喜んでくれた先輩がいるだけで十分でした、すいません！」
「やっ、あ、あれはさ……」
健気なみんなの頑張りに感動しちゃったっていうか、理事長代理にざまーみろって思ったら嬉し泣きっていうか。
「目から鼻から酷かったな、時任のあれは」
「諏訪先生いなくて正解だったんじゃない？　幻滅されちゃうかも……ああ、写メ撮っておけば良かったぁ！」
「分かってないなー。先生はあんな顔見たって可愛いって思っちゃうんだってば」
「げーマジかよー」
こらこらっ勝手に人の“汚顔”で盛り上がらないっ！！　――っていうか、あたしどんだけ酷い顔してたんだろ。
ううううう。
ぞろぞろと廊下を引き揚げていく一同の背中を恨めしく眺めながら、あたしはひどく落ち込んだ。
「気にしなくても大丈夫だって、梨緒。あいつらが言うほど酷くなかったし、オレは全然普通に見られたよ？」
カイが優しく肩を叩いて励ましてくれる。
「カイはあたしの泣き顔なんて見慣れてるでしょ……それに優しいから、そんな風に言ってくれるって分かってるもん」
「そんなことないって」
「橘部長がセンパイ見るときのフィルターって、加工がハンパないから当てになんないでしょ。確かにあれは女が泣く顔じゃなかったよ、駄々捏ねて泣いてるガキと同レベル」
肩を揺らしながら辛辣に告げる高津くんが、あたしとカイを追い越していく。
ぐさりと太いくさびを打ち込まれたように重くなるあたしの乙女ゴコロ。やっぱりかー！！
「高津、お前言い過ぎ」

「でもリオセンパイには、そーいうのが似合ってる」
「へ？」
さりげなく、褒められた？？
呆然と華奢な後姿を見送ると、
「オレは好きだけど？」
振り返ったオレンジ色の前髪の隙間から、艶めいた誘うような眼差しが向けられた。

どどどど、どっきん。
なななな、なにっ、あの意味ありげな視線はなにっ！！！

そのまま背を向けて行ってしまった高津くん。
なんか変だ。試合会場でほっぺにチューとかしてみたり、今日は絶対なんかおかしい！
「どうも……高津に本気スイッチ入れちゃったみたいだね、梨緒。説教がだいぶ効いたんじゃない？」
「なんで？　あたし散々なこと言ったんだよ？　大嫌いとかムカつくとか泣かせてやるとか、すっごい言われてるんだよ？」
「改心したんだと思うよ。あいつ、誰かに強く信用されて嬉しかったんじゃないかな」
良かったじゃない、と微笑みかけられても素直に頷けないこの複雑な心境は、どうしたらいいの。
でもまあ改心してくれたなら、以前よりは扱い易くなるってことだよね。
それなら……
「俺はお前に珍獣使いになれと言った覚えはないんだがな」
渡り廊下へ向かう角を曲がった場所で、壁にもたれたセンセが待ち受けていた。
先行くよ、と苦笑いを浮かべたカイがあたしを置き去りにしようとするから、気付かぬふりで素通りしかけた腕を掴まれ引き戻され

た。
「まずは試合の結果報告から聞いてやる。珍獣についてはその後だ」
「あ、あはは……」
――ああ、最悪。
腕組みをしたままじっとあたしの話に耳を傾けていたセンセが、もたれていた壁から背を浮かせた。
「他は」
「ほほっ、他っ!?　ないよなんにも、ホントないからっ」
ちゃんと洗いざらい話したよ、ほっぺにチューのことだって思い切って言ったし!!
信じて、ないのかな。
見上げたセンセと目が合ってちょっとドキッとした、面食らったほんの一瞬の隙だった。
壁際に追い詰められて形勢逆転。
「どっちだ」
「……は?」
「あいつが触れた方」
「えとこ、こっち……かな」
高津くんにキスをされた場所をさし示す指を押し退けて、センセの唇が触れてくる。びくりと肩が震えた。
「せせせせ、センセっ、ここ廊下!」
「すぐ終わる」
言いながら頬全体にキスを降らせる上書き行為がくすぐったい。
「終わんないじゃんっ……んっ」
目尻にまで施されて思わず漏らすと、とどめとばかりにぱっくり口まで塞がれて。
入り込んできた舌がざらりと口内をひと撫でして、あっさりと引

いていく。
ぞくぞくと背中を駆け下りた感覚が消えずに腰砕けのあたしを見下ろして、目の前のオトコは満足そうに笑ったものだ。
「考査が終わるまで余韻に浸ってろ、馬鹿オンナ」
って！！！！　生徒に向かって言うセリフ？
こんなで勉強に集中しろってなんの罰ゲーム……あああああっ、そーかそーいうことかっ！！　まんまそーいうつもりなワケね！
「センセの意地悪っ！！」
とっとといなくなろうとする背中に向かって精一杯叫んでやれば、
「愛があるだけ感謝しろ」
立ち止まって振り返る勝ち気な笑みにどきりとする。

――それは。
少し前に見た生意気な後輩の、何十倍も何百倍も破壊力抜群だった。

幕間　ーカレを着せ替えて　＜前編＞ー

ちょ……ちょっと待って。

しんと静まる教室に、センセとあたしがふたりきり。

それはいい。まだ分かる。

けどっ！

「逃げるな」

言われなくても机が邪魔して逃げ場なんてないってば。

してやったりと覆いかぶさって机にあたしを張り付けたセンセが、なぜウチの制服を着てるのか分からない。

髪を下ろしたままメガネもしていない。だらしなくネクタイを緩めた分だけ開いた襟元が色っぽくて。誘うような眼差しと悪魔みたいな勝ち気な口元に、走りっぱなしの胸のドキドキはどこまで速さを増していくんだろ。

これ以上、苦しくて無理なんですけど！！

「誰もいないからな、思う存分啼けばいい。制服プレイ、してみたかったんだろ？」

そんなこと言ってないから、この変態！！！！

叫びたいのに声が出ない。

彼の体の重みを感じると薄い唇が重なった。じんわりと深くなっていく濃密なキスに夢中になって応えてるのは、自分の意思じゃないんだって信じたかった。

「窮屈さはなかなか興奮を煽るもんだな。お前の体も普段より、熱い」

耳元をくすぐる低い声が意識を狂わせる。

ブラウスのボタンを手早く外して直接肌に触れてくるひんやりとした手が気持ちよかった。下着を押し上げて敏感な尖りを弄る指の動きに体を捩る。

「んっ……んんっ」

悶える声だけはちゃんと出てくるみたいだ。

顎をくすぐり首筋を辿って下りてくる熱い舌。まったりと先端を加えられて思わず彼の服を掴んだ。

「掴むならこっち」

吐息交じりに促されたあたしの手が、熱くて硬いモノに触れた――。

あれほど出すことが出来なかった声が、突然出た。

「うあああ～～～～っ！！！」

全開の視界に、彼がいる。

眉間に皺を寄せてあたしの上から不機嫌そうな顔をして。

「本気で寝てやがったな、お前」

「……へ？　寝てたって……え？」

左右を見渡してみる。広々としたグレーのシーツが波打っていた。

自分を見下ろしてみる。点々とした痣のついた紛れもない全裸だ。

同時に目に入った彼もまた、同じ。

「夢か……」

「は？」

思わずホッとして漏れてしまったひと言が彼の機嫌をますます損ねてしまったらしい。

「久々昇らされて気を失うならともかく、夢まで見るほど熟睡するとはいい度胸だ」

「ひっ！　や、でもあの、あたしセンセに襲われてたから夢とか全然思わなくって……」

うわ、なにをいうあたしの口っ！！！
自分で口を塞いだあたしの両手を除けて、
「ふうん……そんな夢なら許してやらないこともない」
くすくす笑いながらキスをする。
意味ありげに口の端を引き上げて唇をなぞってくる指にぞくりとした。

「ただし、“もっとして”と言えたらな」

どどどどっ、どっくん。
「なななっ、なんでそんなのっ」
「夢に見るほど欲しいんだろ？　俺が」
やめてーっ！！　そんなエロい顔してエロい声でエロ発言しないでよ～～っ！！
恥ずかしすぎて言えないからっ！！
ぶんぶん首を振って拒否するあたしの首に、彼が噛みついた。ちろちろと舌先でくすぐりながら耳の後ろの弱い部分をせめてくる。
「ひゃ……んっ」
体の上を這う手が十分すぎるほどに膨らみを楽しんで、腰の辺りへ下りていく。受け入れ態勢万全のその場所は彼の指先を悦ぶように内側から締めつけた。
「こっちの方は泣いて訴えてるぞ」
そーいうことといちいち言わないでよ、バカ。
あたしの口の中へと深く入り込んできた舌と同じく、下腹部に滞在中の指もまた抜き差しされて。内壁をなぞって掻き混ぜる。上と下で全く同じ動きをされたら、どちらに意識を持っていけばいいのやら。
「んんっ、ゃぁ」
増やされた指で感じる圧迫感は、まだ足らない。突き上げてくる深さが、まだ。

「……いじわる……っ」
「俺をそっちのけでひとり楽しい夢見てるお前が悪い」
「ぁっ……た、楽しくなんて……やっ」
指の動きを速められ快感が一気に背中をせり上がってくる。昇りつめる寸前で引き抜かれて、泣きそうになった。
も、ダメ。耐えられない。
「センセっ……やだ……ちゃんとして」
「違うだろ」
どこまでもあたしの口から言わせたいらしい性悪な彼が容赦ない。
「……もっと、してっ……」
顔を見られないよう首にしがみついて懇願した。
「ああ。してやるよ」
耳に流れ込んでくる甘く囁く声と一緒に、待ちわびていた熱を打ち込まれて満たされた。
抱きしめられた腕の中で、あたしは思い出したんだ。
――あんな夢を見たのは、あれが原因だって。

教室のほぼ中央。そこはあたしの席だった。
「あの馬鹿が」
お決まりの捨て台詞、携帯電話を両手に眺めながらぼやいているセンセが座っていた。
カイにもらったストラップがつけられている片方のそれは、忘れたのに気付いて探しに戻ってきたあたしの物。連絡を取ろうとして見つけたのかもしれないけど――センセは一体ひとの席で何してるんだろう。

ついでに聞いてみよう、と教室に踏み入れようとした足が止まる。
「……センセ？」
その人の指があたしの机を撫でていた。
思わず嫉妬してしまいそうになるほど、切ない横顔を見せながら。
「なに覗いてる」
教室後方から窺っていたこちらに気付いたセンセが椅子をずらして振り返った。
「ケータイ探しに来たんだけど……センセがそんなところに座ってるから……」
「好きな女の席に座ってみたくなる心理がどんなものかと実践してみたんだが――想像力ありきで楽しむものだと理解した」
「は？　そんなことを思いついた理由が分かんないよ」
小学生みたいな疑問の検証してたなんて。
見惚れてたことに後悔しながら、ずかずかと入り込んでセンセの横に立つ。
そしたらね、なんか不思議。
教室の中で椅子に座るセンセを見下ろすなんて初めてだから。

ふと、制服を着た高校生の彼を想像してみたくなった。
髪型は今と変わらないんだろうか、顔はもう少し女性的だったんだろうか、メガネは当時から掛けていたんだろうか――いくら考えてみても外見を遡ってイメージするのは難しい。
けど、ふてぶてしくて生意気な学生だったことは間違いないと思う。
「なにがおかしい」
「ううん。センセが高校生の頃ってどんな感じなのかとあたしも想像力働かせてみたの。でもムリだった。制服姿のセンセ見てみたかったなー。家にアルバムあるなら今度見せてよ」
目が合って、そのまま沈黙。
あ……あれ？　あたしなにかまずいこと言ったかな？

「目の前の俺に堂々不満唱えるとはいい身分だな」
「別に不満じゃないって興味だよ興味！！　だって知りたいじゃん……好きな人のことなら」
大きな勘違いをする彼の言葉を速攻で切り返せば、くすりと小さく笑い声があがった。
「催促上手か、お前は」
「へっ？」
下から伸びてきた腕に引き寄せられて奪われた唇は触れるだけかと思ったら、しっとりと絡みついてきて。
目を閉じて、思い浮かべた。
制服姿のセンセとふたり。放課後の教室でキスをしている自分の姿を。

＜後編へ続く＞

幕間　ーカレを着せ替えて　＜後編＞ー

「見たかったんだろ」

リビングで紅茶を飲んでたいたあたしに差し出してきたのは、分厚くて立派な装丁の卒業アルバム。

一度も開いていないという豪華仕様の表紙に書かれた学校名に、目を剥いた。

「センセって……ここのガッコ行ってたんだ？」

「父親に引き取られて、勝手に放り込まれただけだ」

テレビなどで名前をよく聞く幼稚舎から大学まで備わった超有名校だ。お母さんを亡くして引き取られた先の実家は相当お金持ちらしいから、当然といえば当然なのかもしれないけど。

隣に座って何語かも分からない本を読んでいる彼を見れば、学歴にも納得する。

そんな立派な学校なんだからさ、もう少し性格もマシになるように指導してくれたらよかったのに――と思うのはきっとあたしだけじゃないはずだ。

「俺に見惚れてるだけなら、また寝室連れ込むぞ」

「みっ、見ます！　アルバムガン見するからセンセはそっち読んでて！」

散々お戯れになったというのに、冗談でも連れ戻すなんてことを言う神経にゾッとしながら慌てて捲ったアルバム。写っている生徒の表情はかなり硬い印象だった。

（みんな頭良さそー）

思い込みも甚だしくそんな風に思いながら、三枚ほど進んだところに見覚えのある面影の人物を発見。

「あれ？　うわ、ひょっとしなくても佐伯さん!?　なにこれすごい超かっこいい!!」

パッと見でダントツ目を引いたイケメンは、バイト先の先輩佐伯さんだった。

まるで一般人に紛れ込んだ芸能人みたい。今は少しくたびれた…もとい、大人の渋さを習得して落ち着いた雰囲気だけどアルバムの佐伯さんはバリッバリの高校生だ――当然ながら。

「うるせえぞ、黙って見てろ。気が散る」

「う……ごめんなさい」

ぎろり睨まれた。

佐伯さんの名前を出して“かっこいい”なんて騒いだもんだから気に入らないんだろう。

小さくなって続きを捲る。さらに二枚目に、“諏訪伊織”の名前を見つけた。

（いた。センセわっかーい！）

叫びそうになる口に手を当てた。

個人写真に写る彼は今よりも髪が長い。変わらないイエローブラウンの髪色は本来彼が持っているものなんだという新たな発見。

高校生のセンセは近寄りがたいクールな美形、っていうのかな。メガネは掛けておらず、中性的で小奇麗な顔立ちはなんとなく想像していた印象に近かった。

そろり窺う現在（いま）のカレ。

横顔は大人のそれだけど、下ろした髪が普段より印象を柔らかくしているせいかどことなく写真と重なって見える。

（モテたんだろうなぁ。……この頃から適当に遊んでたのかな？例の想い人って――このアルバムに写ってる人なのかな）

過去を気にしたって仕方ないけどやっぱり気になる……本人には聞けないけど。

そんな考え事をしている間もページを捲る指は止まることなく動いていた。行事を飛ばしてたどり着いた部活動の箇所で剣道部が目についた。男女含めて決して多くはない部員の中で最前列中央に正

座するのは間違いなく彼だった。
「あ……カッコいい」
華奢だけどしゃんと伸びた背筋。カメラを見据える鋭い眼差し。色白故に映える濃紺地の道着姿はやっぱり素敵だ。
学校でも実際に一度だけ目にしたあの日のことは、未だにはっきり覚えてる。
顧問の時も竹刀一本で指導してきたセンセが防具をつけたのは、あれきり。
「写真褒めてどうする、そういうことは本人に直接言え。いくらでも聞いてやる」
「へっ!?」
笑いを含んだような声に隣を向けば、眼差しを和らげたセンセがこちらを見下ろしている。
いつから見てた？　それにあたし、思わず口走ってた……!?
「言ってみろよ」
頬に宛がわれた手は見えない鎖みたいにがっつりあたしを捕まえる。これじゃまるで脅迫だ。
“道着姿に激しく萌えるので、道場で今度ぜひその恰好で襲って下さい”って」
「勝手に人の声作らないでよ！　……そりゃカッコいいとは思うけど見慣れてないだけで、慣れればウットリしないもん！」
主張するあたしを見つめるアッシュグレーの瞳が、満足気に細められた。
「うっとりするほど好きか。初耳だな」
くすり。小さく笑ってキスをする。
馬鹿正直に白状したことは素直に認めて、ちょっとだけわがままを言ってみた。
「こ……今度センセが稽古してるとこ、見てみたいな」
昇段試験は受けているようだからきっとどこかで稽古しているに違いないんだろうけど、そんな話聞いたこともなかったから。

「ああ。連れて行ってやる」
「え、ホント!?」
あっさり許可が出て露骨に喜ぶあたしは、尾っぽを千切れんばかりに振る子犬のようだったと思う。
でも嬉しい。真剣に剣道をするセンセの姿を外から見るなんて初めてのことだから。
「うわ。なんか考えただけでドキドキする！　センセが防具つけて動くのってどんな感じ――っ？」
「お前は俺を着せ替えて楽しみ過ぎ」
きつくあたしを抱きしめたセンセが笑う。
「へっ？」
「もう少し目の前の俺に興味を示せと言っただろ」
……あ。センセってば自分に嫉妬してる。
ふふっ、可愛い。
「大好きだよ。センセだから――こんなにドキドキするんじゃん」
ドキドキが胸から胸へと伝わるように、きゅうっと背中に回した手に力を込めた。
すり寄った体温が、匂いが、心地いい。

こめかみに落ちてきたキスが、頬を掠めて首筋に小さな痛みを残していく。
耳朶を甘噛みされて背中が震えた。
「付け足しみたいに言ってんじゃねぇよ」
まだ剥れているらしい低く囁かれた声が、体の芯を疼かせる。
「態度で見せてみろ」
鼻先が触れ合う距離で言われて、あたしから口づけた。
いつもされるみたいに二度、三度と角度を変えながら薄い唇を食んだ。差し出された舌にたどたどしく自分のそれも絡めて、深いキスへ持ち込んだりもした。
あたしにしたら精一杯頑張ってみたつもりだった。

「も……いいでしょ？」
口の端から溢れる雫を感じながら訴えれば、彼の舌先が綺麗にそれを拭い取ってくれる。
「駄目」
間近に迫ったレンズの奥、艶めいた瞳があたしを捉えながら唇に触れてきた。
そして、小さく囁いた。
「“もっと、して”」
変化球でせめてくるなんて、ずるいよ――センセ。

幕間　ーカレを着せ替えて　＜後編＞ー（後書き）

次回より本編再開です。

<1>

「馬鹿だ馬鹿だと理解していたつもりだったが、お前はやっぱり底なしの馬鹿だ」
しみじみと呟く、馬鹿三回。
呆れ顔の彼の手に握られた携帯を奪い返した。
「なんでよ、いいじゃん！　こんなこときっともう二度とないんだから、一生の記念じゃん」
「生涯一度きり？　言い切って端から努力放棄か、あ？」
鬼教師モードの右手がむんずと鷲づかんだあたしの頬。
「しょーゆーことじゃなくて」
発声が奇妙になるくらいのアヒル口を晒した昼下がり。
押さえ込んでるのがオトナで、教師で、まさかの彼氏だなんて。
この状況を見た内の何人が信じるっていうんだろうか。
「携帯貸せ」
差し出した人質のおかげで解放された頬をさすりながら、様子を窺う。
カチカチと手元でなにやら操作し終えてほら、とあっさり戻ってきた。
「なにしてたの？　まさか、消したっ！？」
「お前に夜な夜な枕元に立たれるような自殺行為を誰がするか」
「良かったぁ」
ホッとして、携帯を抱きしめる。
確認するために呼び出したデータフォルダの中に記録された、一枚の写真。何度見てもにやけてしまう。
「答案用紙と並んで自分撮りした写真でそんだけ楽しめるなんて、安い女だな」
「どうせっ！」

過去にはひとケタを記録したこともある因縁の教科である日本史の期末考査で、なんとあたしは奇跡の「８５点」を叩きだした。これは全教科の中でも一番の好成績だった。

だから答案並べて記念撮影してお母さんに速攻メール。お世話になった佐伯さんにも送っておいた。

で、センセにも軽い気持ちで「記念に撮ってみたんだー」なんて見せたら、馬鹿連呼。

ひどいと思わない？

「でもこれであとは結果待ちかぁ……大丈夫だよね、センセ？」

「微妙だな」

はぐらかすことなく、包み隠さず正直に答える辺りがセンセなんだけどさ。

「こんだけの結果で微妙って言われたら、潔く辞めるしかないのかなって思っちゃうよ」

「くどい。辞めさせないと言ったろ」

「そうやってすっごい自信ありげに言うけどさ。なにする気なの？」

「さあな」

ふふん、と勝ち気に微笑む顔が悔しいけどカッコいい。

例え世界が明日終わるってことになっても、不安に押し潰されるなんてことないんだろうな。

やれるもんならやってみろ、って仁王立ちしてそうだもん……想像したらすごく笑える。

「それより。剣道に生かされてるという自覚があるなら、集中して練習に励め」

「うん。後はセンセに任せて頑張るよ。卒業までにセンセから一本取ってみたいしね」

「お前ごときに取らせるか」

「やってみなきゃ分かんないよ？　もし一本取れたらなんでも言うこと聞いてくれるっていうのどう？」

「乗ってやってもいいが、できなければ俺の言うこと“なんでも”

聞いてもらうからな」
　強調された部分にいや～な意図を感じずにはいられなかったけど。まだ半年以上あるんだから大丈夫、なんて妙な自信に駆られて気合いがみなぎってきた。
「よーっし、まずは団体で全国！　個人で優勝！　センセから一本！　頑張れあたし、不安がってる場合じゃなーい！！」
「考査当日の朝もそうやって、ひとり気合い入魂したんだろうな。お前のことだから」
　くすりと笑った彼の指摘は、正しかった。
　ホントは励ます言葉を言って欲しかったけど、さすがに電話もメールもまずいかなって避けたから。ひとり家を出る前に気合いいれたよね、当然。
「言って欲しいなら遠慮するな」
　内心を見透かされたような言葉にぐっと詰まった。
「惚れた女のわがままは、いくらだって聞いてやる」
　覗き込んでくるアッシュグレーの瞳に捉えられて、甘やかすセリフにきゅんとする。
　学校なのに恋人の顔をして、彼氏の声で甘い言葉を言われたらこっちだって錯覚しちゃうよ。
「……じゃあ少しくらい褒めてよ。あたしまだ、テストの結果褒めてもらってないんだよ」
“よくやったな”のひと言ももらってない。
「ああ。そうだったな」
　ぽんと頭に乗せられた手が、優しくなぜた。
　ふわりと包み込むように頬に添えられた両手に上向かせられた先に、メガネのカレ。
「採点を終えた時の俺の心境、教えてやる」
「……うん」
　心して聞いておこうと身構えていると、そのままぶちゅーっと口づけられた。

ぷはっと離れて、またぶちゅーっと。
キスを知らない子どもがするみたいに押し付けるだけの、イタズラっぽい口づけ。
これが……センセの心境？
顔を固定されて首を傾げる余裕のなかったあたしは、眉を寄せた。
「よく……分かんないけど、キスしたくなるくらい……嬉しかったってこと？」
「正解は、速攻呼び出して可愛がってやろうかぐらいテンション上がった、だ」
「……」
さっきのぶちゅーからその正解は絶対に導かれないと思うんだけど？
かろうじてテンション上がったっていうのが分かるだけなんですけど。
――ところが。
冷めていくあたしの気持ちを引き留めるように、蕩けるような恋人のキスが落ちたあと。
「頑張ったな。梨緒」
不意打ちで名前を呼びながら褒めるなんて合わせ技できた彼の攻撃に、あっさり撃沈。
腰を抱かれ夢中になりすぎたキスのせいで、昼休みの終わりを告げるチャイムの音なんて全然聞こえやしなかった。

＜2＞

その日の練習は道場一番乗りだった。
鍵を開けて足を踏み入れ一礼すると、更衣室で着替えを始める。
『剣道に生かされてるという自覚があるなら、集中して練習に励め』
センセの言うとおりだ。
あたしは剣道の成績を買われてこの高校へ入れたんだから、極めていくしかないじゃない。それだけしか能がない、って言われたって事実なんだから仕方ない。
きっちり成績残して堂々胸を張っていればいい。
「もっと強くならなきゃ」
そういえば、前より体に痣を作ることが減ったなと思う。
竹刀の剣先が体に入り込んでくるほど勢いのある攻撃をするタイプの部員がいないから、かな。
痛みすら懐かしむように腕の付け根辺りに触れた。
「センパイ。テストの結果どうだった？」
ノックもなく開かれたのは、紛れもない女子更衣室の扉だったはず。
なのにどうして後輩が、男が、高津くんが現れたのか意味が分かんない！
ブラとショーツだけとか、あり得ない姿でいたタイミングとかわけわかんない！！
「ちょ！　出てってよっ、着替え中！！！」
咄嗟に自分を抱いて高津くんに背を向けた。
道着はやや後方の床に置き去りにしたままだ。体を少しだけずらして伸ばした足のつま先でそろそろと引き寄せる。

「高津くんて、いつもそうやって女子更衣室平気で開けたりしてる!?」
「なわけないじゃん。下駄箱にセンパイの靴があったから覗いてみただけだし」
「……」
ん？　ちょっと待ってよ。それってあたしがいるって分かってるから、ノックもしないで入って来たってそういう意味だよね？　どーせあたしだからいいだろうって？　それは聞き捨てならないなっ！
「ひどっ……うわっ！！！」
足元の道着をずるっと引き抜かれてバランスを崩したあたしは、思い切り仰け反った。
ぽすんと収まる腕の中。
後頭部激突を防いだ支えを素肌で直に感じながら、持ち主に真上から見下ろされた。
「センパイて胸デカいね、揉みがいありそ」
視線はそろりと下へ落ちる。
胸元のボリュームを過剰に強調するように自分を抱いたままだったことに気付いて、かあっと全身が熱くなった。
「センセに可愛がられすぎて追い付かないんだろうけどさ、下着は適正サイズつけないと育たなくなるよ」
「ぐっ……」
同じようなことをついこの間センセにも言われたばかりだ。
まとめて買ってやる、と連れ込まれたランジェリーショップから逃げ出した。目に飛び込んできたアダルトな雰囲気たっぷりのデザインたちは、どうしたってあたしに似つかわしくなかったんだもん！
「これ以上おっきくなんないように押さえてるからいいのっ！」
――と適当にはぐらかしてみたものの。
あああ！！　後輩の男の子相手にする会話じゃない！！
とにかく。なんとか脱出したいけど、自力で起き上がるにはきつすぎる態勢なのが問題で。ホントは隠したい下の方だってもそもそ

と太腿を擦り合わせるしかできないなんて、はがゆすぎる！
この際水着を着てると思うしか……そーだよ、そうすればいいじゃん。
「あたしはビキニ、あたしはビキニ……」
ぶつぶつと呪文のように唱えて自己暗示をかける。
ぷっ、と噴き出す声が聞こえた。
「恥ずかしすぎて現実逃避の呪文とか……ありえねー」
くっくっくっ。肩を震わせて笑う高津くん。
振動が腕を伝ってあたしに届いて仰ぎ見た笑顔は、爽やか好青年“風”に見えるのに。
「なんだよじっと見て」
「高津くんの笑った顔ってサギだよね。女の子たちは何人もそれに騙されてきたんだろうね」
「下着姿晒して真っ赤な顔して見つめてくるそっちだって、十分詐欺だと思うけど。この際素直に騙されてヤってあげてもいいよ。服脱がせる手間も省けて楽だし」
「頼んでないし、ヤらないし！！」
仕方ないな、って雰囲気だだ漏らすのやめてくんないかなっ。
「お願いだから離してよ！」
「あんま騒ぐとバカすぎて可愛いからやめなよセンパイ。マジで止まんなくなるよ？」
にやりと笑って、ぴたりと口を塞いできた。
高津くんには冗談も待ったもきかない。
「んんーーっ」
高津くんの舌が強引にあたしへと割って入ろうとしてくるから、硬く唇を結んで必死に拒絶する。
抵抗するのに必死だったあたしの耳に、がちゃりと更衣室の扉が開かれる音が聞こえた。すかさず、謝罪の声。
「……す、すいませんでしたっ！！！」
あっという間にがつんと勢いよく閉じられた扉。

更衣室なんだから次々部員がやってくるのは必至な状況で、見られた！　と思うが早いかさらに続いて開いた扉から、さっきよりは落ち着いた別の声がした。

「――え？　高津くんが中にいるってなんで？　梨緒と……」

沈黙が数秒。

「だれか橘くん呼んできて！　ダッシュ！」

救援を求める声が上がって、慌てたように再び扉は閉じられた。

がやがやと表が騒々しくなってきた。

「んー！（おねがいだから！）　んんーーー！（いい加減はなれてよー！）」

「くっそ、押し負けた。舌入れたらこっちのもんだったのに。あんたの唇ってワイヤーでも仕込んでんの」

ようやくキスを止めた高津くんが悔しそうに口にした。

そんなことはどーでもいいっ！

「どーしてくれんの！　見られたじゃん！」

「そりゃこんなとこでしてれば見つかるっしょ」

危機感の「危」の字も感じられない棒読みセリフ。

なんとしても腹筋だけで起き上がってやる、と気合いを入れた時だった。

コンコンとノックする音に続いてカイの声が聞こえた。

「梨緒、中入るよ」

「え！？　あ、ちょ……」

あたしまだ上下下着姿なんだけどっ！

パニックになるあたしを起こした高津くんが、手にしたままだった道着を肩から羽織らせた。

「どーぞ」

代わりに答えて中に引きいれたのも、彼だった。

慌てて道着に袖を通したものの、袴もつけない姿でカイを振り向けるはずもないあたしを背中に隠すようにして、

「すいません部長。センパイもその気になってくれたんで、盛り上がっちゃいました」

なんてとんでもないことを言ってくれたのだった。

＜3＞

珍獣なんて魔王に比べたらまだまだ甘い、といったところなんだろうか。

勝ち誇ったような高津くんの“とんでも発言”をもろともせずに軽い溜め息で一蹴すると、「すぐにここから出ようか」とお縄をかけて更衣室から退散させたカイはさすがだった。

……けど。

「高津くんのせいであたしまで走らされてるんだからねっ！」

バカ！！　と思い切り背中に投げつけ猛ダッシュで追い越した。

納得がいかない連帯責任を負わされて、道着と袴姿でグラウンド内を大きく周りながらランニング中のあたしは高津くんに八つ当たりっぱなしだ。それでなくとも、七月午後の日差しは厳しくてイライラ、くらくら。

更衣室から出ていくカイが笑顔を浮かべてペナルティを言い渡していった時は、まさかと思ったんだ。

「部長も人並みに嫉妬したりするってことでしょ。センパイが生脚晒してんのチェックしてたし」

「もうさ、お願いだからあたしに構わないでよ。センセに文句あるなら直接やってくんないかな」

「ああ、あれならもう止めた」

――はっ！？

顔色一つ変えず淡々と追い越していくオレンジ色の髪を呆然と目で追いかけた。

“泣かせるって決めたから”

あんだけのこと言っておいてあっさり“やめた”ってなに、その

身勝手さ。

やめてくれたならいいんだけど、もっと早く言ってくれたらいいのに。

「でもじゃあなんでしつこくするの、ますます放っといてよ！」

「こっちだってそうしたいのに、させないのはあんたの方だろ。淫行教師の前で目キラキラさせちゃって、マジ目障りだし。ぎゃんぎゃん説教してくるわ、大勢の前で勝手に熱く語るわで鬱陶しいし」

木陰エリアがやって来て、軽快に動いていた高津くんの足が休息を求めてゆっくりとした動きに変わる。

つられたあたしも彼に合わせた。

「テキトーでいい加減な立ち位置で良かったのを、ぶっ壊したのはあんただ」

立ち止まって、振り返る。

言葉尻からてっきり怒っているものだとばかり思っていたあたしは、凪いだ海のように落ち着いた彼の眼差しに驚いた。

こんな顔も――できるんだって。

「オレの本気を理解してくれたのはあんたが初めてだよ」

――誰かに強く信用されて嬉しかったんじゃないかな。

ある日のカイの言葉が脳裏をよぎった。

カイの言った通りだ。高津くんの目が嬉しそうに、揺れていた。

「周りの人間はもちろん、姉同然だった人にすら“どうせ本気じゃないクセに”って言わせるのは、この見てくれと態度のせいだと思ってた。けど、たった数ヶ月一緒にいただけのあんたが証明してくれた。なんてことない、見る側の気持ちひとつなんだってさ」

……ああそっか、高津くん淋しかったんだな。

褒めて欲しいわけじゃない、頑張ってるんだってことを認めて欲しかっただけなのにしてもらえなくて。

あたしだって、頭を撫でてくれる手があるだけですごく嬉しい。

見ていてくれる人がいるんだって心強くなれる。高津くんが嬉しいと感じてくれている気持ちは、よく分かるよ。

「そうやって素直になったら、あたしだけじゃなくてもっといろんな人が気付いてくれるよ。ひねくれキャラも少しはかわいく思えるしね」

同士にエールを送るような激励のつもりで、ぽんと道着の胸元を叩いた。

「じゃあさ、かわいいついでに頭撫でてくんない」

「……はぁっ!?」

高津くんて、実はそんなキャラ!?!?!?

戸惑うあたしの目の前にお辞儀するようにして下りてきたオレンジ色。差し出されたら撫でてやるしかないでしょう?

柔らかな髪質が気持ち良くて、つい調子にのった。

「いいこ、いいこ」

――どうかこのまま素直な子になりますように。もっとみんなに理解してもらえますように。

おまじないみたいにこっそり唱えて往復させていた手が、二往復をしたところで止まった。

ぎゅっと強く抱きしめられた衝撃にその手が宙に浮いたからだ。

「ふぐっ」

思わずそんな声が漏れてしまうほど。

「“いいこ”されてテンション上がってんのにさ、奇妙な声出して盛り下げないでくんない」

くつくつと耳元をくすぐる高津くんの声に全身がぞくぞくした。

「ちょっ耳っ、くすぐったいから!　っていうか離れてよ暑いんだけど!!!」

「……くすぐったい?　暑い?」

低くした声に卑猥な色を乗せて囁いてくる声に、くすぐったさとは違ったなにかがぞくりと背筋を走り抜ける。

「こうされるのは、嫌じゃないんだ?」

かぷり、と。
耳を甘噛みされたら、もうダメだった。
「ひゃんっ」
変な声が出て一気に脱力。高津くんに身を預ける形になってしまった。
耳近辺はホント弱いんだから、勘弁してよ。
訴えるように顔をずらして見上げれば、
「センパイが好きだよ。あいつじゃなくて、オレを見て。剣道抜きでオレを見てよ」
蕩けるように甘い顔をした高津くんが言いながら、唇を寄せてきた。
素直になった途端にタチが悪い彼の腕の中、脱力したままの今のあたしは逃げられない、と観念した時だった。
ひゅっ、と。
一瞬何かが横切って、続いてがしゃんと派手な音。それは背後のフェンスに何かが突き当たった衝撃音だった。
「っぶねー」
ぽとりと落ちたそれを見届けると野球のボールだということが分かって、高津くんがグラウンドを振り返る。
そしてあたしは確認してしまった。
「……げ」
グローブを口元に当てている野球部員の隣で、腕組みをしているセンセの姿を。

“梨緒が諏訪先生以外に持って行かれるのは見たくないんだ。ましてや後輩なんてなおさらね”

そんな理由でセンセに報告したのはカイの仕業だったらしい。
あたしと高津くんが外周を走っている間、センセがお仕置き方法

を考えていたところにあの木陰での出来事。足を止めた時点でその後の展開を予感したセンセは、野球部の生徒を捕まえて「ぎりぎり外していけるか」とボールを投げるように指示したって言ったっていうんだからあり得ない！！！

「あんなの当たったら大変じゃん！」

「外しただろ」

「だから当たったら、の話だってば」

「済んだ話を蒸し返すな」

結局あの後、道場で練習を最後まで見届けて（半分監視的な意味もあったらしいけど）終わると速攻センセの車に押し込まれた。

高津くんを直接咎めることなく、あたしだけを連れ去った。

……ものすごく、不機嫌な様子で。

「お前どうして抵抗しなかった」

「しなかったんじゃなくて、出来なかったの！　……み……耳、噛まれて……」

噛まれるとあたしがどうなるかは、センセも散々責めてきた場所だから分かってるはず。

理解を求めたつもりが、逆効果だったみたいで。

それから家までの車内には重い重い沈黙が漂っていた。

＜4＞

ハンドルを握った横顔には、露骨に不機嫌が浮かんでいるのに。
黙ったままなんて珍しい。怒鳴りつけるか、多少強引に何かするんだと思ってた。
された方がマシだなんて思考に走ってるあたしは、どうかしてる。

「な……なんかね、あれだって。逆恨みはやめてくれたらしいよ高津くん」
「それであれか。余計にタチが悪い」
よかれと告げた報告が墓穴を掘ってしまったのだと気づいて、口をつぐんだ。
うちの近所の公園前に車が停車する。お礼を言ってドアに手を掛けたところで、これだけは言わなくてはとセンセを振り返った。
「好きだって言われたんだ。……けどあたしは、センセじゃなきゃ……ダメだから。言いそびれちゃったけどちゃんと言うつもりだよ」
「……」
「おやすみなさいっ！」
考え事でもしているかのように、手元に視線を落としたままの無言を返事と受け取って外へ出る。
今日のセンセはなんか変。呆れるほどのいつもの余裕はどこに行ったんだろう。
未遂とはいえ、グラウンドでの出来事がそんなにショックだったのかな……。
「梨緒」
車のフロントを横切ろうとしたとき運転席の窓が下りて、呼ばれた声に心ごと持って行かれるような気分になった。
アッシュグレイの瞳に引き寄せられて足が向く。

「……なに」
「俺をイラつかせるな」
低く唸るような響きにぞくりとした。
運転席から伸ばされた腕に肘を掴まれ引き寄せられると、唇をきつく食んで噛みつくようなキスをされた。
「おやすみ」
ついでみたいにそう言って、あたしを見送りもせず赤いスポーツカーは走り去ってしまった。

それから二日後、期末考査の順位が発表になった。
昼休み、掲示板に貼り出された順位結果を確認後、道場に集まった剣道部員たちで額を突き合わせ情報交換する。
学年別、上中下のレベル別に枠を引いて名前と順位を書き込んだ表を率先して作ったのが、二年の花沢くんだった。
「ざっと、こんな感じっすかね」
ぴらり、かざした一覧表をまじまじと眺める。
「ええ～～～っ！！　花沢くんて、そんな頭良かったのぉ！？」
三年のトップ、カイの隣に並んだ二年のトップに彼の名前を見つけたあたしは大絶叫。
「見かけ倒しで悪いっすね」
「え……あ、いや、そーいうつもりじゃなかったんだけど。あははは……」
ごめん、ホント見かけによらないや。
該当するのがもう一人、一年トップの高津くんだ。
彼には前評判があったからかろうじて納得だったワケだけど、期待を裏切らない優秀さを全教科満点という結果で示して見せたのには驚いた。あたしなんて答えを覚えてテストに臨んだってきっとムリ。

「今回の結果をこうして見ると、中位までに全員収まってるようだしみんな頑張ったよな」

満足そうに微笑んだカイの言うとおり、あたしほどではないものの下位レベルにいた数人も成績を上げてきていた。

「気休めなんて言ってどういうつもりなんですか、部長」

一同が胸を撫で下ろしたのも束の間、様子を窺っていた高津くんがやって来て花沢くんからペンを奪うと紙に何かを書きつける。

用紙のほぼ真ん中辺りに真っ直ぐ引かれた一本の線。

それは貼り出された紙に書かれたのと同じ物、あたしも気になった“赤い線”だった。

「これ、“ボーダーライン”でしょ」

やっぱり――そうなのかな。

カイだって気付かなかったはずがない。気付いていて言わずにいてくれたんだと思う。

あたしと、他三名。越えられなかった四つの名前がぽつんと取り残されたように浮いていた。

「ボーダーライン……」

誰ともなく呟いた声を最後に、しん、と静まる。

沈黙を破るように鳴りだした携帯の着信音。びくりとして手に取る。かけてきたのは紗枝だった。

「……もしもし？」

『午後から体育館で緊急集会開くらしいわ』

「えっ！」

思わず上げた声に部員たちが何事かという顔をするから、聞いたそのままを伝えるとみんなも一斉にざわめいた。

「ねえ紗枝。あの紙に書いてあった赤い線てさ」

『あそこでバッサリ切られるんじゃないかって、こっちも大騒ぎしてるわ』

紗枝からの電話を切って道場を出る。

いよいよ正念場――。

辞めさせないって言ってくれたセンセの言葉は信じてる。けど、どういう方法を取るつもりなのか全然教えてくれなかったし、おといから電話にも出てくれなくて。学校で会っても素っ気ないから正直少し不安もある。

それに……。

『俺をイラつかせるな』

思い出すたび胸を痛めつける声が、あり得ないくらいにあたしを弱くしてた。

何かと問題を抱え込むあたしをいよいよ面倒に思ったんだろうか。けど嫌いだったら別れ際にキスなんて――しないよね？

あんなに向き合ってきた相手の気持ちが、霧がかかったように突然見えなくなると淋しくて、怖い。

ざり、と。砂を踏む足音と人の気配を感じて顔を上げた。

常に絶好のタイミングで現れる彼かと思って緩んだ頬が、一気に硬直した。

「おめでとう」

京極理事長代理その人が、言葉に似つかわしくない嘲笑を浮かべて立っていたからだ。

「おめでとうって……なんですかそれ」

「境界ライン間際で切り落とされるという、粋な演出を最後に見せてくれたキミに対する賛辞だ」

くすりと、口元の笑みをより一層大きくした。

「勝手に最後とか言わないでくれますか」

マネキン男の細い眉がひくりと反応するのを確認できた。

「見苦しい虚勢だな」

「そっちこそ自分の心配した方がいいと思いますけど！？」

「ほう。それはどういった意味だろうか」

滑る口は止まるどころか自らピンチを引き寄せてしまった。やばい。

緊張で震えてることがばれないように強く拳を握った。

いつもなら、こんなピンチにはセンセが助けてくれるのに。なんで来ないのセンセ。

「こちらにいらしたんですか、京極理事長代理」

あたしの願いも虚しく、やって来たのは理事長代理の腰巾着、校長とは名ばかりの威厳の欠片もないおじさんだった。

「取り込み中なんだが」

「はぁ。ですが……諏訪先生がお客様をお連れになって……」

恐る恐る上目遣いに機嫌を窺いながら伝えると、後方を指し示した。

「客？」

そこにはロマンスグレーがお似合いの紳士風な中年（と呼ぶには恐れ多いというか）男性とセンセが、肩を並べて談笑していた。

「あれは……」

理事長代理の表情に、明らかな驚愕の色が浮かんでいた。

＜5＞

「鴨井知事じゃないか……どうしてうちに」
知事と呼ばれた名前に聞き覚えがある。
ニュースからは縁遠いあたしでも知ってる、不動の人気を誇るウチの県知事さんだ。
（あんなカッコイイおじさんだったんだー、知らなかった）
先程までの切羽詰まった危機的状況から一変、うわぁなんてすっかりミーハー根性丸出しでガン見してしまう。
センセと親しげな雰囲気なのは疑問だけど、笑顔が見られてちょっとホッとする。するとだ。センセがあたしを指差して、知事になにかを言っている。
（ちょ、ちょっと待ってよ!?　“あれがウチにいる国宝級のバカなんです”とか動物園さながらまさかの説明してたりしないよねあのヒト！）
妙な汗が背中を流れ落ちる。
にこやかな笑顔を浮かべて、ふたりがこちらへ向かって歩いてくるじゃない！
そろそろと身を隠した、細い背中。さりげなくふたりの視界から外れるように理事長代理の背後に回った。
「時任。お前は何してる」
「いや、えっと……」
どもるあたしをあっさりと引き摺りだして、自分の隣に据えた。
「初めまして、京極理事長代理。知事の鴨井です」
鴨井知事がスマートな流れで求めた握手に理事長代理も応えた。
「初めまして……本日はどういった御用件でいらっしゃいましたか」
「いや、この学園が進学に力を入れるという噂を伺ってね。全国レベルの活躍を見せる部活動の活気に鎮座せず、まい進する意気込み

ある指導者に一度お会いしたくてね。アポイントも取らずに申し訳ない。今日は近くに別件の所用があると伝えたら、彼が迎えに来るときかなくてね」

あたしはちらり、横目でセンセを窺った。

無理矢理かっ、センセってば県知事さんを無理やり引っ張ってきちゃったってか！　どんだけよ、何様なの。

「諏訪先生とは……面識がおありでしたか」

「諏訪くんは彼が大学時代から私の可愛がっている剣士のひとりでね、今でも稽古をつけているんですよ」

そんな繋がりだったんだ。この人が……センセの師匠。

肩に手を置いて微笑む様子からよくわかる。謙遜した態度を見せる余所行きの顔をした隣の男も、まるで知らない人みたいだし。

「……そうでしたか。それはわざわざ知事自らお越しいただいて、ご足労掛けました」

このタイミングで現れた上に、親密さを目の当たりにして理事長代理が面白くないのも当然だと思った。

隠しきれない動揺が言葉の間に表れてるようだ。

盗み見た理事長代理に浮んだ、作り笑顔。気力で動揺を封じ込めて、本来の姿に立ち戻る転換の早さはセンセにも匹敵するんじゃなかろうか。

しばらく観察していたあたしに鴨井知事が話題を振って来た。

「時任さん。君のことは私も知っている。中学の全国決勝は惜しいことをしたね、でもとてもいい試合だった」

「えっ！？　あ、あれ観てたんですか？」

「ああ、諏訪くんも一緒にいたな確か」

「……ええ」

はあっ！？　思わず口があんぐり。驚いた。そんな話は初耳だった。

センセもあの日、あの会場であたしのことを見ていた？　どうして今まで言ってくれなかったの？

訴えかけるように見つめた先の表情から、気持ちを読み取ることはできなかった。

「歴然とした体格差にも関わらず果敢に攻めに徹していた光景が、未だに忘れられない。こちらの学園に入学してからも活躍ぶりは耳にしているよ。昨年も我が県を代表して堂々の試合は見応えがあった」

なんだか、涙が出そうだった。噛みしめるように語る口調や言葉が、じんわりと胸に沁み込んでくる。

不思議な雰囲気を持った人だと思った。物凄く偉い立場の人なのに、社交辞令なんかじゃない生の声を聞かせてくれる。

「すごく、光栄です。ありがとうございますっ！！」

「今年は部長として、部員を引っ張っていく役目も担い大変かと思うが頑張って欲しい。応援しているからね」

午後一で伝えられるだろう、運動部がなくなるかもって話は伝わっていないのか。

「ご期待に添えるよう、励んでくれることと思いますよ」

「え」

潰すだの辞めさせるだのと言っていた張本人が、白々しくもそう言った。

唖然としたあたしから知事を遠ざけるように「校長。知事を部屋へご案内するように」と、校舎内へ誘導する。

（手の平返したみたいなあの態度、なにっ！？）

「間に合ったな」

誇らしげな顔をする男が呟いた。

「これで生徒の足切りも運動部廃止も、撤回せざるを得ない」

「センセが隠してたのって……これだったの？」

「鴨井さんは本気でお前の剣道を買ってる。目の前で熱弁振るわれて、京極がお前を辞めさせることはまず無理だ」

「運動部の廃止のことは言ってなかったんだね」

「あからさまなチクリなんかするか。進学化を推進する余り運動部

の活動が鈍くなるんじゃないかと危惧していると、会うたびに話をして刷り込んである。それに――理事長も休み明けには復帰する」

戻ってくるんだ、理事長。

「その割にはすっごい余裕だったけどなぁ、理事長代理」

「あいつに伝わってる予定じゃ年内復帰できるかどうかってとこだったからな」

小さく、笑みが漏れた。

「踊らされてるのが自分の方だと気づくのも、間もなくだろ」

「うわ、なんか悪っ……センセてば最初から理事長と打ち合わせ済みだったってこと？」

「ヒトの領域（テリトリー）に土足で上がり込んで引っ掻き回そうなんざ、百万年早いってことだ」

呆れるくらい高慢なセリフが、どうしてこうも似合っちゃうんだか。

気付けば普段通りの会話をしていたことに安心した。

「よかった」

「この期に及んで俺を信用してなかったようなセリフだな」

腕組みをしたセンセにぎろりと睨みおろされる。

「ちち、違うよ！　そうじゃなくてさ……き、嫌われたのかと……思ってて」

「嫌う？」

眉を寄せ、腕が解かれて伸びてきた手がブラウスのボタンをひとつ外した。

くい、と指が押し広げて露わになった胸元。

「な、なにす」

「こんだけ印つけられてよく思えるな、そんなこと」

痕のひとつひとつを親指でなぞりながら浮かべた笑みに、ぞくりと全身が震えた。

理由を話すとセンセは笑った。
鴨井知事に少しでも多く会うために、短期間に集中して稽古に通っていたんだって。終わってからもお酒に付き合わされて寝不足だし、連日の練習で筋肉痛にはなるしって。
「ふざけた輩に携帯もってかれるしな。そこに珍獣とじゃれ合うお前を見せられて単純にイラついてただけだ、馬鹿が」
持ち上げられた顎に被さるようにして唇同士が重なる。軽いキス。お疲れモードでイライラMAXだったんだね。そっか、よかった。にしても。会わない時間、柄にもなく体を張って動いていてくれてたことは新事実で、驚きで、嬉しかった。
「筋肉痛になるまで頑張ったんだね、センセ……ありがと」
「それだけか」
「だ……大好き」
うは、面と向かって「大好き」って恥ずかしい!!!
好き、だけでよかったんじゃない？　なんであたしってば「大」つけた？
顎を固定されたまま、きょどる視線。顔の熱がどんどん上がっていくのを感じた。
――それなのに。
「素直でよろしい」
満足気にレンズの奥で細めた瞳が誘うから。
「……ぎゅって、して？」
我ながら、可愛いことを言ってしまった。

息が止まるかと思うくらいきつく抱いてくれた腕の力強さが、愛おしい。
温かい感触が首筋に触れた。
音を立ててなぞる様にキスをする唇の動きに、ぞくぞくが背中をせり上がってくる。そのまま耳朶を軽く食んで、くちゅりと舌が中をいたずらになぜていくと、肩がすくんだ。

「や、ん」
「可愛い声出してんじゃねぇよ」
甘く響いた声ごと唇で閉じ込めて。
隙間にするりと入り込んだ彼が、かき乱していく。忙しいけれど乱暴じゃない、優しいけれど意地悪にうごめく舌の動き。水音と上がった息に煽られて、夢中になるのを止められない。
「梨緒ー！　臨時集会なくなったっ……きゃあああっ！！！」
背後の道場から聞こえた声にハッとした。
なんだなんだと出てきた部員の気配を感じて、センセから離れようとするのに。
「盛り上がってんだ。晒してやれ」
とか言っちゃって！
ますます深めてくるとか、あり得ないから！！！！

夏休み前のプロローグ＜1＞（前書き）

がっつりＲ１５です。

夏休み前のプロローグ＜1＞

「せせっ、センセっ！？　ちょっと落ち着こう！？」
マンションに連れて来られるなり、しゅる、とネクタイを引き抜いて。
わずらわしそうに外したメガネをリビングテーブルに放り投げる。
「無理」
追い詰められたソファに押し倒されて見上げた彼が、切羽詰まったような顔をしている。
熱っぽい眼差しに流されかけて、もうひとりのあたしが首を振る。
「せ……せめてシャワーとか……」
「分かった」
よかった……。
胸を撫で下ろしたあたしの腕を掴んで体を引き上げると、センセがぐいぐい引っ張っていく。
「どこ行くのっ」
「風呂場がいいんだろ」
「……はあっ！？　そんなこと言ってない、あたしはひとりでゆっくり……」
浴びたいのに。隙あらば逃げ出してしまおうかとか、そんなことまで目論んで。
続きの言葉はキスで塞がれた。
廊下の壁に強く背中を押し付けられて、ぐいぐい入り込んでくる唇に息が出来ない。
「焦らすな。抱かせろ」
命令口調なのにどこか懇願するようにも聞こえるのは、なんでだろう。
舌を絡め取られたらあっという間に堕ちていく。理性が崩れる、

と表現するのにふさわしい瞬間だった。
人の中で散々暴れるだけ暴れまわって引きずり出したあたしの舌を、所在無げにだらしなく唇からはみ出だしたままで放置した、ドSな彼の満足そうな声がにくらしい。
「欲しがる顔が相当エロいぞ」
薄っすら開いた視界に、伏し目がちだけどしっかりとあたしを見つめる瞳があった。
――いやらしい目で見ないでよ。
そう思うのに目が逸らせない。
彼が欲情に濡れた眼差しを向けたままあたしの舌を迎え入れる。押しもせず引きもしない、ふたりの狭間でねちゃねちゃと音を立てながら混ぜ込むようなキスを繰り返した。
「ふっ……ん」
スカートから引き抜かれたブラウスの裾から入り込んだ手が、さわり、肌を撫でる。普段は体がびくりと反応するくらいひんやりとしている冷たい手が、熱かった。
「あっ……んっ……や」
ブラを押し上げ尖りを弄ぶ指先がいつもより性急だ――遠い意識で感じていたら耳を唇でなぶられて、敏感になった胸元に爪を立てられて溜まらず声がひときわ高く上がってしまった。
「やぁっ」
「もっと啼いて。よがってみせて」
耳に舌をねじ込まれながら囁かれた、扇情的なセリフ。
上に纏っていたもの全部を取り去ると、始まりの合図みたいに胸に口づけてから音を立てて吸い始めた。
「あっ、あっ……あっ」
貪るように手荒くされて、ドキドキしてる自分が嘘でしょ、って思う。
ねっとりと頂に舌を絡ませて転がされるたび深い息が漏れた。硬くなったそれを舌先で弾かれたら、体もびっくりするくらいに跳ね

た。
「やんっ」
「立ったままされるのが好きか」
胸をくわえたままの口で言われて、首を振る。
「ウソつけ」
小さく笑ったアッシュグレイの瞳があたしの嘘を見逃さず、疼いてどうしようもなかった下腹部に手が伸ばされる。
どうして分かるの。このタイミングで触れて欲しいと思う場所。
「いつにも増してどうしようもなくなってるぞ、ココ」
「やっ……バカっ……だめっ……」
心とは裏腹に、気持ちばかりの抵抗を声にした。
「キモチいい、だろ」
ひと撫でしただけで差し込まれた指はすぐに増やされて感じる圧迫感に身を捩る。
キスの時よりイヤらしく音を立てるその場所を混ぜ込むように捏ねられて、限界だった。
「……も、ダメ……」

――まだ、イカせない。

意地の悪い彼の声を、この後何度も聞かされることになる。
廊下を散々濡らした挙句、バスルームに連れ込まれて更に喘がされ、最終的には寝室に放られて何回高みに昇らされたことだろう。
「も……ムリ……お願いだから、ね……」
「この後もう一回イッたら解放してやってもいい」
ラストスパート、とばかりに気合いを入れて両脚を抱え上げたオトコにギブアップを申し入れるも敢え無く却下。
この後もう一回って……。
「言っとくが、有効カウントは俺の一回、だからな」
勝ち誇ったように言って、深く差し込んだ熱い昂り。

「好きだぞ」
好きって言えば何でも許されると思ったら間違いなんだから！！
――文字通り「泥のように」眠って目覚めて、陽が傾いてるってどーいうこと。

眠りに落ちる間際に差し込んだ光はやっぱり朝日だったのかと、リビングから臨んだ光景に言葉を失ったあたし。
「むちゃくちゃなんだから」
シャワーを浴びて再びリビングに戻ると、空腹を補うための食事を作り始めた。
あたしより先に目覚めていることの方が多い彼の寝顔を拝めたってことは、寝不足も相当だったんだろう。
「睡眠不足に追い打ちかけてどーすんのよ」
あんなに散々……と一部始終を頭から再生しかけて、ぶんぶん首を振った。
まあでも、今回は大目にみてやらないこともないかな。

『ガキに戻れたらなんて血迷ったことを考えたのは、柄でもない体育会系生活を送ったせいだ』

イラついていた原因のひとつには、そんなことも関わっていたんだって白状したから。
あたしばかり背伸びして、卑屈になって、自信がなくて、ドキドキしてると思ってた。
俺様上等のセンセとは思えない告白はすごくびっくりして――嬉しかった。
「……最中に言うのってどうかと思うけどさ」
どうせあたしはそれどころじゃないから聞き流すだろうって、わざとかな。

あの人なりの照れ隠しとか？　ありえるかも。
考えたらおかしくて。センセらしいって、笑えた。

しっかり和食のメニューを作り終えたところで、未だ起きてくる様子のないオトコを迎えに寝室へ。あたしがベッドから抜け出た時と同じ恰好のまま、まだ眠っていた。
すやすやと寝息を立てる寝顔は子供みたい。さらさらの髪をそっと撫でたら母性本能が疼くというか。
「センセ、起きて。ご飯作ったから一緒に食べようよ」
軽く体を揺らしてみるけど反応なし。
「また今夜眠れなくなっちゃうよ？　ねえ。センセ、起きてってば」
まつ毛の先まで綺麗な顔を間近で見たら、きゅんと切ない気分になった。
無性にキスがしたくなって。触れるか触れないかくらいにそっと唇に触れてみた。
「……ナツ……」
小さく呟いた掠れ声にどきりとした。
すぐに顔を離して呆然と見下ろす。瞼を持ち上げたセンセがあたしを視界に入れた途端、驚いたように瞳の奥を小さくした。
「お前か……」
ゆっくりと体を起こして髪をかき上げたセンセから距離を置いた。
一歩、また一歩。
ぎこちなく後退しながら告げる。
「ご、ご飯……出来てるから食べて。あたしもう帰んなきゃ。っていうか帰るね！　……送ってくれなくていいから。じゃ」
「おい」
引き留める声に振り返らなかった。
部屋を飛び出てエレベータを呼ぶ間、早く早くとボタンを押し続けた。

どういうこと。
さっきのは誰かの名前？　多分……ううん、きっとそう。
呼んだ声が切なそうだった。

――……ナツ……

センセが好きだったっていう人の名前なのかもしれない。
別にいいけど。忘れて欲しいなんて思わないけど。

「バカ……」

嬉しかったのに。
すごく、幸せな気分だったのに。
こんな時に寝言で呼ばなくたっていいじゃん。
あたしの顔見て驚くこと……ないじゃない。

夏休み前のプロローグ　＜2＞

京極理事長代理が退陣する。
県知事に対する根回しがかなり効果を発揮して、運動部の廃止を防いで生徒の足切りもなんとか回避。
みんな揃って明日から無事に夏休みを迎えることが出来そうだ。
「学園の進学化へ向けて志半ばで解任となるのは無念ではあるが、理事長先生の復帰は待ち望んでいたことでもある――」
壇上から生徒を見下ろしたマネキンの顔が、明らかに不愉快そうだった。
本当ならばあの日、臨時集会を開いて運動部の廃止とあたしを含む該当生徒たちに対して退学勧告をする予定だったんだろうから、事態の形勢逆転や理事長の早期復帰によって自分が学園を追い出されることになるなんて想定外だったに違いない。

――ざまーみろ。

あっかんべぇ。
今日までの不満を晴らすかのように、あたしは舌を出した。
「君たちの今後の活躍には期待しているが、くれぐれも学園の品位を落とさぬよう心掛けて欲しい」
理事長代理が捨て台詞よろしく、ぎろりとばっちりあたしをひと睨み。
――げ、見られてた。
「遊びや恋愛にうつつを抜かすな。生徒と教師の恋愛など、以ての外だ」
いつかと同じ言葉を念押した後に、明らかにあたしとセンセを特定した嫌味をひとつ。

生徒の視線が一気にあたしへ集中する……最後の最後まで大っ嫌いだ、あの人。

そうでしょう？　と横へ並んだ教師陣のひとりへ送ったあたしからの視線を受けて、腕組みをしたオトコが笑みを浮かべる。

この状況で笑ってるとか、あり得ないっ！！！

あたしだって、別にガッコのセンセと恋愛するつもりなんてなかったの。

意地悪で俺様なオトナがまさかあたしを好きだとか。キスから始まってあんな強引に無茶苦茶な包囲網用意して待ち受けてるなんて思ってなかったの！

悪い大人に捕まらなかったら今頃あたしにも、年相応の彼氏が出来てたはずなんだから。

「梨緒。いい知らせがあるよ」

ぼうっとしていたあたしの正面に、人懐っこい笑顔がひょっこり顔を出す。

――そう。ひょっとしたらカイと付き合うことになってたかもしれないんだから。

「諏訪先生が顧問に復帰決定だってさ。夏休みはばっちり扱いてもらえそうだよ、良かったね」

センセが顧問に復帰する。

インターハイの予選を控えて、適任の指導者の元で練習を行えるのは素直に嬉しい出来事だ。

だけどその反面では。

『……ナツ……』

まだ片隅で引きずっている寝言の一件。

『飯の支度がふたり分用意してあったってことは、お前も食ってい

くつもりだったんじゃないのか』

逃げるように帰ってしまったあたしに、電話の彼がそう言った。

お父さんが帰って来るからと連絡が入ったんだ、と適当な言い訳でごまかして本当の理由は告げずじまい。

ショックだった。

センセにあんな切ない声で名前を呼ばせる“ナツ”という人に、嫉妬したんだ。

半日以上も肌を重ねて一緒にいたのに。名前を呼ぶのが別のひとなんて……悲しかったんだ。

「どうしたの？　梨緒もっと喜ぶと思ったのに。元気ないね、風邪でもひいた？」

「ううん。嬉しいよ。これでカイも練習に集中できるね」

そうだね、とホッとした顔を見せる横顔。

今日まで部長と顧問を兼任していたようなものだから、肩の荷が下りたんだろうな。目立って引っ張っていくタイプじゃないけど、ここぞというときにはみんなが頼りにしてきた。嫌な顔も疲れた顔も見せないで、トレードマークみたいな笑顔で部員をここまで引っ張って来てくれた。

すっかり頼れる男の子になっちゃったよなぁ。

「……あのさカイ。変なこと聞いてもいい？　……寝言で、意識してない人の名前呼んだりすることなんて……ない、よねぇ」

「寝言？　どうかな……梨緒、先生のとこで高津の名前でも呼んじゃった？」

「ち、違うよ！　なんでそこで高津くん！？」

「最近なにかと絡みもあったし、夢でうなされても変じゃないかなと思って。夢って深層心理を表すっていうから、全く無関係な人間が出てくるってことはないかもね」

「……だよ、ね……」

顔を覗かせた好奇心に従ってもきっといいことはないと思うのに、

どうにも止められなくなりそう。男か女か分からない名前の持ち主。センセが切なく名前を呼んだその理由が、知りたかった。

◇◇◇

集会を終えて各教室でのＨＲが終了後、剣道部員は道場に集合した。

センセの顧問復帰に部員みんなが喜んだ……正確にはひとりを除いて。

「復帰復帰ってみんな喜んでるけど、諏訪センセの実力ってどーなの。誰も見たことないんだろ。有段者＝実力者ってわけでもなし、もっともらしく指導するだけなら他にも適任がいると思うけど。私情交えて中途半端なことされるのが一番迷惑なんだよ」

無鉄砲というか命知らずというか。相変わらず、空気読まないヤツ。

「高津。先生は他の部員が迷惑するような私情を見せたことなんて一度もないよ。練習中はね」

フォローしたのはカイだった。ラストのひと言が、カイらしいちょっとした冷やかしにも聞こえる。

「不満があるなら四の五の言わずにすっぱり辞めろ。練習放棄なんて半端な真似は俺は認めん、即除名だ。そんな奴に晒してやるほど俺の実力は安くない」

高津くんの挑発に目もくれずあしらったのはセンセだ。

先制攻撃を見事に封じ込めて、淡々と夏休み中の練習日程についての説明を始めた彼の方が一枚上手だった。

「恒例の合宿だが、今年はこちらのインターハイ予選の日程に合わせて前倒し調整してもらった」

佐々木先生率いるＫ大との合同合宿。

三日間の日程はそのままに、見慣れない内容の記述に気づいて真っ先に手を上げたのは二年生の花沢くんだった。

「あの！　この毎日練習後に入ってる【イベント】ってなんなんっすか？」
「俺は知らん。佐々木の提案だ。ただ、最終日に合宿先の地域で祭りがあるらしい。参加する奴はK大の方で送り届けるから、浴衣持参するなり好きにしろと聞いている。帰宅希望者はうちの車両で送る手はずだ」
祭りと聞いてあたしが続いて声を上げた。
「お祭りー！！！！　やった！！　絶対参加する！！」
「梨緒ってばげんきんー」
「どーせ食いモンばっかだろ、頭ん中」
「言えてるー！」
やんややんやと賑わう会話が、たったひと言の冷ややかな声で遮られた。
「お前ら」
お叱りモードのセンセだった。
「祭りに参加したいがために余力を残そうなんざふざけた練習してみろ、全員自宅までランニングさせてやる」
ら……ランニングって……確か合宿先って高速道路で一時間半くらい走りませんでしたっけ？
こくりと部員一同が息を呑む中、梨緒のバカ、って声が小さく隣から聞こえた。
「ええっ！？　あたし？　あたし悪いのっ？　なんでなんで、みんなだってお祭り参加するつもりでしょー！？」
同意を求めて見渡した部員たちが、そろそろと視線を逸らす。
こんの薄情者ぉ！
思わず拳を握ったあたしの頭を、ごいん、と平たい何かが押し潰した。
「祭り祭りと率先して浮かれるお前が悪いに決まってんだろうが！」
眉間にしわを深く刻んだセンセの手元にバインダー。
あれか、今のはあれでがつんと来たわけか！

相変わらず彼女に向かって手加減なしの暴力健在なんだからぁっ。

まだひりひりと痛みが残る脳天をさすりながら、戸締りをするセンセの背中を睨み付けていた。

話があるからお前は残れと、居残り中だ。

「佐々木先生、今年はずい分と気の利いたことするね」

「可愛がってる橘とお前が今年で最後だからな。あいつは昔から世話好きな男だ」

ファミレスで佐伯さんから聞いたセンセの学生時代の話をぼんやり思い出した。

「それより来週末、暑気払いがてら稽古があると連絡が来た。お前俺の練習風景を一度見たいと言ってただろ」

「うん！　うんうん！　見たい、センセが剣道してるところ絶対見たい！」

お祭り並みにテンションが上がったあたしの様子に小さく笑いながら、センセが頭を引き寄せて胸に抱き寄せた。

「じゃあ来い。見せてやる」

頭のてっぺんにキスが落ちてきた。

痛みを与えたその場所を労わるような優しい口づけ。

これだから――センセには。

夏休み前のプロローグ＜3＞

一週間後に連れて行かれたのは総合体育館。
ガタイのいい大人の男性たちが勢揃いして威圧感が半端ないこと。
そんな中であの華奢なセンセが練習に加わっているなんて、不思議な感じがした。
その辺で見てろ、と来るなりさっさと放置されたあたしはウロウロ、きょろきょろ。
「おー来た来た、高校生！　本当だったかー。できれば制服姿で拝みたかった」
「これはまたちっこいのを選んだな。諏訪の奴」
「ああ、マジだ。写真と一緒」
「……あのぅ？」
三人の大人にあっという間に取り囲まれて上から下までじろじろ露骨に観察されるなんて初めてのことで、呆気にとられてされるがまま。
「あんたたちはチンピラか」
大きく立ちはだかっていた壁の向こうからやって来たのが、怒気を抑えているセンセの声だってすぐに分かった。
濃紺地の道着に黒の袴姿で現れた彼に、一瞬で釘付け。久々に見た道着姿にドキドキ。メガネを外しているからなおのこと。
やばいよ、センセカッコよすぎる……。
「さっさと練習始めたらどうなんだ」
「その前に紹介が先だろう？　連中も気になって集中できないと思うぞ、なあ？」
「紹介？　俺は自分の女を連れてくると言ったでしょう。ヒトの携帯たらい回して、こいつの名前も素性もバレてるのを知らないとでも思ってるのか。それでもまだ追及するつもりなら、こっちにも考

えがある」
どどど、どきっ。
だっ、誰を連れてくるってっ!?　じじじじじ、じじっ、“自分の女”っ!?
センセそんなこと言って今日あたしをここに連れて来たっていうの？
どんな顔してこんなあたしを“自分の女”呼ばわりしたか知らないけど、そういうことならもうちょっと可愛めの洋服選んで来たのに。思い切りラフすぎて、色気のいの字もないんですけどー!!
「おーこわ。触らぬ諏訪に祟りなしだなぁ。お前が自分から彼女連れて来るなんて初だから、ちょーっとからかっただけだろうが。そう剥きになって怒りなさんな」
恐らくはセンセより年上と思われるその人が、肩を叩いて離れていく。
「梨緒」
「……は、はいっ！」
「見惚れるのは結構だが外野がいない時にしろ。締りのない口を晒すな」
あたし、よだれでも垂らしてた??　思って咄嗟に口の端を指で触れて確認してみた。
その手を奪ったのはセンセだった。
ぱっくりと指を口に含まれて、一気に頭が真っ白になる。
「な、なっ、なぁぁっ!!」
こっちの動揺すら楽しむように目線を寄越しながら。
ちゅ、と。
咥えた指に音を立ててキスをして離した。
「練習。しっかり見とけよ」
見るけど、そりゃ見てるけど。
こんなことされたら集中できないでしょー!!!!!

恥ずかしさでどうしようもなく高鳴っていたドキドキは、練習が始まった途端あっという間に緊張と感動のそれへと変化した。

腹の底に響く床を踏み込む足音。広い館内の空気すべてを震わせる気合いが飛び交う。稽古の雰囲気にすっと背筋が伸びた。

竹刀を振るセンセの姿から一瞬たりとも目が放せない。

決して大きくはない体をカバーしている運動量と足裁き。鋭くて素早い。しなやかで力強い。とても綺麗な剣道をする人なんだというのが、第一印象だった。

吹き飛ばされそうなくらい激しい当たりを受け止める足腰、竹刀が折れてしまいそうな破竹音。高校生レベルのそれとは何もかもが違っていた。まるで別世界。

「すごい……」

他のメンバーの人たちもかなり腕が立つのだろうと感じた。

呼吸すらリンクするほど食い入るように見つめていたら、休憩に入って広げた手にびっしりと汗をかいていた。

「“梨緒”ちゃん？」

声を掛けられて振り向くと、私服姿の笑顔の紳士が立っていた。

「……はい」

「諏訪の携帯返しておくね、預かっておいてくれる？　連絡取れなくて不便だったでしょ、ごめんね。着信あるたび表示される写真に“梨緒って誰だ”って大騒ぎして盛り上がっちゃって、貸せ貸せって大人気だったんだよこの携帯」

「写真？」

手渡されたそれを見下ろして首を傾げた。携帯でそんなものを撮られた記憶がないんだけど？

「あれ、ひょっとして知らないの」

「心当たりが見つからなくて……」

そうなんだ、って笑いながらあたしの手から携帯を取り上げたその人がカチカチと操作を始める。

「ほらこれ」

翳された画面に見覚えのある一枚。
前代未聞の高得点を叩きだした日本史の答案と一緒に自分撮りした笑顔全開のあたしが、そこにいた。
「こ……これ……」
いつの間に、と頬を引きつらせながら巡らせた記憶の中にヒットしたある日の昼休み。
散々馬鹿だと言いながら、あたしの携帯をいじって何やら操作していたセンセの姿。
あれかーーーーー！！！
◇■◇
むにぃ。
摘まれているのに自分でかなりの厚みを感じてしまった、悲しいかなあたしの頬。
「い、いひゃいお……」
「お前の口に合わない食いもんがこの世にあるのか」
隣のオトコが片手間にあたしの顔を弄ぶ。
引っ張られたままぶんぶん首を横に振ると自由になった頬が、ふるんと揺れた。
「ならもっと美味そうに食え」
目の前に並べられた料理に自分は一口も手を付けないクセに、あたしにばかり食べろと勧める。
「センセこそ食べたら？　練習後でお腹空いてるでしょ？」
「人前で飯を食うのは好きじゃないと言っただろうが」
テーブルを挟んだ向こう正面には、複数のメンツが並んでいる。
いずれの顔も視線こそ逸らしているものの、こちらへ意識を向けてきているのをビンビン感じる。
まあ確かに……この状況じゃムリかも、ね。

練習後の暑気払いとやらに強制的に連行された。

“鬱陶しいだろうが少しだけ付き合え”

剣道仲間との食事会にあたしを【彼女】として付き添わせるつもりなのだと思ったら、緊張がマックスになるのも当然で。しおらしく大人しく、彼の隣でチビチビと食事を摘まんでいた。

着信画面にあたしの写真が無断利用されていることを指摘したら、たった一言。

“悪いか”

って開き直ってくれちゃってさ！

おかげでこんなことになっちゃったんじゃないの？　って突っ込んでやろうかと思ったけど止めておいた。

……だってさ。なんだかんだと結局は、あたしの写真を持っていてくれたことが嬉しいから。彼女の写真として唯一がアレっていうのはどうなの、って疑問は大きく残るけどもうこの際いいよ。

センセがそんな設定をしていることが――超レアだって思うから。

「聞いたか」

「ああ。聞いた“センセ”だと。禁断の響きだな」

「ここに犯罪者がいるぞ。おい、鳥海。しょっぴかなくていいのか」

「馬鹿言うなよ。オレはまだ潰されたくない」

全然内緒じゃない会話が堂々繰り広げられるこの光景……なんなの、ホント。

「暇人どもが揃いも揃いやがって……堪能したなら連れて帰る」

呆れたように言ったセンセがあたしの腕を掴んで引き上げようとした。

それを正面から押さえつけられて説得態勢。
「まあまあ。せめて彼女が食事済むまでいてやったらいいだろ。もう少し堪能させろよ、遊び人で有名だった後輩の貴重な“彼氏っぷり”」
って笑い飛ばせるこの人たち、ツワモノだ。
「だいぶ人間丸くなったから女でも出来たんだろうって話はしてたんだよ、以前から」
語りだしたのはあたしに携帯を差し出した男のひとだった。
「けど諏訪だから。絶対自分から口割らないしなって諦めてたところに、今まで月一くらいがやっとだった練習にせっせと週三で顔出し始めただろう？　何事かと思えば熱心に鴨井さんに学園がどうだのって仕事の話もってくるし」
「胡散臭ぇとは思ってたよな」
携帯を忘れたのは本当にうっかりだったらしい。
それからは体育館で話を聞いた通りの流れで、センセがガッコの生徒と付き合っているっぽいと話が広まって大騒ぎ。
「返して欲しかったら連れてこいって、冗談のつもりだったんだけど」
「結局諏訪から“自分の女連れて来る”て言い出したのは、本気ってとこ見せたかったんだろ」
「とっかえひっかえ遊んでた奴が、こんな年も離れた学校の生徒にガチだもんなぁ」
信じられん、と揃って首をふる。
「梨緒ちゃんはこいつのどこがいいの？　口調きついし性格悪いし。顔と金で釣られたって感じには見えないんだけど」
突っ込まれて隣を窺うと、レンズ越しの冷やかな眼差しと目が合った。
「相手にするな」
今度こそ立ち上がったセンセに引き上げられて、ずるずると個室の出口まで運ばれる。

「センセっ」

このまま帰っていいの。冷やかし覚悟でわざわざあたしをここまで連れて来てくれたのに。

結局、センセばかり責められるような印象しか与えてないんじゃないの。

これでよかったの？　センセはこれで満足なの？

……ううん違う、そうじゃない。

学校でもそうだった。

いつでもセンセはあたしと付き合うことで発生するハンデを一身に背負ってくれてる。

何食わぬ顔で、当然のように。

あたしもセンセが好きなんじゃないの。

彼が責められて仕方ない部分もあるけど、きちんと付き合うようになった今はそれだけじゃない。理由があるのを伝えなきゃ。一方的なばかりじゃないんだって。

「おい。どこ行く」

「質問されて、あたしまだ答えてない」

彼の腕を振り払って再びテーブルについたあたしは、正座をして呼吸をひとつ。

「センセのどこがいいかって話ですけど……確かに言うことキツいし意地悪だし強引ですけど、それでも付き合うって決めたの自分の意思です。あたしにはいつでも真っ直ぐでいてくれて、嘘をつかないセンセのことが好きになりましたっ！　以上です！！」

ぐわっと全身が熱くなる。畏まって声にするとこんなにも恥ずかしい。

だけどセンセは今までずっと、こうしてあたしへの気持ちを外へ宣言し続けてきたんだ。

――本気と決意と勇気がなきゃ言えないんだね、こんな風に。

改めて感じるありがたさにじんわりと心が弛緩していく。

パチパチパチ。

手を叩き「男らしい」と賛辞され、「乾杯！」とグラスをかざされた。

「優しい女の子で良かったね、諏訪。生徒をタブらかす悪い教師でお前を終わらせたくないって、こんな必死になって可愛いこと」

「素直というか馬鹿正直というか、そういうところもなっちゃんに似てるなぁ」

「……なっちゃん？」

「諏訪の友達の妹で、昔よく練習見に来てた子がいたんだよ。最初に写真見たときも雰囲気が似てるなって言ってたんだ。佐伯、だったっけ？　……そうそう、佐伯菜摘ちゃん」

――サエキ　ナツミ。

友達の佐伯って……佐伯さんの妹って……こと？

「気が済んだなら帰るぞ」

肩を叩いた手の持ち主を見上げた。

「ナツって……その人？」

呆然と尋ねたあたしを見つめるアッシュグレイの瞳が初めて。

心からの動揺を伝えるように、見開かれた。

夏休み前のプロローグ＜４＞

あたしの口から飛び出した“ナツ”という名前に驚きを露わにしたセンセ。
「寝言、か」
走り出した車中に響いた声は、普段と変わらなかった。
あの驚きようからしたら、さぞかし自分のしでかした失態を大いに反省するのだろうと思いきや。
「懐かしい夢を久々見たと思ったら、そんなオチか」
軽く笑い飛ばす、この余裕。
あたしばかりがヤキモキしている状況が続いていた。
「……その人、センセが好きだったっていう相手……なんだよね」
「ああ。付き合う前に終わった。確かに惚れられてる自覚はあったんだがな、これからって時にあいつの方が俺から離れていってそれきり。どこで何をしているのかも知らない」
そっと窺った横顔は遠い目をしていたけど、切なさが見えなかったから少しだけホッとしている自分がいる。
一方で、淡々と答えてくれる声が終わったことだと告げているのに、心は震えている。あたしらしくもなく、体も小さく震えてる。
「で、でもまさかセンセの好きだった人が佐伯さんの妹なんて、びっくりだよホント！」
時々裏返りそうになる声を必死に押さえて、落ち着け、落ち着けって言い聞かせた。
「二人が仲悪かったのもきっとそれが原因なんでしょ？　……そ、そうだよね！　だってセンセが自分の妹と好き合ってるって、佐伯さんにしたらフクザツな心境だろうなぁって思うよ、うん」
ベラベラとまくし立てながら、迷ってる。
震えの止まらない原因を追究すべきかやめるべきか。聞くのが怖

い。

『最初に写真見た時も雰囲気が似てるなって言ってたんだ――』

単なる“過去に好きだった人”の話が思いもよらない爆弾を投下した。

あたしと似てるって、そんなの知らない。聞きたくもなかった。

似てるから、センセはあたしなんかを好きだって言うのかなって思うじゃん。あたしだけに向けられてると信じてた、眼差しも真っ直ぐな気持ちも全部勘違いだったのかなって疑うでしょ。

くれた言葉も、キスも、温もりもみんな。実はあたしを通して彼女へ送られてたのって。嘘はつかないセンセがついた最大級の嘘だなんて絶対、思いたくないんだもん。

――あたしを好きだって言ってくれたセンセを、手放したくないんだもん。

「似てると言われたことが気になってんだろ」

小刻みに震えていたあたしの手をそっと包むように重ねられた手。ひんやりと冷たいのに、心が溶かされていくようで。

「確かにお前と佐伯の妹は似ている。全中の大会で初めてお前を見た時には目を疑った。決勝で負けたお前がフロアから出て行った後、夢中になって追いかけたのは間違いなくそれがあったからだろうと思ってる」

「そ……っか……センセやっぱり、あたしじゃなくて……。だよね。あたしなんか好きだっていうの、変だもん」

乗せられた手を振り払って、助手席の窓に張り付いた。

「あー！　なんか納得、すっきりしたかも！」

ほらね。やっぱりね、知っていいことなんて待ってなかった。

分かってたよ。分かってたけど――窓に映った情けない顔の自分

と直面して、全身に震えがこみ上げた。
ふるふると、唇がわななないた。
「……っふっ……ぇっ……」
ぽろぽろと次々に溢れては零れ落ちる涙が止まらない。流れるたびにあたしの中が凍りついていくような冷たさ。涙を意識したら嗚咽も漏れ出して、後ろを向けなかった。
悔し涙はがまんできるのに、悲しい気持ちで溢れる涙はどうしてこんなにも抑えが利かないんだろう。
なんで今なんだろう。なんで、ここなんだろう。

初めてここに座った時のことをはっきり覚えてる。
沈黙が気まずくて彼女がいないのかと聞いたのが始まりだった。
メガネを外した顔を見た後そのままファーストキスを奪われた。

「……止めて」

行動で示した自分の気持ちをあたしに探らせたのもこの場所で、彼の口から好きだと初めて告げられた。
思い出が詰まりすぎたツーシーターの狭いスペース。
どれもこれも全部があたしをすり抜けていたなんて、悲しすぎる。
もういいから。

「くる……まっ、……降りる」

もうやめて。
恋人ごっこなら十分楽しんだでしょ。
だから、止めて。
この気持ちと一緒に車を止めて。

「止めてよセンセっ！！！」

百年の恋も冷めるって言ってた、窓を震わせる程の声を絞り出した。吐き出したのにすっきりしない。それどころかますます苦しい。

ゆっくりと動きの止まったそこからすぐにでも立ち去りたくて、ドアに手を掛けた。

「話は最後まで聞けよ、この馬鹿」

焦りなんてまるでないセンセの声に、腕に、捕らわれた。

抱きしめて拘束する腕が普段より力強い。離すまいとしてくれるそんなことが余計に切なかった。

「面影に釣られて間近でお前を見た。会場の外で声もなく、悔し泣きしてるお前の姿をだ。佐伯の妹は泣き虫な女で少しからかうだけで涙を浮かべるような奴だったから、そこで目にした女とは重ならなかった」

腕に閉じ込めたあたしの収まりを確認するように一瞬だけ緩んだ拘束が、再び、きつくなる。

彼の顔が涙でぐしゃぐしゃになったあたしの顔のすぐ隣。

「重なるどころか焼き付いて離れないのが不思議でな。仲間にはヘラヘラ笑って出て行った癖に、唇を噛み切るほど涙を堪えるチビで意固地な女がずっと――学園に赴任したのはその理由を確かめたいと思ったからだ。父親が管理している学園だったのも巡り合せというやつか」

くすりと耳元で笑みを漏らす音がした。

「実際目の当たりにしたらヒドイ女で、呆れた。どうしようもない馬鹿でドジで声と態度ばっかデカくて剣道だけしか能がない。ひたむきに見据える目を見るまではあいつと似ていたってことさえ忘れていた」

“あのセンセ？　……なんで、あたしなの？”

“目がな……”
“はっ？　目？”
“いつか話してやる”

授業の内容なんて全然頭に入らないあたしでも、ひとつひとつ覚えてる。センセが語った言葉、触れた指。こんな簡単に引き出しが開くくらい覚えてる。

「似ているなと感じたのは一瞬。インパクトはお前の方が遥かに上。なんだコイツと思った時には、ハマっていたという訳だ」

そう言ってこめかみに口づける。

「あの日、引き合わせたあいつに感謝ってやつをしてたつもりが寝言で漏れた」

「……でもすごく、苦しそうだった……」

「あいつの名を呼ぶのは最後にすると決めたからな」

……そういえばセンセずっと“ナツ”って呼んでない。

けじめがきちんと実行に移されているのを認識したら、肩の力が抜けた。本当に、終わった恋なんだって。

つらつらとあたしに至るまでの経緯を語られて、やっぱり行動が無茶苦茶だとか、まさか生涯忘れないだろう場面を見られていたのかと思いつつ、平静を取り戻していた。

「ガキで色気もない馬鹿に惚れるなんて、未知との遭遇ルートを開いたお前に責任はしっかり取ってもらうぞ。過去に嫉妬する暇があるなら、まずは父親に紹介する根性を養え」

「……うっさい」

なによ、未知との遭遇ルートって。

いつもの会話に安心したら泣いているのが恥ずかしくて、ごしごしと目を擦った。

「それ以上醜くするのはやめとけ」

押さえつけた手の代わりに、熱を帯びた彼の舌と唇があたしの涙を拭っていく。目尻から頬から、顔全体に。

「ちょ……猫じゃないんだから」
「うるさい。俺の為に流した涙だろうが。俺がもらって何が悪い」
「ぐ……」
聞いてる方が恥ずかしいことを至近距離から真顔でよくも平気で言うよね……。
「お前が好きだと言ってる、梨緒。馬鹿すぎて可愛いなんて思える女は、人生ひゃっぺんやり直してもお前だけ」
とくん。
センセの声が、あたしに熱を吹き込む。
「示してきた全てに嘘はひとつもない。信じろ」
頬に手を添え重ねた唇。そっと触れて、離れて。次にはしっかりと押し付けてくる――センセのキスだった。
「完全に信用するまで帰さないからな」
そう言って、またキスをする。
何度も何度もキスをくれた。
バカだとか酷い顔だとか鞭打ちながら、「可愛い」だとか「どこへもやらない」なんて耳が蕩けそうになるような甘い飴を与える。

分かったよ、もういいよ。信じるからって。
折れたあたしの言葉を聞いてホッとしたように表情を崩したセンセの顔を、きっと一生忘れない。

ありがとセンセ。
ひゃっぺん生まれ変わっても好きって言えるように、あたしも頑張るよ。

<1>

K大剣道部とほぼ同時刻に到着した合宿所の会議室。
全員を集めて嬉しそうに顎ひげをなでながら、クマ男・佐々木先生は言ったものだ。
「初日から合宿日和の晴天だなぁ！　まずは着替えて走り込み十キロ、行って来い」
全体的な指揮に関しては大学側に委ねているセンセは、隣に立っているだけだった。
「諏訪先生って頑なに肌見せないですよねぇ。涼しそうな顔してもさすがに暑いと思うんですけど……ひょっとして、あれですか？　腕に彫り物とかがあって脱げないとかそういう……」
半袖のシャツすら鬱陶しいくらいの暑さの中、長袖のシャツを纏っていたセンセについて一年部員のひとりが呟いた。
着替えを済ませて海岸線を片道五キロのロードワーク。先生たちの目が届いていないこともあって気が緩むのは分かるけど、なかなか大それたことを言う。
「うははは。そりゃあタトゥー的な意味で？　それとも紋々的な意味で？」
「いや、えっと……」
口籠るところを見ると恐らく後者の方なんだろう。
ちらっとあたしを振り返る視線に気遣われているのを感じた。
「どっちもあり得そうだもんね。分かるよ。だけどセンセの名誉の為に言っておくけど、ないよ。まーっしろ」
答えたのはあたしだった。露骨にホッとしたような顔をする後輩に苦笑する。
「……なんか梨緒の口から言われるとイヤらしく感じるのは私だけ？」

「ううん、実はあたしも先生が上半身裸なのを想像しちゃった」
「やーん裸とかやめてー！！　どうなの、先生って脱いだら凄いんですってタイプ？」
「っていうかうちらより色気ありそうじゃん？」
「言えてるー！！！」
盛り上がるのは勝手だけど、あたしの前でやめて欲しい……。
リアルを知っているだけに脳裏に浮かんで、照りつける日差しとの相乗効果で鼻血噴いちゃいそうだよ。
「そう考えたらさー、去年の球技大会で見たポロシャツ姿は貴重だったよねー」
周囲を走っていた二・三年が同じように頷いた。
あたしの前でカッコつけるとか、カイをこてんぱにやっつけるんだとか。参加理由は子供じみてたけど。
半袖短パン姿の走るセンセなんて、あれきり目にしてない。確かに貴重だ。未だにあの時の写メを持ち歩いているのだという生徒がいるのも知っている。
諸事情から彼の素肌を目にする機会も割と多いあたしには、希少価値感が薄れているのだと自覚した。合宿の前々日にも……まぁ色々あったワケで。
（腕も胸板も見かけによらず筋肉質だなんて、おっきい声じゃ言えないけどね……）
あわわわわわっ。
生々しく目に浮かんだ彼は、半裸どころか視線を降ろせば全裸な勢いで。両手を振って掻き消した。
「なにしてんの梨緒」
「えええっ！？　あ、いや、虫がね……ぃだっ！」
背後から肩をめがけてやってきた衝撃によろけそうになる。
「たっ高津くんっ！　痛いよっ！！」
「センパイたちのしょーもない妄想話が後ろまで丸聞こえで、女子大生のお姉さんたち大はしゃぎして鬱陶しいんだけど」

海風になびくオレンジ色の髪をなぞりながら後方に首を向けると、きゃあきゃあと盛り上がっている黄色い声が届いてくる。
「肌むき出しよりシャツのボタン全開でぶら下がってる感じが萌えるんだけど」
……そ、そのシチュエーションには心当たりがありマス。
「今年こそ諏訪先生とことん飲ませて潰しちゃおうよぉ」
――こら。潰して何するつもりなんデスカ。
「夜の海に連れ出してキスするんだから絶対！　そのまま流れで……ってことになったら最高なんだけどなー」
ちょっとちょっと！　大っぴらにそんなこと宣言しないでぇっ。
見なきゃよかった、聞かなきゃよかった。
後悔しながら睨んだ隣のオトコは、
「諏訪センセが脱げないのって誰かさんが咬みついた痕がそこかしこで、見せられないだけだろ」
捨て台詞よろしくスピードを上げて走り去った。
「ちょ……梨緒ぉ～そーなのぉ～！！！」
「ほっ、本気にしないでよっ！　全然違うからっ、そんな目立つようなことするわけないじゃん！！！」
実は――挑発されて咬みついてしまったのは事実なんだけど。
だけどシャツから見えるような場所じゃないし、大丈夫、センセが肌見せしないのは絶対あたしのせいじゃない！
「っていうか梨緒と先生ってやっぱり……してるんだよね？」
「諏訪先生がって考えるんだけどさあ。どーにも梨緒が相手だと想像が追い付かないよねぇ」
じろじろと、セクハラまがいの視線を受けて「おっさんか！」と突っ込みたいのをぐっと堪えた。
「あ……あんまり考えない方がいいと思う！　うん。別に楽しいことないし、ねっ？　まだ先長いんだから黙って走ってないとバテるよ！　あああ、あたしっ先行くから、遅れないようにねっ」
逃げるが勝ちとばかりにそそくさとダッシュを決め込んで、エサ

をばら撒いていった諸悪の根源に追い付いた。
「あの人実は、毎年おねーさん達と楽しいコトしてんじゃないの」
追及するあたしより先、高津くんが不敵に笑う。
自分と一緒にしないでよ、と言いたいところだけど。過去が過去だけに強く出られないのがちょっとイタイ。
「センセはね！　そーいうの相手にしないもん……」
尻すぼみになりながらも否定した。
自分に自信があるんじゃない。嘘はつかないセンセの「あたしだけ」って言葉を信じるキモチがそう言わせてるんだ。
「ふうん、どうかな。飽きるのも時間の問題だと思うけど？　あんたみたいな胸だけアダルトサイズでお色気ゼロのチンチクリン相手じゃあな」
おおぅ！？　言ってくれるじゃないのさ！
「さっきからなんなの！　引っ掻き回して退屈しのぎするくらい余裕なら、プラス五キロくらい先まで走ってきたらいいよ！」
怒鳴りながらのランニングは当然だけど普段より呼吸が上がるペースが、早い。
暑いしイライラするしで、心拍数はさらに上昇する。……けどイライラしてるのは、あたしばかりじゃなかったみたいだ。
「クソ暑い中マーキング見せびらかされて、こっちはイラつくんだよ。ばーか」
「……へ？」
恨めしそうな眼差しがあたしに向いて、その手がさわりとうなじを掠めるように撫でた。
「うひゃっ」
「気付いてないの、多分あんただけ」
「え？　うそ！　ここ、ついてるのっ！？」
叫んでしまって慌てて口を塞いだ。いつの間にっ。
覚えは……なんとなく、ある。だけどそんな目につくような場所だなんて思ってなかったあたしはパニックだ。

バカじゃないの、バカだよセンセってば！　なに考えてんのよっ！！

＜2＞

一日目の練習が切り上げられたところで、あたしはセンセを捕まえて言ってやったんだ。

すると返ってきたのはでっかい溜め息が、ひとつ。

「しょーもない……」

腕組みをした彼のレンズの奥。アッシュグレイがいつになくクールな色を放ちながらあたしを見下ろした。

パターン化しつつある返しにムッとする。

「どこになにがついてるって」

「だから、この辺に痕……」

高津くんがしたみたいに首筋に手を当てようとしたあたしより先、センセの指先がさわりとうなじを撫でた。

ぞくり。

真夏でもひんやりとした冷たさと肌をなぞる指の軌跡に、息を呑んだ。

高津くんのくすぐったいのとは全然違った。どきどきとぞくぞくが一緒にやって来て、完全フリーズ。

「お前自分で見たのか？」

首を傾げて薄く笑った表情に追い打ちを掛けられて、どくんと鼓動が大きく高鳴る。無言で小さく首を横に振ると「だろうな」って呟いた。

「俺はつけた覚えもないし、なにもついてやしねぇぞ。まんまと高津にやられたな」

は……はぁっ！？

「ほ、ホントっ？　あたしでもなんかちょっと覚えがあるような気がしたんだけど……」

「……ふうん。あの状況でお前そんな意識が残ってたとは意外だな」

「あの状況て……やっぱりセンセも覚えがあるんじゃん！　ついてないなんて、そっちがウソなんじゃん！」
「嘘じゃねぇよ」
一層笑みを深くして引き上げた口元。
うなじに触れていた指先が、後頭部に回って軽く引き寄せた。
「お前が意識飛ばす寸前にそこに吸い付いたが、ギリギリで抑えたからな」
だだだっ、だからセンセは覚えてたってことかっ！！
あたしは自分がどんな状況だったかなんて全然記憶なかったから恥ずかしげもなく言っちゃったけど！　分かってしまうととんでもなく墓穴発言だと認識して、途端にぶわわわっ、と全身に熱が広がっていく。
「いいこと教えてやる」
獲物を追い詰めた時のセンセは、呆れるくらいにいい顔してる。
前世は狩猟民族か、肉食動物だったに違いない。そんでもってあたしは、小さくて美味しそうで怯える姿が可愛らしいウサギさんとか、きっとそういう小動物の生まれ変わりなんだ、うん、間違いない。
「い、いいよっ」
「遠慮なんてするだけ無駄だと学習する気もないだろ」
センセの顔がゆっくりと近づいてきて。頬を掠める息にまで敏感になるあたしは肩を竦めた。慣れないアップに視線を伏せていると、耳元に寄っていた口元がトーンを抑えて囁いた。
「“イっちゃう”って言うお前の声が、好き」
……。
思考停止が数秒間。
足元の方からぞわわわわわ～～～っと得体のしれない何かがせり上がって来て。

「ばばばばばっ、バカバカバカッ！　いきなりなに言ってんの！　信じられない、頭おかしいんじゃない！　真昼間から、こんなとこで関係ない話持ち出さないでよっ、全っ然“いいこと”なんかじゃないし！！」

暑さでおかしくなった？　こっそりアルコールでも仕込んでる？　とんでもない発言をする目の前の胸を両手でぐいぐい押し返しても、びくともしなかった。

「その声を近くで聞きたいからこの辺を構ってる、というオチだ馬鹿が」

そんなオチ知るかっ！　バカはそっちでしょう！？

叫ぶが早いかちゅっと首筋を軽く吸い上げられて、

「ゃんっ」

なんて漏れた可愛らしい声（と敢えて自分で言っておく）に調子に乗ったのは彼の方。首筋から輪郭をたどるように散らしたキスが、唇を捉えた。深くて熱くて甘いそれに体の芯がちりちりと痺れてくる。

いつの間にか支えられた腕に体を預けて、鬱陶しかった蝉の声が遠くに聞こえるくらい夢中でキスをした。

「どこまで見つからずに出来るだろうな？」

センセの癖にそんなスリルを楽しむなんて、最低だ。

ドキドキしながら喜んでいるあたしも――。

＊＊＊＊＊

そろそろ日も傾き始めた時刻だった。練習後に用意された一日目のイベントが始まるということで、佐々木先生から告げられた内容は。

「すいか割り……ですかぁ？」

大学側の部員が呆気にとられて繰り返した。

指定された集合場所に用意されていたのは艶々とした緑色の球体

が、三つ。見紛うことのない、すいかだ。
「ただのすいか割りじゃねぇぞ。うちからひとり、そっちからひとり、男限定で疑似スイカ役を差し出してもらう。スリル満点早割り対決だ」
いい年をした大人が考える企画とも思えないけど、本人が乗っているようなので黙って見守ることにする。どうだと言わんばかりに胸を張った佐々木先生がルールの説明に入った。
「いいか。それぞれ五人の選抜戦だ。一巡したら新メンバー五人を再選抜。ひとり一発勝負。ニセモノを打ちのめした場合、相手側に一つ分のポイント加算。本物は中身が外にこぼれた時点でポイントとする。競技者の誘導は敵方が全員で味方が一人、聞き分けが勝負のカギってことになるな」
早割対決はまだわかる。けど、人間混ぜてすいか割りってまるで罰ゲームみたいじゃん。
体育会系、恐るべし。
「すいか役って超ヤバくないですか？」
「心配すんな。競技者が男の場合は面を被ってよしとするから。女の場合はそのままな。いずれの場合も騒がないようにさるぐつわ噛ませるぞ」
……こわっ。
「用意した道具はオモチャだ。安心して生贄に出てこい」
って取り出したのは新聞紙で包まれたバットだった。本当にオモチャかどうか怪しいもんだ。
けどさ、にっこり笑顔で“生贄に出てこい”って言われてでる人間なんて――
「オレ、出るよ」
両者での話し合いが始まってすぐだった。
あっけらかんとした顔をしたカイが生贄……もといすいか役に立

候補すると、周囲が慌てて止めに入った。
「橘はやめとけよ！　万が一ケガしたら洒落にならんだろ。ここはやっぱり――」
洗礼ってことで一年生に振られるのかと思っていた役目に白羽の矢が立ったのは。
「……オレぇぇ！？」
なぜか全員一致の二年の・花沢くんだった。しょうがないよ、そういう役割なんだって、キミ。
で選抜メンバーは一巡目に一・二年生から高津くんを含んだ五名。二順目にはあたしとカイを交えた三年メンバーで。
高校生が先攻で始まったすいか早割り対決。すいか役の花沢くんが、恐る恐る仰向けに寝転んだ。女子なのでいきなりの面ナシ、さるぐつわ仕様。
目隠しをされた一年生は結構な勢いで相手チームにぐるぐると回転させられている。手が離れると足元が早速ふらついていた。
「もっと左！」
「いや右」
「もっと右だって」
「騙されるなよ、左が正解だからな！」
誘導役から一斉に声が掛かって賑やかになる。重なる声のどれが味方のものなのかなんて、これじゃあ全然分かんないってば。
邪魔する側はずい分と楽しそうだ。少しずつニセモノに近づいてしまっている一年生が、花沢くんにも見えているんだろうか。向こう側に投げ出した脚はがっちり抑え込まれてる。彼の頭上から迫ってくるのは見えないはず。来たと思ったらいきなり正面からバットが降りて来るとか、想像しただけでぞっとする。
そして。一年生が思い切り振り切ったバットは、がつ、と音を立てて花沢くんの頭より少し手前の地面に落ちた。
飛び起きた花沢くんが、さるぐつわをむしりとって叫んだ。

「こえぇよ！！」

――だよね。ご愁傷様。

＜3＞

合宿所のロビーで捲り上げた袖の下、センセの右腕が見事に赤く腫れあがっていた。

色白な肌とのコントラストは鮮やかとは言えない痛々しさで、あたしは一気に意気消沈。

「ごめんなさい！！！　骨はっ！？　ひび入ってる感じ？　折れてたりしないよね？？」

「お前どんだけ自分の怪力に自信持ってやがる」

「だってさ」

「謝るな。せいぜい打撲だ。お前を殺人犯にする代償だと思えば安い」

まともに優しいことを言われて頭を撫でられたら、嬉しくてちょっと泣きそうになった。

「欲求の捌け口を失うのは俺が困る」

――余計なひと言さえなけりゃ、ね。

めいっぱい不満を顔に表すと、くすっと笑って彼が顔を寄せた。

ちゅっと軽く触れたキスだけで機嫌が直ると思ったら大間違いなんだからね！

感激を台無しにされたことに腹を立てながらも、彼の腕をアイシングして包帯を巻き固定する。

「もうバカなことばっかり言ってさ、この際病院で大人しく縛り付けられてたらいいよ」

「俺は縛られるより縛る方がいい」

「そっ、そんな話してんじゃないの！　すぐ話をそっちに持ってかないでっていつも言ってる！」

「……今想像したな」

「してない！」

「だが目隠しも悪くなさそうだ。お前どっちがいい、最初くらいは選ばせてやるぞ」

この人、話が全然通じないんだけど～～～～っ！！！

そもそも。

どうしてこんなことになっているかといえば、原因は例のすいか割り対決だった。

一対一で二巡目を迎え、意気揚々と順番の回って来たあたしがクリーンヒットしかけたのは、

『……オレ、マジで終わったかと思いましたよ……』

ニセモノ役の“花沢スイカ”だったんだ。

間一髪のところをセンセが助けに入って腕一本を犠牲にしたと――まあそんな感じで。

『やっぱり必ずひとりはいるもんだなぁ』

全っ然反省の色もなく、がははは、と笑いっ放しだったのは仕掛け人の佐々木先生。

訊けばこの【変則すいか割り対決】は彼らが大学時代、剣道部内で夏休み恒例イベントだったのだという。これはそん時の傷だ、と前髪を上げて自慢げに見せた“勲章”に花沢くんはますます青ざめていた。

結果としてあたしの一撃が相手側にカウントされて、二対一となったところでイベントは終了した。

“利き腕だからな、不便がある時はお前が代わりになれ。それでチャラだ”

本当ならば肩から吊るして絶対安静が必要な状態の右腕代わりとして働く条件に、なんの異論もなかった。

「時任、水追加しろ」
と言われればコップになみなみと水を継ぎ足して。
「肉が食べづらい」
と言われれば、皿に乗ったハンバーグを食べやすいように小さくカットして戻す。
彼の隣で補助をしながら、学生たちが引いた後の食堂で摂る少し遅い夕飯だった。正直食べた気がしないけど、こんな結果を招いた原因はあたしにあるので文句も出ない。
それになんだか……。
「俺は食えんぞ」
センセが慣れない左手でぎこちなくフォークを扱いながら、穴が開くほど眺めていたあたしに気付いて横目で窺った。
「不自由で困ってるセンセっていうのも、たまにはいいね。子どもみたいで可愛いよ」
「……さっきの二択、合宿が終わるまでに決めて置けよ。戻ったら即実行してやる」
子ども扱いしたのが余程面白くなかったのか、突然脈絡もない話を持ち出しながら食事を投げやりに口に運ぶ。
拗ねた姿がやっぱり可愛く見えて、笑いが止まらない。
「うるさい」
口封じとばかりにあたしへ放り込まれた肉の塊は、見間違いでなければ三つほど重ねられていたはずだ。
「んぐっ……」
不意打ちされて喉に詰まらせたあたしは、咽かえりながら水を流し込んでようやく平静を保つことができた。
「死んじゃうじゃん！」
「食いもんで死ねるなら本望だろ」
しれっとした顔をしながら食事を続ける横顔を睨み付けながら、小さくため息。
（まったくさ。彼女を殺しはぐるとか、どんな照れ隠しよ）

今度はあたしがふて腐れつつ残りを平らげていると、「梨緒」とまさかの食堂でいきなり名前呼びされて箸が止まった。
隣を向いた瞬間に唇が重ねられて、予想外の接触に心臓がどくんと大きく跳ねる。
――今の流れでどうしてキス？
混乱があたしを呆然とさせていた。

「言い過ぎた」

静かな声が反省を残して、何事もなかったように時間が動き出す。
自分の方から謝って来るなんて滅多なことじゃない。
呆けていた意識が通常モードにようやく切り替わると、途端に愛おしくて、くすぐったくて。
「うん」
小さく返事をしたあたしは。
腕が触れ合うくらいの距離まで、彼の方へと椅子を寄せた。

＜4＞

二日目は暑さを避けて、早朝五時から休憩を挟みつつ三時間の練習。

四時起きで朝食をかきこめる部員はK大メンバーも含めて半数以下で、

「腹減ったー！！」

練習が終わると大半がシャワーもそこそこ、食堂に流れ込んだ。

「ご飯～♪」

一堂に倣ったあたしもウキウキで向かっていた途中、佐々木先生と話をしているカイを見かけた。

練習中以外はちゃらんぽらん（というのは余りにも失礼なんだけど）な先生が、見たこともないくらいに真剣な顔をしてる。

（何話してるのかな……）

足を止めて窺っているあたしの襟が後ろからぐいと引っ張られて、喉を圧迫された。

「ぐっ、ぐるし……」

顔を覗かせた高津くんがオレンジの髪を揺らして小さく笑いながら、シャツにかけていた指を解放した。

「これからオレと、いいとこ行こうか。暇でしょ」

「やだ」

即答すると不満そうに眉をひそめる。

「行き先くらい聞く気ないわけ」

「あたしお腹空いてるから！　これからご飯で忙しいの」

「は？　意味わかんねえし。定食がっつり食った上におにぎり三個くすねたヤツは遠慮しろよ」

どき。見られてた。

「さ、三時間も動けば消化しちゃうじゃん！」

つん、と顔を逸らした。
「別な女子誘って行って来ればっ」
昨日のことだって忘れたワケじゃないんだから！　あたしも敢えて黙ってるけど、謝りもしない高津くんを許すもんか。
ふーんだ！
「こんだけオレに素っ気なくするのあんた位だよ。ムカつく」
うわ。さりげなくイヤミ。サイテー、サイアク。
知らんふりを継続していると、思わず耳を大きくしてしまうような言葉が聞こえてくる。
「……センセ呼び出されてたから、あんた追跡行くかと思ったんだけど」
「先に言ってよそれ！」
くるりと向き直って正面から後輩をにらみ上げた。
「そんな話だと知ってたら付き合うに決まってるでしょ、っていうかすぐ行こうよ！」
「飯で忙しいんだろ」
「あと一時間くらいガマンできるから大丈夫」
「あんたってゲンキンのテンプレみたいだな」
失礼なっ。臨機応変、順応性バツグン、くらいに言ってくれないかな！

「――で、まんまと乗せられて浜辺を散策デートか」
ああ、視線が痛い。
外は闇。あたしの胸中にもどんよりとした暗闇が展開されつつあった。
「だってセンセいなかったし、携帯も繋がらなかったからさ！　本当に呼び出されたのかと思ったんだもん、仕方ないじゃん！」
「仕方なく連れ出されて気付いたら手繋がれてました？　岩場に連れ込まれてヤられそうでした、で済むと思ってんのか！　この馬鹿

が！！　あいつは獣だ。人と思うな、語る言葉に真実があると思うな！」

ひいいいいっ。

キラキラと星が瞬くロマンチックな夜なのに、下界では嵐が吹き荒れて。でっかいカミナリまで落ちてます。合宿先まで来て、丸めた雑誌で思い切りポカポカ頭殴られてます～～っ！！

センセは練習後、半ば強引に佐々木先生に連れられて腕の具合を診せに病院へ行ってその帰り、助手席からあたしを見つけたんだって。

「でもあのタイミングで見つけてくれるなんて、まさにケ、ケガの“大名”だよねっ」

ごんっ。

今度は拳が真上から落ちてきた。

「使えもしないことわざ違えて、上手いこと言ったつもりで得意げになるほど恥ずかしいことはないと思い知れ！」

「あ……違ってた？　あははははは」

「お前実は反省してないだろ」

「そそそそそんなことないよっ！！　ごめんなさいごめんなさい！　今後一切ついて行ったりないし、何言われても信用しません～～！」

「帰ってからと言わず、今すぐこの場で縛り付けて出歩けないくらい散々してやろうか」

ぎゃん！！

「――が、生憎合宿は明日までだ。最終日、徹底的に扱いてやるから楽しみにしとけ」

剣道で扱かれるくらいならいくらでも耐えるよ、力が付くなら無駄にはならないし。縛り付けて散々されたら意識はなくすし翌日体動かないし、きっとあたしにいいことなんてなにひとつないと思うから。そっちより全然いい。

「説教はここまでだ。さっさと行って来い」

すでに始まっていた二日目のイベント。顎で促されたものの、気が進まなかった。
「あたし……ここでずっとお説教でもいい……」
「馬鹿言ってんじゃねぇぞ」
ぽかっ、と。更に一発叩かれた。
「だって――」
大嫌いな「肝試し」だって言うんだもん。
「橘と組めばいい。お前を放って逃げ出すこともないだろうしな」
「でも暗いのやだー！」
ぎゃんぎゃん喚くあたしの首根っこをまるで猫のように掴み引きずるセンセの手によって、「問答無用」と放り入りこまれることになったのだった。
ペアでチェックポイントに用意したお札を取って持ち帰るという、至ってシンプル至ってスタンダードなこのイベント。平気な人には楽勝なんだろうけどさ？
「……梨緒。どこからそんなもの持ってきたの」
しがみつくあたしのせいで歩きづらいだろうカイが苦笑しながら、護身用にと拾って手にした木の枝を見やった。
「なんか気付いたら持ってた」
「梨緒は小学校の修学旅行の時も怪談話怖がって聞けなかったよね、そういえば。相変わらずだなぁ」
「こんなの絶対慣れないし、鍛えられるもんでもないじゃん。男の子ってみんな割と平気だよね？　やっぱり女の子を守る仕様に出来てるのかなぁ」
「かもね」
話をしていると気が紛れて恐怖心が薄れて助かった。
と、足元にひんやりと巻きついてくる嫌な感触が行かせまいと邪魔をする。
「ぎゃあああああっ！！　足っ、足っ！　なんかいるっ、なんかがあたしの足にいるぅぅ～～～っ！！」

叫ぶと同時に手にした枝をガツガツ振り落とす。
「落ち着いて！　植物のツルだよ、大丈夫だからストップ！」
「ひぇ……？」
足元に屈んだカイが手で制して涙目のあたしを見上げた。
言う通りしっとりと水気を含んだそれが足首に絡んでいる。丁寧に解いてくれたカイに感謝して再び先を急いだ。
「ね……ねえカイ。なんか妙に涼しくない？」
「この時間だし林の中だしね。寒かったらもっとくっついててもいいよ、梨緒さえよければ」
ほんの一瞬センセのことが頭を過ったけど、放り込んだのもカイを指名したのも彼だから。この際遠慮なく言われるがままぴたりとカイの脇に潜り込むようにしてくっついた。
「……そう来たか……」
「へ」
「いや、なんでも」
カイの腕がしっかりと肩を抱くように回されると、背後まで守られているようで安心した。
「早く戻りたいよぉ」
「もう少しだと思うんだけどな」
くねくねとした小路をずい分歩いた気がする。
すると二手に分かれ道が現れて正面にひらひらと手を翳す人が待っていた。
「遅いよー待ちくたびれたじゃないか」
K大部員なのだろうけど練習には見なかった顔だ。
「あの先輩って……一年生ですよね。さっき練習にはいませんでしたよね」
「合流に遅れた罰でこんな役目負わされてる」
ということらしい。
「ここからはルートを分けて途中にあるお札もって先に進んでね。二枚揃ってないと引換えしないから」

鬼のようなことを笑顔で言ったその彼にあたしは大絶叫。
「えええええっ！！　無理っ、絶対無理っ、ひとりでなんて絶対やだぁっ」
「だよね、梨緒には無理だろうな……そういうことなので、オレ達はこのまま引き返して棄権することにします」
ありがとカイ！！！
こくこくと頷きながら同意した。
「あのさぁ。せっかくのイベント盛り下げないでよ」
脅迫まがいの声色にぞくりと背中が震えた。
まじまじと見返した彼が再び笑顔に戻る。
「君たちで最後だし、彼女の方には僕がついていくってことでどう？」
思い掛けない提案にちょっと浮上しかけたものの、そこまでして貫徹しなきゃいけないイベントでもないしな、という気持ちもあって揺らいでいた。
「棄権なんて、許されると思ってる？」
背後に浮かぶのは熊みたいな佐々木先生の姿。
そのひと言で、しぶしぶ了承することにした。

初めて会った人なのに、手を繋がれてホッとしている自分が怖いよ。
恐怖心が極限なのはもちろんだけど、安堵している理由はそれだけじゃないのかなってちょっと思い始めた。
「なにさっきからじっと見て。僕の顔が気になるの？」
「ごご、ごめんなさい！　ちょっと似てるなと思って……」
太陽の存在を全否定するような色の白さが際立つ横顔は、どことなくセンセを思わせた。繋いだ手の冷たさまでも。
「こういうの苦手なんだね」
「だって暗いし心細いし、何が出てくるか分からないしっ……先輩

すごいと思います……いくら罰だってあんなところに一人で待ってるなんて……あたしだったら泡吹いて気絶してると思う、間違いなく」

「誰かが来ること前提でなきゃいられないよね。けど……なかなか姿を見せないとやっぱり心細くなるかな」

「す、すいませんでしたっ遅くなって！　あたしが足引っ張っちゃったせいなんです」

「いいや？　君の声は遠くの方からよく聞こえてたから、早く来ないかなって楽しみだったよ」

「あはははは……」

無駄に声がデカくてゴメンナサイ。

「ところでお札ってどこにあるんですか？」

「あそこだよ」

指差したその場所に積み重ねられた空き箱。

「あれを取ったら、こんな意味もないくだらない遊びからもようやく解放される」

やっぱり嫌だったんだろうなー。妙に声に実感籠ってる。

そりゃあんな所に待たされてたら誰だって愚痴りたくもなるって。

「あたしも早く戻りたいです」

札を取ろうと腕を伸ばした。

――君はもう戻れない――

声ではない声が頭に直接響いてくる。

振り返ったその場所に、彼はいなかった。

「えっ！？」

驚愕と恐怖が全身を巡って、闇に吸い込まれていくように体がぐらりと傾いた。

＜5＞

――梨緒っ！！

センセに呼ばれて腕を引かれたのを覚えてる。

抱き寄せられた腕の中はずぶ濡れなのに熱かったのも。

――良かった。

耳元で聞こえた、切なげに漏れる掠れ声も。

「ぶぇっくし！！！」

ちょっと気が緩むと品のないくしゃみが飛び出た翌日。

その度に「色気がない」だの「女じゃない」だの周りに散々笑われた。

「っくし」

目立たぬように小さく抑えたセンセのくしゃみの方がよっぽど可愛げがあるって、あたしだって思うけど！

ふたりだけでクシュンクシュンしてるのが、ちょっと笑える。

合宿最終日は早朝から午前中で練習が終わる。ランチは打ち上げも兼ねてのバーベキューだ。高校生側が働かされる最後の大仕事だったんだけど――。

「センパイ幽霊見たんだって？　一番無縁そうなのにね、ご愁傷さま」

持ち上げようとしていた野菜の詰まった箱を横から攫った高津くんが、代わりに皮肉をひとつ置いて行く。

じゃあ隣の飲み物を、と伸ばした場所にも先を奪われて。

「これですっかりトラウマ確定っすねー。オレもすいか割りやる度思い出しそうだけど」
「花沢くん……」
楽々担ぎ上げてさっさと運んで行ってしまう。気付けば周囲にあったはずの荷物が全部見当たらない。
焼きと配膳は一・二年総出の分担だから、三年のあたしたちはこの荷物運搬と後片付けしか仕事がないのに。
「あたしの仕事取らないでよぉ」
「まーまー」
ぷんすかむくれていたあたしの肩を叩いたカイがにっこり笑顔を見せる。
「昨日雨の中を真っ青な顔で帰ってきた梨緒のこと、みんな気遣ってるんだよ。諏訪先生は普段にも増して他人寄せ付けないオーラ放出しまくってたから、何事だってちょっとした騒ぎだったんだよ」
「あたし……あんまりよく覚えてないんだけどさ。センセはどうして駆けつけて来てくれたの？」
「オレは梨緒と別れてすぐチェックポイントに着いたんだ。途中には札なんてなかった。安全面を考えてＰＨＳを持たされてたからさ、佐々木先生に確認したら“そんなルールはないし、誰も置いてない”って言われて。多分それを聞いて諏訪先生は異変に気付いたんだろうね。雨も降り始めたし、オレも梨緒を呼び戻そうと思って分岐した場所まで戻ったら――確かにあったはずの道がなくなってたんだ」
ぞぞぞ～～～～っ。
「なっ、なにそれ……道がないってあたし普通に歩いてたよ？　誰も置いてないって……じゃああの人……誰？」
「オレも初めて見たよ。本物の幽霊なんて」
「幽霊～～～っ！？！？！？」
ぞわぞわと背中をせり上がってくる恐怖心。だってちゃんと足もあったし、普通に会話もしてた。それに――

「あ、あたし手繋いだよ!?」
ホッとする、とか安心すらしてたんだけど!?
「手を繋いだだと？　オトモダチにでもなったのかお前は……っくし」
最後のくしゃみのせいでいつもみたいにビシッと決まらないセンセの登場に、思わず肩が震えた。
「……かわいー」
「うるさい。お前の方の事情をまだ聞いてない……っく……話せ」
意地になってくしゃみを我慢しながら鋭く眼光を光らせる。
バーベキューの準備が整うまでの間、適当な場所に腰を落ち着けてカイとセンセにあたしが体験したことのすべてを話した。
「佐々木先生の話とぴったり合いますね」
「紛れもなく遭遇したということか……お前の声は霊まで呼ぶのか。本格的に凶器化してるな」
「佐々木先生の話ってなに?」
「合宿所の管理人に確認した、二十年ほど前の話だ――」
大学のサークル仲間で訪れた内の一人が、例の林の中で転落事故死したという。
集合に遅れた一人の学生に罰として、肝試しの役を負わせる名目であそこに放置したんだって。いつまでたっても仲間はやって来ないし、雨が激しく降り始めて。帰る途中に足を滑らせて……。
話を聞きながら胸を締め付けられたあたしは、ふと彼の言った言葉を思い出した。
「――あ、だから……」
“合流に遅れた罰でこんな役目負わされてる”
“誰かが来ること前提でなきゃいられないよね。けど……なかなか姿を見せないとやっぱり心細くなるかな”
あれは、当時のことだったんだ。

不思議と同情した。あの時確かに彼の存在を目で確認したし、言葉を交わした。体験がリアル過ぎて【怪奇現象】なんて言われても全然実感が湧かないからだと思う。

事故死なんて納得できなくて、あそこでずっと成仏できずにいるんだろうか。

「何を泣いてる。思い出し泣きするほど怖かったか」

「……ううん。そうじゃなくて、あんな場所で取り残されて死んじゃうなんて悔しくて寂しかったんだろうなって思ったらなんか泣けてきたっていうか……あたしだってきっと化けて出る気がする。それに話聞いてもまだ信じられないんだ、あんまり普通だったから。色が白くて、ちょっとだけセンセに似てたよ」

今思えば亡くなった人だから色白だったのかな、とも思うけど。

「梨緒は大丈夫だよ。諏訪先生、オレ佐々木先生に今の話伝えてきます」

あたしの髪を撫でたカイがいなくなると、

「あいつ、女でも出来たか」

脈略のないことを言いだした。

「えっ!?　訊いてないけど??　っていうかなんでいきなりそこ？」

「俺の経験値でなんとなくだ。まぁ女が出来たとしても……お前には確実に言わないだろうがな」

っくし。小さくひとつくしゃみを出したセンセの台詞に、昔馴染みのプライドで彼女が出来たらしき手がかりを巡らせてみても何も引っ掛かってはこなかった。

「あたしも手伝って来ようかな。結局荷物運ばせてもらえなかったし」

立ち上がろうとした腕をセンセに引かれる。

「行くな」

どきりとした。

短いたったひと言に、強い磁力でぴたりと引き寄せられたみたい

に座り込んだ。
「ここでお前は俺の右腕役に徹してろ」
「うん……センセ昨日、怪我してるのにあたしのこと抱きかかえて運んでくれたって聞いた……ありがとうって言えてなかったね。ありがと。風邪までひかせちゃったし……今日ちゃんと病院行ってよね」
「それは無理」
即否定した彼を訝しんだ。子どもみたいに「病院が嫌い」とか言うんじゃないでしょうね、この人！
「祭りに参加するんだろ」
「うん」
「興奮し過ぎてお前が屋台荒らししないよう俺には監視する義務がある」
そんなことするかっ！！　――でもそれって。
「センセも一緒に行ってくれるってことだよね」
「ついでだからな」
「そっか。えへへ……」
嬉しい、って気持ちが彼の肩に落ち着いた。
右腕の邪魔にならないように控えめに寄せた頭から、感じるセンセの体温。
「ひとりで逝かせたりしないから安心しろ」
何度だって助けてくれる。いつだって、どこにいたってセンセはあたしを助けてくれる。
逃げられないくらいだって分かってるけど、言葉が嬉しかった。
「……うん」
「あっさり頷いてるが、アッチの話だぞ」
「は？」
むくりと頭を起こして隣のオトコをまじまじと見た。
にやりと上がった口の端。からかう時のセンセの顔だ。
「ば、ば、バカァッ！！！！！」

「いつでも一緒に逝ってやる」
落ち着いた声が、どっちの事を言っているのか読み取れない。
でも多分。
重ねられた唇がいつもより少しだけ優しかったから。
きっと――ね。

<1>

夏合宿が終わって一週間後、インターハイの地区予選を男女とも無事に突破した。

お盆休みを挟んで残った二週間、あたしの受験勉強は集中モードに突入。

数式と漢字の羅列に拒絶反応が起こらなくなったのが一番の進歩だと思う。頭はパンクしそうだけどスタートが遅かったあたしは人の五倍十倍頑張ったって合格圏内に到達できるか微妙な感じだから。

「そろそろ昼飯食おうぜ、リオ」

「あとこのページだけっ」

家庭教師が告げる休憩にもまったを掛けるくらい、頑張ってる。

「頑張るねお前」

喫煙席は譲れなかったものの、本数はだいぶ抑えてくれているタバコの煙を吐き出しながら佐伯さんがしみじみ言った。

「勉強見てくれるのが、佐伯さんで良かったよ」

「彼氏にだって頼めば見てもらえただろうに。高校最後の貴重な夏休みを一日中オレと一緒とか、お前それでいーの」

ぴたり。

シャープペンを走らせていた手の動きが止まった。

「いいの。全然使えないからあの人は！　頭ん中ヤらしいことばっかりなんだもん。交換条件とか出してくる時点でホントダメ！！」

あたしだって残りの夏休みは、できればセンセと一緒にいたいしな……なんて可愛いこと思わなかったわけじゃない。一応ちゃんと聞いてみたんだけどさ。

『見てやっても構わんが、これから毎日ともなると体力的に厳しく

なるぞ』
　体力的、なんてどんだけハードな勉強方法を行うつもりだろうとゾッとした。
　ところがそこはやっぱりセンセっていうか。
『報酬はその日払い、指導後お前にきっちり払ってもらう』
　なんて交換条件を出してきた。
『払うって……あのーそれってまさか毎日ナニしようとかいうつもり？』
『それ以外何がある。帰宅時間を気にせずいられる休日を一緒に過ごして、抱かずに済ますとでも？　俺を誰だと思ってる』
　そこは偉そうに威張るところじゃないし！
　これが目に入らぬか、ってコンドームとか平気で出してきそうな雰囲気の彼にあたしはキレた。
『受験生の彼女を純粋に応援しようって気持ちがないわけっ！？』
『それ以前に、お前は俺の女だ』
　カッコよく切り返されてちょっときゅん、なんてしちゃったけど。
　まてまてまてまてぇぇぇぇぇ、ごまかされないんだからねっ。
『……じゃなくってさぁ！』
『だから大人しく佐伯に任せてろ。校内規模の考査じゃねぇんだ、その道に詳しい奴についてる方がいいに決まってる。お前の馬鹿さ加減は筋金入りだから、特にな』

　あの時は言うことに対していちいち切れて興奮してたから気付かなかったけど、実はものすごくあたしのことを気に掛けてくれてたんじゃないかって思ったんだ。
「結局仕事もあるから無理だってことが判明したんだけど」
　そのことを告げてきたのはマンションからの帰り際だった。
　だったら最初からそう言えばいいのに、あたしをイジメたいが為にそうしなかったあの人の根性ってほんっとドス黒だよ！！

「なるほど一応トライしてみたわけだ。ま、でも。自宅に彼女連れ込んでお勉強だけで済ます、なんてーことはあいつでなくても普通にないだろ」

「えっ、佐伯さんて実はセンセと同類!?」

珍しくセンセの肩を持つようなことを言う佐伯さんを、あたしはガン見してしまう。

口に咥えたタバコの先、チリチリとフィルターの先を焦がしながら、じっとあたしを見つめる佐伯さんと目が合った。

「あんな男と一緒にすんなバカ。オレは好きな女を自宅に連れ込もうって時点で、お勉強しようなんて思わないつーの」

だからそれって最初からやる気満々てことでしょ!!

あたしの手から、ぽろりとシャープペンが落ちた。

「そ、そんなキャラ!?　もっと常識ある大人で紳士だと思ってた!」

「は?　立派な常識人だろ。エサで妙な安心感与えた後に本性晒して襲うのと、自宅イコールそーいうことって初めから認識持たせるのと、どっちが紳士だと思ってんだよ」

前者がセンセで後者が自分だと比較して説明されたらもちろん……。

「佐伯さんの方がオトナだと思う」

「そーいうことだわかったか、おこちゃま」

ああだから佐伯さんは、わざわざ足を延ばして勉強場所にここを選んでるのかな。

――え?　でも待って。

あたし別に彼女じゃないんだから、家におよばれしても何の問題もないと思うんだけど。

……うーん……ということはつまり。

「でもあたし、別に汚い部屋とかでも全然気にならないよ?」

人を招くには躊躇ってしまうくらい散らかってるんだろう、という結論に至って告げると、今度は目を丸くした佐伯さんの指からぽ

ろり、タバコが落ちた。
「ちょっ落ちたよ！」
「お前の頭ん中で繰り広げられた思考の展開図が全く見えねー」
「え？　だからそれはさぁー」
説明を始めようとしたらタバコを拾いあげる佐伯さんに「いい、必要ない」と却下されて。集中モードも途切れてしまったので、昼食をとることにした。
「そもそも、大学受験なんてしなくてもお前には楽に剣道続ける方法なんていくらでもあっただろーに」
「それ今聞くことじゃないと思うんですけど。……あたしの勉強見るの面倒くさいって思ってるんでしょー」
ハンバーグセットにつけた大盛りライスからごっそり削ったご飯を口に放り込みながら、向かい側でシーフードグラタンに手をつける佐伯さんに尋ねた。
「思ってたらどんだけ金積まれても最初から引き受けたりしないって」
「またぁ。生活かかってるのに、そんな選り好みする余裕あるとは思えないんですけどー。お金絡まなきゃセンセからの依頼なんて受けない、って佐伯さん前に言ってたし」
「オレはリオのこと気に入ってんの。お前個人に対する依頼だったから金額交渉なしで引き受けてんだぜ？」
優しく微笑まれて、卑屈なあたしが顔を出した。
「……妹さんに似てるから？」
「菜摘？　あいつはひ弱で頭良かったし、モデルばりに背が高かったぞ」
割と気にして言ったつもりだったのに、しれっと真逆を指摘されてイラッとした。
「どーせあたしはバカぢからでおバカでチビですよぉーだっ」
「ばーか。全然似てねぇって意味。それにな、オレはあそこのバイトだけで相当稼がせてもらってるから、金に困ってもいない。で？

リオの決意の源はなんなんだよ」
グラタン皿にスプーンを差し込んで、佐伯さんは話を戻す。
「あたしさ、今まで剣道続けて来るのに楽しすぎたんだよね。近所に行けば道場あるし中学は部活でしょ？　推薦のお陰で高校受験もほぼ知らないような状態で簡単に続けられてる」
「でもそれは全部、お前の努力についてきた結果だろ」
「もちろんそうなんだけど。こう……なんていうのかな、剣道の為に別なところで努力するっていう機会がなくて、だけど実はそれってすごく大事なことなんだなって、この間の期末テスト騒ぎで実感したんだよね」
性悪な理事長代理の意地悪に屈したくないって気持ちもあったけど。
退学になってみんなと一緒に剣道が出来なくなるのが、すごく嫌だった。続けたい、って強く願った。
「苦労して有難みを味わったら、もっと楽しめると思わない？」
「どこまでも剣道バカなセリフだな。……まぁリオらしいっちゃ、らしいけど。そんな面白いか」
過去、特定の部活動を行ってきた経験がないと言う佐伯さんが苦笑いする。
「うん楽しいよ！　剣道は昔から唯一褒めてもらえる場所だったし。褒めて貰ったら誰だって頑張って続けたくなるでしょう？」
「結局のところの理由ってそんなかよ――やっぱガキだなぁ」
「どうせっ」
べぇ、と舌を出す。
佐伯さんみたいに何でも出来ちゃう人にはきっと分からないと思う。
チビでおバカなあたしが誰より輝けて、みんなにすごいって褒められる場所を得られたことは人生の中ですごく大きい出来事だ。
それに。
センセに出逢えたきっかけも、鬼教師だったセンセに優しい顔を

見せる一面があるって気付けたのも、剣道があったから。
「あたしにとってはすっごく大切な場所なんだもん」
剣道が繋いでくれるたくさんの縁に、心から感謝してるんだよ。

＜2＞

夏休みの部活練習に顔を合わせる三年の会話は受験一色に染まってた。

塾通いが大半で、家庭教師派はあたしとカイのふたりだけ。

「知らなかった。カイも家庭教師頼んだの？」

両親を亡くしているカイは現在親戚の家に住んでいるんだけど、社会人で従兄の後輩だっていう人に見てもらっているんだって。

「教師を目指してるっていう人でね、オレが目指す大学に友人がいるから色々情報もらえたりして助かってるよ」

「医学部だっけ」

「ん」

カイは佐々木先生からK大へ誘われたらしいんだけど、医学の道へ進みたいという希望を伝えて断ったっていう。合宿の時に真面目モードで話していたのはそれだった。

「カイは頭良いしさ、カッコいいし優しいし。すぐに人気のお医者さんになりそう」

「そういうとこ、梨緒らしいなぁ。でも、人気があってもヤブ医者じゃ話にならないからそうならないよう頑張るよ」

眩しそうに目を細めて笑うカイが、この休みの間にぐっと大人びた気がする。

“あいつ女でもできたか”

センセに言われた言葉がふと過る。

「あのさカイ……」

「あ、ごめん梨緒。諏訪先生に呼ばれてるからちょっと行ってくる」

広い背中を見送りながらあたしはちょっと反省した。

仮にもあたしを好きだって言ってくれてる人に、「彼女できたの？」なんていきなり聞くのは失礼だよね。やっぱりここはカイが自分から言ってくれるまで、黙っていた方がいいような気がした。

部室に向かおうと踵を返すと、高津くんが寄って来た。

出来れば近づかないでおきたいあたしは、自然と彼から一定の距離を保つ。

「露骨に距離置かれるとこっちのプライドが傷つんだけど。やめてくんない」

「よく言うよね！　自分の胸に手を当ててあたしに今までしてきたこと考えたら？　これくらいされて当然でしょ、口利いてもらってるだけありがたいと感謝しなさいよっ」

「手だして下さいと言わんばかりに隙だらけなのはそっちだろ。構われキャラだって自覚しなよ」

「か……構われキャラ？　高津くんの場合はねっ、構うとかいうレベルじゃないからね!?　隙があろうがなかろうが、今後一切あたしに手を出そうなんて思わないで欲しい」

途端に、高津くんが哀しげな顔をする。

（あれ？　言い過ぎた、かな。あたし傷つけちゃった？）

ちょっと申し訳ない気持ちになって覗き込むと、

「……寂しいこと言わないでよ、センパイ」

なんて甘えたことを言うから思わずどきりとしてしまう。

生意気顔が急に純情な年下男子に変化して。か……可愛いじゃないのよ。

見せるギャップに母性本能をくすぐられて、頭をぐりぐり撫でまわしたい気分になった。

悶々としているあたしの様子に気づいた高津くんが、続いて見せた“したり顔”。

「オレの暇潰しなんだからさ」

一瞬ア然。

次にはふつふつと湧き上がってきたイライラで、咄嗟に手が出た。

「高津のバカっ！」
「簡単に騙され過ぎ。たーんじゅん。やっぱバカ」
ぐわあああああっ。
心配して損したっ、どきっとして損したっ、可愛いなんて思った数秒前のあたしを自分で殴ってやりたい気分！！　ホントこいつわぁぁぁぁ。
「ところで知ってる？　橘部長がカテキョのセンセと付き合ってるらしいってハナシ」
上手いこと言ってあたしの気を逸らそうなんて……って。え？
「やっぱりホントなの！？　っていうか相手そうなのっ？」
まんまと興味をそちらへ持って行かれる。
「声デカイ」
「あ」
振り返った後方、こちらを窺うセンセとカイと目が合って慌てて背中を向けた。
「手繋いで歩いてるとこ見かけた部員もいるから、ホントなんじゃない。ガキっぽい誰かさんと正反対のタイプだって言うし？　そんな年上オネーサンと長い時間一緒にいればま、フツー？」
「……その“ガキっぽい誰かさん”ってひょっとしなくてもあたしのことかな」
「あんたの方はカテキョとなんかないの、彼氏の同級生設定とか面白いからどうにかなってよ」
人の話聞いてくれないかな、そんでもって勝手に設定で楽しまないで欲しいんだけどな。
「全然ないからそーいうの、残念でした」
「つまんねー」
だから楽しむなっ！！
もう一発、と思わずグーになった手を振り上げようとしたあたしの目の前に、高津くんが何かを差し出した。
手の平に乗った小さな部品がふたつ。それはどこからどうみても、

耳栓だった。
「……なんで耳栓？」
「勉強した中身落ちてこないように？」
手の込んだ嫌味かっ！！
とんとん、と自分の頭を指でつついて浮かべた皮肉っぽい笑顔の、憎らしいこと踏んづけてやりたいこと。踏み絵だったら何往復もしてやりたい、他人の分まで喜んで踏んづけてあげるし！
……こうなったらねぇ。怒りはぐっとお腹の底に押し込めて年上の余裕ってやつ見せてやるんだから。
「あたしを甘く見ないでよ、やるときはやるんだから。ちゃーんとがっつりこ・こ・に、収まってるの」
ぽん、と手の平で頭を叩いてみせた瞬間。まさかの、あろうことか、ぽかっと何かが抜け落ちた気がしたんだ。
「え？　やだ、今なんか忘れた気がする！　もう高津のバカッ、あんたのせいよ余計なこと言うからぁ！！」
ありもしない余裕見せようとしたあたしも悪いかもしれないけど！
肩を大きく震わせて、高津くんが噴き出した。
「あんたのバカっぽいとこって、バリエーション豊富だよね。他にどんなネタ仕込んでんの？」
がっちり人の頭を両手で挟んでくれちゃってさ？
左右にぐらぐら振ってみたり、叩いてみたり。完全におもちゃ扱い。
「うっさい！　目ぇ回るからやめてよ、触んないでっ！　これ以上記憶飛んだらどーしてくれんのよ」
「だから蓋しといた方がいいって言ってんの。ほら。しっかり忘れないように手伝ってやるからさ」
「ちょっ、バカ高津！　やめてって言ってるじゃん！」
半強制的に、耳栓をあたしにぐりぐり嵌めこみ始めた濃紺地の道着の腕にしがみついた。
すでに片方を詰め込まれて聞こえ方に違和感を感じている状態で、

もう片方の耳元に顔を寄せた高津のバカは言ったんだ。
「センパイ、好き」
ぎゃっ、と自分で上げた声が、くぐもった。
まるで声に蓋でもするようにぴたりと耳栓が突っ込まれ、あたしの両耳は完全に塞がれてしまったからだ。
ぐるぐると回る、「センパイ、好き」の声。
なに詰め込んでくれちゃってんのよ、ばかぁぁぁぁ！
耳の穴が小さいあたしは、異物を取り除くのに苦労した。
なかなか取れず四苦八苦しているあたしを、高津くんが愉快そうに眺めてる。そこへ突然ぬっと現われた長い脚。蹴り飛ばされた彼は思い切り前方に突っ伏した。
ざまーみろ。
爽快感に満たされながら嘲笑った後に「あ」と気付いたあたしは、あんぐり口を開けてしまった。
この脚の持ち主は見ずとも分かる、センセだ。
「……」
高津くんに何か言っているけれどよく聞こえない。
必死に耳栓を引っ張り出してようやく片方が解放された。
「ってぇな！！　教師のクセに生徒足蹴にしてんじゃねぇよ！」
「お前こそ生徒のクセに、教師の女に構ってんじゃねぇぞ。次はないと言ったのを忘れたわけじゃあるまいな」
「なんのこと」
白々しくうそぶいた高津くんの態度に、センセの表情が氷点下。
魔王モード発動だ。
ひいいいいいっ。
「教え子を堂々“教師の女”とか、キショ」
た……高津くんっ！　止めた方がいい、それ以上は黙ってた方がいいと思う！
「時任」
「は、はいっ！？」

あたしが手にしていた耳栓に目をやって、それをセンセがあたしの耳に再びねじ込んだ。
せっかく引き抜いたのに何してくれるんだと文句の一つも言ってやろうと思ったんだけど。
「……」
「……！」
「……」
続いた二人の表情から窺える会話の雰囲気が。なんだろう、聞かない方がいい気がして。
耳栓の上からさらに指でそっと押さえたあたしは、小さく小さくなっていた。

＜3＞

今日は部活を終えたら帰宅する予定だから、ランチに付き合えって。

夏の日差しがなくても十分目に眩しい、赤が映える高級外車へ放り込まれた時に聞いた気がする。ドアを閉じる手も乱暴で、高津くんとのバトルがまだ尾を引いてるようにも思えた。

運転席に乗り込んだセンセは、手にしていた携帯を閉じるところだった。どこかのレストランに予約でもしてたのかな。

「……どこ行くの？　あたし制服だから……高そうなとことかムリだよ？」

「うち」

不機嫌を顔前面に貼りつけながらエンジンをスタートさせる。ハンドルを握った手を、あたしはがっちり押さえこんだ。純粋に食事が目的（非常に疑わしいけど）だとしても、こんな様子で部屋に連れ込まれるのは危険だ。

「ちょっと待って」

「なんだ」

「……ちゃんと帰してくれる、よね。あたし午後から勉強見てもらう予定――」

「帰してやれるのは三日後、家庭教師は今日から休みにした」

「三日後ってなに！？　今日から休みって……勝手なことしないでよ！」

「報告を受けている進捗状況から俺が判断した。佐伯も了承済みだ」

「だから三日後って……」

どういうこと――。

説明を乞うあたしが押さえた手ごと振り切ったセンセに、助手席のシートに押し付けられる。

形勢逆転。がっちり顎を捉えられて顔の位置を固定された。見下ろす瞳が冷たい。
「部活も仕事もない恋人が自由になる時間を少しは喜べよ」
「あのね！　自分が暇だから付き合えって言ってるみたいに聞こえるんだけど。それじゃ、あたしなんて暇潰しだっていう高津くんと変わんな……」
「ふざけるな」
あたしの口を、薄い唇が塞いだ。久しぶりの感触。
「んっ」
重ねただけのキスなのに、押し付けられた力強さに肩が竦む。
「こっちには束縛する権利がある。それを認めているからお前の母親も、喜んで俺に差し出すんだろ」
「差し出すって……え？」
「責任を持って預かり受けた」
あ……あり得ないから。あたしが知らないとこで勝手に外泊許可貰うとか、信じられない！！
「その前にひとつ、確認しておきたいことがある」
ゾクゾクするのは、しっとりと濡れた唇を彼の指になぞられているだけじゃないと思う。
レンズの奥から覗く揺らがない瞳で捉えながら、指が首筋を下りて制服のボタンを外していった。下着の上からさわりと撫でた胸元。谷間で動きを止めて、彼は言う。
「ここにホクロがあることを、あの珍獣が自慢げに言ってきた」
あの状況でなんの話してんのよ高津くん！
「どういうことだ」
「え。前に部室に高津くんが入って来た時に――センセ、カイから聞いてたんじゃないの」
夏休み前、剣道部女子更衣室。着替え中にやって来た高津くんに下着姿を晒してしまった話だ。
カイが事情を話したって。だからペナルティを受けてランニング

していたグラウンドで、野球部を利用して嫌がらせしてきたんじゃなかったの？
「未遂だったと聞いてたがな」
……ああ、カイ。シャレにならないあの状況、上手く隠してくれてたんだ。
でもそれも、無駄になりそうだよ。ごめん。
「俺はオトナだからな。話は最後までじっくり聞いてやる。話せ」
すっと細められた眼鏡越しの眼差しに、全身の血の気が一気に下降した。
なにが“オトナ”よ。語尾の響きはほとんど脅迫だよ！
「――ということデス。さ、触られたりとかしてないから！　ホントに！」
「つまり。橘にも晒したってことになるな」
「た……多分」
「確実だろうが！」
「ごめんなさいいいいいっ！！」
見えない刃に貫かれながら事実を語るのもある意味拷問で。車内のエアコンなんて必要ないくらいの冷却効果。すっかり縮み上がったあたしを、これでもかと押し縮めてくるようなひと言がやって来た。
「ここで何回イカせて欲しい？」
「いいっ、いいっ」
ぶんぶんと、首を左右に振った。
「俺が聞きたいのはそっちの“イイ”じゃない」
シートを倒され封じ込まれた深いキスに、全身が疼いた。
少しだけ乱暴に胸を揉まれたのが気持ちいいなんて、あたしヘン。センセの変態っぷりに付き合わされてとうとうおかしくなってきたのかも。
吸い付いたり咬みついたりされながら、奥を探る指の動きに意識

は集中してしまって。狭い車内で続いた愛撫に声が我慢できなかった。

「センセっ……車、汚しちゃうっ」

「そんな心配する余裕がムカつくな。手加減無用か」

一気に二本増やされて三本になった指が、あたしのナカをぐちゃぐちゃにしていく。

「あああっ、ダメっ、センセ、やぁっ」

「食いついて離さないのはそっちだろ。離せよ、ほら」

愉快そうに弾んだ声が耳元で囁いた。

裏腹に、出入りする手の動きを速くしていく。その度に、意識とかけ離れたあたしの一部がぎゅうぎゅうと侵入者を締め付けて、無理だった。

「……いじわるっ」

「そんなに別のモノが欲しけりゃ、早くイっとけ。こっちもいい加減空腹を満たしたい」

どっちの話よ！

言う割に、散々焦らしながらの“たった一回”が長くてツラかった。

ホントこの人、ド変態なんだから！！

◇

あたしの方の空腹は満たされることなく、センセがひとりでお腹いっぱい。散々食い散らかされた部屋で目が覚めると、夜だった。

着替えるようにと用意された服。あたしらしからぬワンピースを手にして、彼に尋ねた。

「これからどこかに連れてくつもり？」

「察しがいいな。脳が刺激されてようやく人並みに活動始めたか」

いちいち余計なお世話なのっ！

「手を動かせ、そろそろ出るぞ」

服に見合った靴まで用意してあって、いよいよどこへ連れて行かれるのか不安になったあたしの視線の先。彼が手にした荷物に覚えがあった。

「それ！　あたしのカバン」

「ああ。母親からの貢物」

引き上げた口元。

一日中不機嫌だった今日の彼に初めて浮かんだ笑みだった。

再び愛車に放り込まれる時に気にして見た助手席のシートが、綺麗に掃除されていた。これはひょっとして、顔を合わせたことがない彼の使用人の働きによるものなんだろうか……。

そういえば、と。つい先程まで寝転んでいた寝室を思い浮かべる。彼が自分で汚れたシーツを洗濯するとも思えないので、あれもやっぱり同様なんだろう。

（なんかいろいろ大変そう……）

ラブホの清掃員紛いのことまでさせられている使用人に同情すると同時に、汚れをせっせと生産している側のあたしは、とてつもなく恥ずかしくなった。

「降りろ」

停車した車の助手席を開けてくれたセンセが言った。

「……ねえセンセ。本当にどこ行くつもりなの……」

見上げたそこには“空港”の文字。これから飛行機に乗るってことでしょ？

ゲート正面に待ち受けていた使用人らしき人物に車のキーを預けて、素通りしていくセンセの後を追う。

「今の人がセンセの部屋にいる使用人の人？」

振り返ったその人は、大きな体を折ってセンセの車に乗り込むところだった。

「いらん興味を持つな」

振り向きもせず言われて、それ以上の追及を諦める。

チェックインして間もなく搭乗した飛行機に乗って、数時間後。
「ってなんで温泉！？」
旅館の従業員が総出で出迎えるたいそう立派な温泉宿。
横付けされた車から降ろされたあたしは、叫んだのだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2999q/

Lip magic 2 ~sweet season~

2011年10月26日12時02分発行